
チート・トリップ

KEAG-B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チート・トリップ

【Nコード】

N2525V

【作者名】

KEAG-B

【あらすじ】

なんとなく、神様に呼ばれた普通の高校生の二人

チート能力を貰って、異世界にトリップ

プロローグ

目を覚ますとそこは真つ白な空間だった

「知らない天井だ」

取り敢えずこういう場面のお約束を言っておく

さて俺は友人と一緒に普通に帰っていたはずなのに何故か寝ていて起きたらこの空間だった。

辺りを見回すと一緒に帰っていた友人が眠っていたのでとにかく起こす

「おい、起きろ」

「ん……知らない天「もうやった」ちっ……何処だここ？」

友人も辺りを見回す

「知らん、でもここはおそらく神か天使の類いが出てくるだろ」

「テンプレだな」

「君たちはかなり落ち着いているね、普通はパニックになりになるはずなのに」

おそらく神が現れた

「お生憎さま、此方はそういう小説とかをよく読んでな……あなたが神か？」

「そうだよ僕は神だ」

「で、神様…俺達は転生でもするのか？ 特に死んだ記憶も無いんだが？」

「ああ、それはね君たちがチートとか異世界に行きたいとかの話をしていて、僕も暇だからちようど良いと思って呼んだんだ」

「じゃあ俺達はチート異世界転生出来るのか」

「死んでないから転生じゃなくトリップなんだけどそうだね、因みにもう君たちの居た世界では、君たちは最初から存在して無かったようにしたから後戻りは出来ないよ」

「で、どんな世界に行くんだ」

「えーと、そうだな簡単に言えばドラクエとFFを足して割った感じの世界かなあと、レベル設定もあるよ。」

「レベル設定？」

「そ、レベル設定。君たちが敵を倒したり体を鍛えたりしたらポイントが入ってだんだんレベルが上がっていくんだ。そして、それによって君たちの身体能力等のステータスが上がるという訳だ」

「へー…初期ステータスや成長率はどうなるんだ？」

「ステータスは君たちの現身体能力等を数値化して自動で出される。成長率は1レベルで5%だ」

「おK大体理解した後はチートというからには何か能力を付けてくれるんだろ？」

「うん、そうだな…能力は一人五つにしようか」

五つか……何にしようか…最近読んだ漫画とかで良いか

「俺は、まず、ブリーチに出てくる武器技能全て使用可能、金色のガッシュ・ベルの呪文全てとアンサートーカー使用可能、後は鋼の錬金術師の錬金術・鍊丹術を真理解状態で使用可能、武装錬金の核鉄を全て精製と使用可能、最後にとある魔術の禁書目録の10万3千冊以上の知識と全魔術・術式・霊装使用可能で大丈夫か？」

「いけるけど、チート過ぎやしないかい？」

「良いんだよ、出来るなら早くしてくれ」

すると神は手を向けてきた

「じゃあ送るよ……………ふう、オマケで錬金術は触るだけで成分とかを理解出来るようにしといたよ」

「ありがとう」

「で、君はどうする？」

さてこいつはどんな能力を選ぶかな

「俺は、めだかボックスの異常を全てON／OFFありと同じくめだかボックスの過負荷を全てON／OFFありで、後はFATEの王の財宝で全て真名解放あり、ワンピースの覇気三種類全て、最後は刀語の全技能使用可能」

なん……だ……異常と過負荷って合わせると全部で一京を超してたよな……オマケに刀語の見稽古あるし……勝目ねえ

「チート過ぎる……取り敢えず送るよ……ふう、特にオマケも無いけど良いよね？」

「はい、もう十分です」

「すいません、神様、俺の能力関係の物や習得技能はこいつの能力で無くしたり真似出来ないようにして下さい。じゃないと完全に勝目が無いです」

「ええ構いませんよ。」

でもいざ勝負になると不慮の事故でダメージないんだよね

「では、そろそろ異世界に行ってもらいます。最初はステータスの関係で能力は余り使えませんが頑張ってください。後、向こうでの目的はこれを見てください」

そして何かを投げてくる

これは…スマートフォン？

「じゃ……………逝ってらっしゃい」

パカッ

「「え……………」」

ヒューー

「このパターンかあああー！！」

「やっぱ、テンプレだな」

一話目（前書き）

よろしくお願いします。

KEAG-Bです、文才は無いですが頑張って行きます。

一話目

目が覚めるとそこは森の中の少し開けた場所だった。

「着いたみたいだな」

「そうだな」

「さて、これからどうするか？」

「確かスマートフォンに何かこの旅？ の目的が出るんじゃないかな
たか」

言ってたな…そんなこと、スマートフォンを取り出すと

p i p i p i p i p i p i

どうやらメールが来たようだ

スマートフォンはタッチパネルで操作するんだよね？

いままで使った事がないからよく分かん

取り敢えず適当に触ってみるか

ポチポチ……………スマートフォン操作中……………ポチポチ

よし、出来たな

え〜とメールの内容は？

【f r o m, 神

このメールを読んでいるという事は無事着いたようだね。

さて、君たちにはそこである冒険をしてもらいます。

その内容は七つの大罪を司る魔王を全て倒し、その上にいる魔神を倒す事です。

おそらくレベルが上がれば完全なチートになってしまおうと思います
が私はその過程を楽しませてもらいます。

それでは頑張ってください。

P S,

スマートフォンには幾つかの便利なアプリを入れているので使いこなして下さいね

追記

君たちの名前は消してしまったので新たに考えて付けて下さいね（容姿も変わっているよ）」

いろいろと突っ込みたいがまあ良いだろう、しかし名前か……………確かに思い出せん

「ソッチも読み終わったか？」

「ん、ああ読んだぞ……………つか、お前の格好まんま球磨川だな」

「『そう言う君は』『完全に武藤 カズキだよ』」

どーやってしゃべってんだよ』』の部分、それにいきなり話し方を球磨川風にするなよ

「そーか俺はカズキの格好なのか、それでお前は名前はどーするんだ？」「『そうだなあ』」

『僕は異常も過負荷も持っているし』

『魔王を倒すなんて』

『平和のために暴力を振るうことだろ』
『だから僕は偽りの善として』
『‘ギゼン’とそう名乗るとしよう』

前置き長いな……

「ギゼンねえ……俺はそのまま‘カズキ’で良いや」

「『随分と安直だね』

『でもその方がいろいろと良いか』

『じゃあ、改めてこれから宜しくね』」

「ああ、宜しく」

挨拶や容姿確認も終わったし次はステータスと能力か両方スマートフォンに入ってるよな

「なあ、このスマートフォンの取り扱い解るか？ ステータスとか確かめたいんだけど」

「『ステータスはこのマークをタッチしたら出るよ』
『ついでに能力はステータスから』
『入る事が出来るよ』」

「そうか、サンキュー」

えーと、このマークだな、てかこのマークって何を表しているんだ？
形を言葉で形容出来ない……………
まあ良いかタッチと

ピッ

「おおー、出た出た……えー何々まずは名前入力か」

カ、ズ、キ、

とこれで良いのか

【ニンショウシマシタ

コレカラ、カズキサマ、ノステータスヲヒョウジシマス】

何故に全て片仮名？

このスマートフォン大丈夫か？

【大丈夫だ、問題ない】

.....

よしステータスも能力も確認したし出発するか

「じゃ、行くか」

「『そうだね出発しようか』」

これからどうなる事やら

人物設定（前書き）

う 後、ストックが三つ程、ストックが尽きたら更新が不定期になりそ

人物設定

人物設定やら能力ステータスの確認です

カズキ

16歳

容姿

武装鍊金の主人公の武藤 カズキとほぼ同じ

能力

ブリーチの全武器・技能

金色のガッシュの全呪文とアンサートーカー（ON／OFFあり）

武装鍊金の全核鉄の精製と使用可能

鋼の鍊金術師の鍊金術と鍊丹術を全て真理解状態で使用可能

とある魔術の禁書目録の10万3千冊以上の知識に全魔術・術式・
霊装の精製・使用可能

ステータス

フィジカル 68

メンタル 63

備考

異世界にチート転生したいと友人と話していたら、神様の暇潰しのために呼ばれ、異世界にチート能力を持ってトリップした。

フィジカルはそのまま身体能力を表す

数値が68で速さがだいたい50メートル走を6, 5秒位で力がバ
ーベル上げ50kg上げれるほど

高くも無く、低くも無い、

一般の中の上位

メンタルは精神力と頭脳を合わせた物を表す

63も中の上位の値

ギゼン

16歳

容姿

作中通りめだかボックスの球磨川 禊とほぼ同じ。だが、刀語の骨肉細工等で自由に変える事が出来る

能力

めだかボックスの異常全て（ON／OFFあり）

めだかボックスの過負荷全て（ON／OFFあり）

ワンピースの覇気3種類全て

FATEの王の財宝を真名解放ありで使用可能

刀語の全技能使用可能

ステータス

フィジカル 52

メンタル 58

備考

同じく神様に呼ばれてチート能力を手に入れてトリップした。

ステータスの値はカズキの備考の値と相対的な物と考えると下さい

二話目

歩いていたらあることに気付いた

「なあ、出発したけど具体的には何処へ行く？」

そう、目的は分かっているが目的地が全く分からないのだ

「『そんなの知らないよ』

『でも』

『こういうのはだいたい』

『ただ歩いているとモンスターや旅人に出会って』

『バトルをしたり街に着いたりするものだからね』」

「いや、まあゲームとかではそうかもしれないけど、実際問題もし、
モンスターと遭遇したらどうする？」

なんか、こいつ口調を真似していたら段々性格が球磨川みたいにな
ってないか？ ……………考えるだけ無駄か

「『僕は過負荷も異常もどちらにしろ』

『今の所は同時には出せないし』

『ものによっては負担が大きすぎて使えないね』

『覇気もまだ無理だし』

『王の財宝は普通の剣を二本が限界だね』

『刀語の技は体が追い付かないから使えないしね』

『ここは使える異常と過負荷と普通の剣でやるしかないね』」

「そうか、相変わらず長いな……俺の方は鬼道は無理で斬魂刀は浅打だけ、呪文も大体第一のやつだけそれ以外は全部無理だ。」

あれ、これって勝てるのか？ 俺達って特に武術とかはやってないけど……まあ俺は野球部で体を鍛えてたし、こいつも過負荷がありや大丈夫だろ物は試しにモンスターと戦ってみるか

「なあ、試しにモンスターと戦ってみないか」

「『うん』」

『僕は別に良いよ』」

「よし、なら探すか」

……………モンスター搜索中……………

「居たぞ」

「『居たね』」

見つけたのはスライム、序盤の経験値稼ぎの定番だ
な数は三体か

「浅打」

一般隊士がもつ普通の斬魂刀をよぶ

「『じゃあ、いくよ』」

「ああ」

モンスターを倒す事だけを考える。

元の世界では虫を殺す位はしたけど、こんなサイズの生き物を殺すのは初めてだ（スライムは高さは膝位）

その場から駆け出し、その勢いのままスライムの一体に斬りかかる。

「ふっ！」

ドプッ

……………え？

「はぁ〜？ 埋まった！？ てか抜けねえ」

「『あらあら』

『大変そうだね』

『どうやら物理的な攻撃は効かないみたいだね』」

「いやいや！ 序盤の敵でいきなり物理攻撃無効はやバイだろ！
クソッ、こいつ刀伝って来やがる。 ちっ」

慌て刀から手を離しバックステップで距離をとる

そしてスライムに手を向ける

「『ザケル』」

バチバチバチバチ

その呪文を言うと手から雷が迸りスライムを焼いていく。

「倒した〜」

焼けたスライムは光の粒になって天に昇って逝かずに俺に取り込まれた。

「おお〜 こうなるのか、そっちはどうだ？」

ギゼンの方を向くと、スライム（B）に顔を覆われているのにも関わらず、普通に立っているギゼンとその近くでなんとなく苦しいように震えているスライム（A）がいた

ついでに今倒したのはスライム（C）

取り敢えず言いたい。

「なんでさ……」

つい、某正義の味方見習いの台詞を呟いた

暫くすると顔のスライム（B）がボトリと落ちて光の粒になって天に昇って逝った

あれ？ 取り込まれないのか

「『終わったよ』

『でも』

『そこにいる奴は倒しといて』」

「分かったよ… ‘ザケル’」

そして倒したスライムはやっぱり光の粒になって俺に取り込まれた。

何かしらの理由があるのか？

「なあ、どうやってスライムを倒したんだ」

「『簡単だよ』

『不慮の事故で』
エンカウンター

『僕の窒息死を（B）に押しつけたんだ』

『息苦しさとかは（A）にだけどね』」

えっ………それって無敵じゃね？

「なら、なんであの光はお前に取り込まれなかったんだ？　もしかして自分が直接倒すとかか？」

「『そうかもしれないね』

『僕のは殆んど（B）の自殺みたいなものだしね（笑）』」

そうか……でも、それって

「お前、レベルアップ無いんじゃないね」　「『それもそうかもしれないね』

『うーんやっぱり』

『こういう話では』

『レベルが上がった方が面白いから』

『普通に倒した方が良いのかな』

『うん』

『そうしようレベルは出来るだけ上げていこう』」

自己完結したな

「なら、当面は、拠点となる場所の決定、レベル上げ、情報収集、だな」

「『良いんじゃないかな』　『いや』

『良いねそうしよう』」

「よしっ、となるとさっさと森を抜けて町なり村なりを探すか」

「『おおー』」

.....青年二人移動中.....

五時間後

ようやく町らしきものに着いた

「着いたな」

「『着いたね』」

『ところで今までの苦労が』

『ごっそりと抜けてる気がするんだけど』」

「さっ、入るぞ」

気にしたら負けだ

「『あれ？』」

『無視？シカト？スルー？』

『酷いな〜』

『当然の疑問なのに』」

町に入り、宿屋の前に来て重大な事に気付いた。……それは……

「金が無い……………」

そりゃそうだ、普通モンスターが金なんて持つてゐる訳がない、倒しても光の粒になるだけだ。

「『お金ならあるよ』

『ほら』」

ジャラジャラ

と手の中で金貨を揺する

Why?

「なんで持つてんの？」

「『王の財宝から取り出したんだ』」

入ってそうだな、あの金ぴか王の能力なら「『ほら』」

『入るよ』」

と言いながら一人で入って行った

宿屋ではいくらか騒動があったが大したことでは無いらう。

手順で言うと

金貨を出す

←

宿屋の主人卒倒

←

主人の奥さん登場

←

金貨を見て狂喜乱舞

←

俺咄然、ギゼンニコニコ

←

カオス

とこのような事があった、後から聞くとあの金貨は、この宿屋を新築改装出来るだけの価値があったらしい。

起き上がった、主人はとても良い笑顔でこの宿屋の一番高い部屋にいくらでも居てくれてもいいと言ってくれた。

これで、拠点は確保出来たし、後はしっかりとレベル上げをするだけだな。

疲れたし寝るか。

べ、別に終わり方が思い付かなかったんじゃないんだからね。

キモいな、本当に疲れてるだろうな、

「お休み」

「『お休み』」

三話目（前書き）

とりあえず、今日の文は終了です。
次の話は来週には仕上げたいと思います。

三話目

この町に来てから大体一ヶ月が過ぎた。

大変だったことが色々あった、モンスターを倒したり、訓練をしたり、クエストや依頼をこなしたりと、本当に色々あった。

しかし、そのおかげで俺はレベル60まで上がった、（ギゼンはレベル45）

あれから能力は斬魂刀は殆んど始解は出来るようになったし、呪文や鬼道もそこそこ高威力のものを使えるようになり、錬金術系も核鉄も幾つか作り武装錬金も使える。魔術だけは手こずり殆んど出来ない。

あ、後は盾舜六花は髪止めではなく、イヤリングにして着けている。核鉄もギゼンに暗器使いのスキルを教えてもらい、身体中に隠している。

今の所は俺の状態はこんなものだな、

ギゼンは過負荷も異常も大体使えるし、覇気も見聞色は使えるが他は今一、どうやら‘完成’（ジ・エンド）でも自分の能力は無理らしい、虚刀流は奥義を幾つか使えるらしい。

王の財宝はBランク宝具を出すことが出来るらしい。

らしい。の理由はあいつ大概過負荷で終わらせるからな。

一回、俺がレベル30位の頃に模擬戦闘したんだが………とりあえず回想いこう…

~~~~ある日

「なあ、一回模擬戦してみね？ 不慮の事故なしで」  
エンカウンター

「『いいよ』

『別に暇だし』」

そして、とある開けた場所に着いた。

「いくぞ、散れ、‘千本桜’」

隊長格の斬魂刀です。はい

「『スカーデット致死武器』」

ブシューー

「ぎやあああああ」

終了

……………という事があった。

マジで死ぬかと思った。でも、そのおかげか一気にレベルが上がった、この体自体がチートじゃないかと最近思い始めた。

情報収集の方でも分かった事がある。

まず、モンスターは町から離れる程強くなるらしく、経験値のような光の粒も色、サイズ、量が変わってくる。

細かい所の説明は面ど……ややこしいので省く。

さて、大体の現状報告は終わったし、今何をしているかというと

「ふはははは！ 人間風情が、この‘マモン’に挑もうとは、身の程知らずもいい所だな」

強欲を司る‘マモン’と対峙しています。

いきなりですが、魔王の情報が入ったのでその場所に行き、城があったので

Let's スニーキングミッションで段ボール被っていたら。

魔王の配下らしき悪魔に見つかり、咄嗟に撃破　しかし増援 数の  
暴力 逃走 手近な扉に隠れる 魔王の部屋 さっきの台詞 とい  
う感じ　しかもギゼン<sup>ミスターアンノウン</sup>は知られざる英雄で気配消すし………回想  
や説明ばっかで話が進まないし……OTZ

## 閑話休題

とにかく、目的の七つの大罪の魔王に遭遇、これを倒せば良いんだ  
が……さてどうやって倒すか。

「どうした、怖じ気付いて動くことも出来ないのか？　所詮は人間、  
持っている金品全て渡せば命だけは助けてやるぞ」魔王のくせに台  
詞がやけに小物の盗賊っぽいな、ギゼンも居ないし一人で倒すか。

「武装錬金・サテライト13（サーティーン）」

本物は30体に分裂出来るけど俺には今の所13体が限界だ

「さあ、来い人間！　格の違いを思い知らせてくれるは！」

「散在する獣の骨　尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪　動けば風　止まれば  
空　槍打つ音色が虚城に満ちる　破道の六十三　‘雷吼炮’」×13

ドドドドドドドドドドドドオオオオオオオン

「グハアアー!!」

結構な威力が出たな……魔王吹き飛んじまったし。

あっ分裂消えた、やっぱり長時間は無理か……疲れたし帰ろ。

「ククク……人間風情がやってくれたな……良かろう、魔王の本当の力を——ゴペラッ」  
ドスッドスッドスッ

ネジがいきなり飛んできて魔王に刺さった。

「『敵が一人だけだと思っていたの?』」

『それとも偉そうに喋っていたら攻撃されないんでも?』

『甘い…甘過ぎるね』

『まるでパフェに練乳をかけて粉砂糖まぶして蜂蜜を絡めた位甘いね』」

ギゼン登場…そして、甘すぎだろ……もはやパフェの味もしなさそうだな

「『『けど』」

『その甘さ…嫌いじゃねえぜ』」

何故、そこでいい台詞を……雷吼炮の影響とネジだらけの姿は中々にシュールなんだが……

それよりも魔王……偉ぶただけで攻撃も一切無しでやられるとは……魔王が弱かったのか……俺達が強かったのか……作者に文才が無かったのか……

ドカッドカッ

うお！ 危ねえ……いきなり何処からともなく剣が降って来やがった。

「まだだ……まだ終わらんぞ！」

魔王が黒焦げで体にネジが刺さった状態で立ち上がる

「うげっ……まだ動くよこいつ……ゴキブリ並の生命力だな」

「『でもね』

『ゴキブリって新聞紙を丸めたので叩いたら死ぬよね』」

そう言われると大したことないように思えるな

「で……どうする？　これ……」

「『殺っちゃえば?』」

正論なんだが……

「魔王を嘗めるなー! ‘デイメンションバースト’ー!」

空間が歪み、そこから黒い波動のようなものが現れ襲いかかってくる

「武装錬金・シルバースキン」

俺の体を防護服が覆う

「『不慮の事故』」  
エンカウンター

ドゴオオオオオオオオオン

黒い波動が部屋に溢れ、辺りを破壊する



「やったか」↑（生存フラグ）

「これを喰らって生きている人間などいる筈がない」↑（生存フラグ）

「ふはははははははは、やはり人間などが魔王に勝てる訳が無いのだ」

「あんだけ生存フラグ重ねといて、死ぬわけないだろ」

「なっ！」

ぷっ、すっげー間抜け顔

「『あはははははは』

『そうだね』

『そんな事よりトドメはどっちがやる？』

「二人共……無傷だと」

「俺が殺ってもいいか？試したい奴もあるし」

「『別にいいよ』」

「サンキュー、いくぞ魔王……第四の術……バオウ・ザケルガ」

巨大な雷の龍が出現する

「行け」

「バオオオオオオオオオオオオオオ！！！」 「グアアアアアアア」

バオウ・ザケルガを喰らった魔王は消し飛んだ。そして、黒い光の粒だけが残り俺とギゼンに取り込まれた

「倒したな……ふう……かなり疲れた……」

サテライト13に雷吼炮13発分に……ノリでやってしまったバオウ・ザケルガか……やり過ぎたな……

キラッ

ん、なんだ？

魔王の居た場所に宝石のようなものが落ちていた

「『なんだいそれは』  
『戦利品とかかな』」

「わかんね……宝石かなんだとは思っけど……」

p i p i p i p i p i

「むっ……メールか」

ポチポチ

【f r o m 神

やあ久しぶりだね、とにもかくにも最初の魔王撃破おめでとう。  
今、手元にあるのは大罪の結晶だよ、魔王を倒した証みたいなもの  
さ、他の魔王を倒しても似たようなものが手に入るから。

それにしても、魔王をほぼノーダメで倒してしまったね。  
しかし、それでは余りにも面白くないから魔王の強さを少し……いや、かなり補正しとくから、頑張ってね。

おそらく最高でマモンの100倍くらいにするつもりだから。

P, S

大罪の結晶はそれ自体が相当のエネルギーを内包してるから好きに使って良いよ】大罪の結晶………ネーミングセンスねえ

いや、それよりも今はとにかく帰って寝たい

「なあ、考えるのは後にして、とにかく帰らないか？」

「『そうだね』

『一応ここは敵地のど真ん中みたいな場所だしね』」

そして、ボロボロになった魔王の部屋から出た

すると、そこには………ざろざろと大量のモンスターがいた

「魔王様の仇だ」

「ぶっ殺してやる」

「面倒臭せ」

「此だけの一治相手に仕切れまい」

「ギャギャギャギャギャ」

「うほっ！いい男、やらないか」

「キリキリキリキリキリ」

「よくも散々逃げやがったな」

「ゲッヘッヘッヘッヘッヘ」

かなり五月蠅いな……それとなにやら不審な声も聞こえたが……気にしたら負けだな

「どうする？ この数」

もう、こっちはかなり疲れた

「『僕が相手をするよ』」

そう言い両手にネジを構える。

「『ほら』」

『いくよ』」

そこからはギゼンがただネジを投げ続けるだけで終わった。

「『ほらほらほら』」

「ちよっ、何処からそんな量のネジを——ぐべら」「いやいや、

ネジを投げるスピードおかしい——あべし」

「ギヤギヤギヤギヤギヤー」

「うほっ！受けよりせ——ひでぶ」

「バカな、バカな、バカな——ばべら」

「面倒臭せ——ごはっ」

「『あははははははははははははははははほらほらもつともつと』

うん、無事に終わって帰って寝た

## 四話目

———マモンを倒してから更に三ヶ月程が経過した。

えっ、飛びすぎ？

延々俺等がモンスターを狩りまくったり、鍛練したりしたのは書くまでも無いだろ。

嘘です。すみません、作者が早く身体能力もチートにしたかっただけです。

### 閑話休題

そんな訳で今の俺のレベルは152、ギゼンは98

レベル差の理由はサテライト30（サーティ）でぶっちゃけ鳴門の影分身みたいに鍛練とかしたから。

でも、レベルが上がって、恐ろしいことに気付いた。

成長率がレベル1に対して5%は現在1,05の150乗………およそ初期能力の1508倍………有り得ない………100乗だと131倍………ギゼンの十倍以上の身体能力をしています。（マモン対戦時レベル60およそ初期能力の19倍）

チートって際限ないねゝ

能力も斬魂刀は全て卅解可能

ガッシュの呪文も、‘シン’も含め全使用可能

武装錬金も核鉄を100個作り全てを使えるようになった

ハガレンの方は全て出来るが発火布を使った焰の錬金術をメインに使っている 魔術はそこそこ、本当にそこそただけ使えた

で、今はもう十分に鍛えたので次の魔王を倒すために四ヶ月も居た町を出ることにしたんだが……

「『ぼーーーーー』」

と、やけにだらしくギゼンが、‘ぼー’、としている「何故に、そんなにやる気がないんだ？」

「『いやだってね』」

『この三ヶ月で僕は刀語に出てくる虚刀流・全刀流・真庭忍法全てをマスターしたのに』

『その苦勞の過程が全てすっ飛ばされたんだよ』

『そりゃやる気もなくなるよ……』」

「それがキングクリムゾンってな感じで事を運ぼうとした代償だ」

過程を求めず結果を出す

「『……………』」

『はぁ……………』」



『……………』

なんなんだよ、その間と溜め息は？

「そらそら、さっさと行くぞ、ここから200キロ程離れた場所に魔王が居るらしいから、まずはそこに向かおう」

「『別行動しない？』」

……………What？

「突然何？

今までの文脈からしてその言葉はおかしいだろ」

「『だってさ』

『どちらか一人でも十分なんだし別行動の方が効率良いんじゃないかと思って』

『だからそれぞれが別れて魔王を倒す』

『その方が早い』」

「むう……………」

確かに効率は良いし、もう全てがチートだし……………

「…………分かった…そうしよう…でも魔王を倒したらお互いに報告はしよう、それに別れるならどうせだし競争しよう……………どちらが多く倒せるかを」

「『いいねでも』」

『ルール無用では過負荷には勝てないよ』」

「上等」

「それではよい 『スタート』」

それと同時にギゼンは消えた

「負けられないかな」

そして、俺も走り出した

## 五話目

オッス！ オラ、カズキ

……………ごめんなさい、やりたかっただけです

今は走って目的地の魔王居場所に向かっています  
マッハ30で…………

おっと、説明してる内に着いたな大体20秒かったな  
本当に人間辞めてるよな…俺……

……………よしっ、立ち直った。

そんじゃ、魔王の居るらしい目の前の城（適当に思い浮かべてね）  
に入るか

扉に手をかけて開けようとすると

ガチャガチャ

鍵がかかってました

うーん……どうするか方法は

1. 扉を壊す
2. 別の場所から侵入
3. 帰る
4. 城ごと全て破壊
- ↓5. ノック

5だな、てか俺の思考は大丈夫か、かなり物騒な選択肢があるんだが

とりあえずノック

コンコンコンコン

「すみませ〜ん、三〇屋で〜す」

ガチャ

開いたよ……

「なんだ？」

中からはモンスターちっくな人？が出てきた

「あつ、どうも○河屋です、ご注文も承りに来ました」

「ふざけているのか、人間がなんの用だ」

「いや、ですから注文を」

「そんな話は聞いた事が無い、さっさと帰るか、ここで死ぬかどちらにする」

「で、ご注文は？」

レッツスルー「……………死ね」

言いながら、いきなり殴りかかってきた。

とりあえずかわす

「簡単にキレんなよ」

お前あれか……ゆとりか、短気は損気って昔の偉い人は言ってるんだぞ」

「うおおおおお」

構わずどんどん殴ってくる

別にかわさなくても鋼皮イエロがあるからダメージないんだけどね（笑）

「笑ってんじゃねえー」

「うぜえ…、グラビレイ、」

「グペツ」

重力で押し潰した

「なあ、聞きたい事が有るんだけど」

「誰………が話す………か」

パチン

重力強化

「ぐぬぬぬぬ」

「なあ、聞きたい事が有るんだけど」

「何を……されて……も言う筈が……無いだ……ろ」

パチン

……

「つまり、今ここには魔王は居ないと」

「はい、そうであります」

素直に話してくれて良かった、良かった

「んじゃ、今はどこに居るんだ」

「はっ、恐らくは魔王様が作られた海上神殿ではないかと」

「それはどこにある」

「この城から真っ直ぐ西に行った海岸から見る事が出来ます」

「ふむ……………」

海上神殿…………つまり海か…………てことはここの魔王はレヴィアタンかな…………確か司る大罪は嫉妬だったかな…

「もうよろしいでしょうか？」

「ん、おお…………ありがとうな色々教えてくれて…………じゃあ…………そろそろ死んでくれ…………‘虚閃<sup>セロ</sup>’」

「え？」ドーン

モンスターちっくな人？は消し飛んだ

「さって…………この城にはもうモンスターしかないだろうし…………やっぱり、城ごと殲滅するか…………はあ…………どうしょ」

神殿は後回しにして城の探索しようかな…………

いっそモンスター全部‘賢者の石’にしてしまおうかな…………うん、そうしよう‘賢者の石’を精製しよう

そうと決まれば早速城の周りに錬成陣書かねば



カキカキ……………錬成陣製作中……………力  
キカキ

よしっ、書き終わった、んじゃ

パンツ

ドン

手を合わせて地面を叩くすると、錬成陣が輝きだし城が紅く染まっ  
ていく

バチバチ

コロン

輝きも次第に収まり手元には紅い石、賢者の石、が落ちていた

「出来たか……………人間に換算すると約500人分だな……………こん  
だけの命奪っても罪悪感が全く湧かないな……………元からの俺

の性格か………神の補正か………まっ、戯言だな………城でも探索するか………」

そして、再び城に入っていく

役に立ちそうな物、金になりそうな物を片っ端から取っていく

魔王を倒すのを目指す正義の味方のする事じゃ無いな

いや、でもRPGの主人公って民家にも不法侵入して勝手に色々としてるよな

………粗方とったし次は神殿に向かうか西に真っ直ぐか、海が見えるまでとにかく走るかそこまで遠くはないだろ

そして、西の方にある森に入っていく

……迷った……迷った……

マジどうしょ、遭難とか洒落にならん

なんか役に立つ能力とかなかったか？

1. 適当な方向に虚閃<sup>セロ</sup>を撃つ
2. 焼夷弾<sup>ナバーム</sup>の武装錬金・ブレイズ オブ グローリーで森を焼き払う
3. 錬金術で磁石を作り方位を知る
4. ふて寝

相も変わらず俺の思考は大丈夫なのか、それとも、<sup>アンサー・トーカー</sup>答えを出す者が、  
がおかしいのか？

閑話休題（↑良く使うなこれ）

方位磁石を作り無事に海まで辿り着けました。

神殿は……あれだな、水平線ギリギリに見える（今の視力はマサイの人より見えます）建物だし

「よし、武装錬金・ディープ ブレッシング」

サブマリン  
潜水艦の武装錬金を呼び出す

「多分、登場機会これだけだけど頼むぞ」

潜水艦に乗り込み神殿に向けて発進させる

フォン      フォン      フォン

「……………暇だ…………」

「『そうだね』」

「……………は？」

なぜ、居るし？

「どうやって乗り込んだ？」 無駄かなと思いつつも一応聞いとく

「『えゝやだなく僕にとって』

『物理的科学的空間的心理的自然的時系列的障害なんて』  
『在って無いようなものだよ』」

「さいですか…」

別れてから5ページ程しか経ってないのにな

「『でも安心してね』

『今回の魔王に関しては僕は手を出す気は無いから』  
『只の傍観者気取りだからね』」

「手を出さないのか、一応競争だぞ」

「『うん』

『なぜなら僕はもう怠惰を司る魔王』  
『ベルフェゴールを倒したからね』  
『ほらこれが大罪の結晶だよ』」

そう言いながら何処からともなく宝石のような大罪の結晶を取り出し見せてくる

「早っ！ 別れてから一時間も経ってないぞ」

「『いや〜』」

アリバイブロック

『腑罪証明で適当に移動したら魔王の目の前でさ』

エクスカリバー

『魔王も寝てたし、約束された勝利の剣』で問答無用に消し飛ばした』

『これも運命崩しとかの幸運の能力のおかげ…いやせいなのかな』  
『それにコレの効果かなんなのかやる気が出ないだよね』

フォン      フォン      ピー

「……………着いたな、さっさと魔王を倒すか」

もう……………競争とかやめようかな……………

## 六話目

——— 神殿内

神殿の内部は円形で中心が入口反対側の海と繋がり水平線が見えるが………

「居ねえ」

レヴィアタンは影も形も無かった

「『『どうする』』」

『また出直す?』」

「いや、待つ。てか、呼ぶ」

「『『どうやって?』』」

「こうやって、霜天に坐せ、氷輪丸、」

氷の龍を出し、辺りの海を凍らしていく

「こうすりゃ、耐えきれなくなって出てくんだろ」

「『短絡的というか無茶苦茶というか……』」

『一言で言えば……馬鹿だね』」

「うっせえ」

ギヤオオオオオオオオオオオオ

「来たかな……」

バキバキバキバキ

「何ヲスルカ小サキノヨ」

現れたのは巨大な海蛇………というかもはや、海竜だった



「でっけー！

流星、神自ら最強の生物であると認められた悪魔」

「何故我が海ヲ凍ラセタ小サキモノヨ」

「いやー、城に行っても居なかったから、こっちに来たのにまた、居なかったからついな…つい」

「『なんだか君もだんだんキャラが変わってきているよ』

」

「うるせえうるせえ、お前だって能力あんだけ貰っというて使ってるのは過<sup>マイナス</sup>負荷だけじゃねえか、もう他の能力がなんだったのかすら忘れかけてんだよ」

「忘れかけだど……こっちはキングクリムゾンしたせいで出来た空白の三ヶ月の間に、虚刀流、真庭忍法、全刀流、千刀流、etc を全て習得・完成させたんだぞ、他にも王の財宝（ゲート オブ バビロン）や、覇氣のコントロールを散々やってきたんだ……それ  
もこれも作者の文才が無いせいで……ああ、もういい何だったら魔王より先にお前を——殺して解して並べて揃えて晒してやるよ」

「おいおい、  
『』はどうした本音が出てるぞ、それに殺人鬼の台詞  
を使うなよ」

喋りながらもいつでも間合いをとれるようにする

「言葉なんて最早どうでも良いわ、行くぞ、零閃 編隊 十機、」

自然体のまま手に刀を持ち

しやりんしやりんしやりんしやりんしやりんしやりんしやりん  
りんしやりんしやりん

鏗鳴りの音だけがした

「うわっ、零閃ていきなり」

「まだまだ、薄刀・針 限定奥義 白兔開眼、」

…  
神殿が割れた

「いや、ちよつとヤバくね」

「ラストだ、約束された勝利の剣、<sup>エクスカリバー</sup>十、<sup>エヌマ</sup>天地乖離す開闢の星、<sup>エリシュ</sup>」

光の奔流と赤い竜巻が周りを埋め尽くす

視界が晴れたそこでは……神殿は原型を留めていなかったとき

「やり過ぎだろ……………」

もう、そこに神殿があったとは誰も思わないだろうな……所々から岩が顔を出してる位だしな

ついでに俺は氷輪丸で作った氷を足場になっているから立っていられる

ギゼンの方は普通に海の上に立っている

「ふー、少しはスッキリしたかな、でもかなりキャラが壊れてしまったから、少しキャラを造り直してくるよ」

そして、最初から居なかったかのように消えた

そう、消えた

一言だけ言いたい

「この状況どうすんだよーーーーー!!!!!!」

「我ハモウ帰りタイ」

レヴィアタン、無事だったのか……

「こんな状況だけど戦るか？」

「イヤ、良イ我ハオ主ニハ敵ワヌダロウ、故ニコレヲ持ッテイケ」

海（正確には氷）の中から大罪の結晶と海竜の模様が入った腕輪が出てきた

「あれ？ 結晶って魔王倒さなくても大丈夫なの？」

「ソノ結晶ハヨク分カラシガ、腕輪ハ我が認メタ証ダ。腕輪ヲ使エバ我ヲ呼び出ス事が出来ル。」

話からするとFFの召喚獣みたいなものか、大罪の方は魔王に認められたから出てきたのかな

「デハ主ヨ、コレカラハヨロシク頼ムゾ。  
ソレデハ、サラバダ」

レヴィアタンは海に潜っていった。

俺は海を凍らせながら陸に向かい、歩きながら言った

「何で、こうなった……」

結局あいつは場を荒らすだけ荒らしたな……

## 七話目

あの神殿での惨状からまた幾日か経ち、今俺はこの世界の主要都市の一つを目指している。

近くの村や町では、もう魔王の情報が無かったので他の人がもっと大きな都市に行くよう勧めてくれたのだ。

それから、特に問題もなく進めてこれた筈なんだか……

「はぁ………」

「師匠、溜め息なんて吐いてどうしたんですか。」

「お前のせいだ、お前の………」

「はっ、私が何かしてしまったのでしょうか？」

こいつは、ミコ、とか云うらしい、他にもなんとか言っていたが忘れた。

「ああ、した……だからもう着いてくるな」

「そんな…師匠、私は何でもしますから見捨てないで下さい」

こいつが俺のことを師匠と呼ぶのは、モンスターに襲われていたのを気紛れで助けてしまったからだ。

こいつも所謂冒険者で依頼でモンスターと戦っていたらしいが、数と種類が報告と違いやられそうだったのを俺が助け、いきなり

「弟子にして下さい」  
と言ってきたのだ。

最初は断っていたのだから、かなりしつこく「弟子にしてくれ」「弟子にしてくれ」と言い続けるので、つい「分かった」と言ってしまったのだ。

後悔先に立たずとはよくいったモノだと感心した

「はあ……ホントどうしょ……」

「師匠、見捨てないで下さい」

「分かった、分かった、見捨てないから。  
で、お前はどうするんだ？」

「私はもっと強くなりたいので師匠に着いて行きます。」

「その話じゃない、お前は一応依頼を承けていたんだろう。」

ホウレンソウは世の中の基本だからな

「それに関しては大丈夫です。」

私が依頼を受けたのは、此れから師匠が向かう都市ですから。なので師匠に着いて行っても無問題です。」

さいですか

「面倒な………」

「そういえば、師匠ってギルドランクいくつ何ですか？」

「ギルドランク？」



なんだ、H Rなら2nd Gで9だったが、3rdは殆どやってないし

「モン○ンじゃ無いですよ、それよりも師匠ってギルド登録してないんですか。」

「してないな。」

必要でもなかったし

「そんな……師匠！ 都市に着いたら真っ先にギルド登録しましょう。」

師匠なら直ぐにAランクにもなれますよ。」

「嫌だ、めんどい。」

つか、ギルドとかランクの説明しろ。」

「めんどいって………師匠……ゴホン、ギルドというのは民間で経営されている冒険者組合です。」

そこでは依頼の受注や発注が行われたり、宿屋、酒場等も兼ねていたりもします。また、ギルドに登録しているとその事が身分証明にもなります。

此れから向かう都市にあるギルドはかなり大規模なものですね。

次にランクですが上からG, S S, S, A A, A, B, C, D, E, F, と細かく十段階に別れています。

ランクによって受けられる依頼の難易度や種類が変わります。ランクは一定の依頼をこなすか、ギルドマスターに認定されると上がります。

ふう………大体、こんな所です」

「成る程な………ところで、お前のランクは何なんだ？」

「私はまだ、D, です。でもさっきいたモンスターはランクB相当だったんですよ。」

あれで大体中の中か………だとするとマモンは上の下か中位かな？  
レヴィアタンは上の上のさらに上か

「ん、分かった、理解した。」

「まだ、解らない事が有ったらどんどん聞いて下さいね。」

多分もう無いだろうな………いや、あったな

「後一つ聞いていいか。  
お前のフルネームって何だったか？」

「ガーン……ひ、酷すぎますよ師匠まだ、私の名前を知らないなんて、私、確かに一回自己紹介しましたよね。」

「悪い。全く聞く気がなかった。」

「聞いてなかったじゃなくて、聞く気がなかったですか……歌が念仏、猫に小判ですね。」

馬に念仏、猫に経だろうな……意味違うし

「まあ、そう言うな、最初は本当に興味が無かったが、今は多少知りたいと思ったんだ」

「はあ……ゴホン、師匠私の名前は、ミコ ユカリキ、です。歳は17です。」

これからはあなたの弟子になるのでよろしくお願いします。」

「じゃ、俺も自己紹介といくつか名前はカズキ歳は18だ。これからはお前の師匠だよろしく。」

「

さて、やっとフルネームが出たしこの‘ミコ’の容姿を軽く説明、

髪は茶髪で肩甲骨位まで伸ばしているのを軽く縛っている

顔は可愛い系で整っている

身長は150前半

腰にショートソードをさして冒険者っぽい服を着ている。

このぐらいで良いかな、後は適当に脳内変換して下さい。

「さあ、師匠改めて挨拶も終わりましたし、早速都市に向かいましょう。思い出したが大安です。」

思い立ったが吉日な

「お前のボキヤブラリーがなぜそんなのか知りたい……」

「えへへ、良く言われます」

「言われてんなら直せや」

「しかし、これが私のアイアンメイデンです。」

拷問してどうする……

「ギゼンじゃ無いけどキャラ造りは必要かもな（ボソツ）」

「何か言いましたか？」

「何でもねえよ、ほら行くぞ馬鹿弟子。」

「はい！」

## 八話目

あれから、暫く歩いて行くとかなり高い塀に囲まれた都市に到着した。

「でかいな」

「何でも、モンスターの侵入を防ぐために何百年も前に建てられたそうですよ。」

「へ」

「さ、早く入りましょう」

都市の入口には門番がいて、二三質問されたが普通に通る事が出来た。

——都市の中は人が多く出歩いていて、とても活気に満ち溢れていた。

「師匠、ギルドはこっちですよ。」グイグイ

「分かったから引っ張るな。」

弟子に引き摺られながら通りを歩いていくと、なにやらやたら大きな教会風の建物に着いた。

「ここが私の所属しているギルド、福音の鐘、です。」

ここって絶対元教会だろうな

「ほら、行きますよ。」

ギー

重々しく鳴る扉を開いて中に入る。

そこには、如何にもって感じの冒険者のオッサンやローブを纏ったお爺さんやお婆さん、ミコのような軽装備の若い冒険者。ここまでは大体分かる。お爺さんお婆さんは微妙だが魔法使いだろうから分かる。

しかしなぜ、ギルドの職員っぽい人が全員修道服なんだ。

「師匠、ギルド登録の受付はあそこです。」

私は依頼の報告が在るので着いていきませんが、師匠ならギルドマスターに認められるとおもうので頑張ってください。」

言い残し、去っていく弟子

ただ呆然と立っていてもしょうがないので登録しに行く

「すみませうん」

何故か、受付には誰もいなかったので呼ぶ。

「あ、はいはい、ごめんなさいね」

口元になんかの食べ残しが付いてるぞ

「すみません、ギルドに登録したいんですが。」

「登録でしたらこの用紙に必要事項を書いてサインしてください」



一枚の紙を出してくる

紙には名前、年齢、性別、等の欄と注意事項が書いてあった。

注意事項は【怪我したり死んでもギルドに文句を言わない】だけだが

「注意事項はこれだけですか？」

「はい、それだけです、マスターがシンプル イズ ベストだ  
〜とか言ってますから〜」

「随分大雑把なマスターですね、はい、出来ました」

「次はランクですがどうしますか？」

Fなら試験とかなくても良いですけど〜E以上は試験が要りますよ  
〜」

「ランクは出来るだけ上が良いので試験を受けます。」

「分かりました〜なら準備とかあるので〜20分程待って下さい  
〜」

「はい」

「……………そんなこんなで現在、酒場の一席で準備が出来るのを待っている。そこに

「あ、師匠どうでしたか？」

「今は試験の準備待ちだ」

「やっぱり師匠は認定試験を受けるんですね。  
頑張ってくださいね、なんたって私の師匠なんですから。」

「ああ、頑張る。」

「そういえばお前の時はどんな試験だったんだ？」

「えーと、私の時はそのランクの試験官と闘って、その闘い方や結果を見て審査するらしいです。」

「だから、もし負けてもランクアップのチャンスはあるんです。」

「へー、ならお前は試験官に勝ったのか、負けたのか？」

「私は魔法を使ったら運良く決まって、そのおかげで勝つことが出来たんです。まさに、甘辛ぼた餅です。」

「微妙な味だろうな………」

それから、適当に雑談していると時間が来て試験の場所に案内された。

「それではこれからあそこにいる試験官と闘ってもらいます」

そこには薄い鎧を着た男とローブを着た女の二人組がいた

「分かりました、でどちらと？」

「オレからだ。」

鎧を着た男の方が答えた

「オレはCランクだ。」

オレに勝てばBランク負けても闘い方でランクが決まる。」

「そうですか、それではよろしくお願いします。」

軽く頭を下げるする

「それでは〱お互いに用意は良いですか〱」

「ああ」

相手は剣を構える

「はい」

俺は普通に立ったままだ

「試合〱開始〱」

瞬歩で近付き

「（手加減した）一骨」

相手を殴りつける

「グホオ」

どうやら鎧は砕けさらに肋骨も折れたらしい。

「終わりましたよ」

「し、試合終了〜だ、大丈夫ですか〜」

「ぐ〜〜〜」

腹を抱えて呻いている試験官。

「はぁ〜舜桜、あやめ、‘双天帰盾’、俺は拒絶する」  
舜盾六花で回復させる。

「なっ！ 鎧まで」

「は〜すごいです〜」

「ありがとうございます、助かったよ。」

「いえいえ、大丈夫ですよ、俺がやったんですから。」

「で〜どうします〜更に上のランク目指しますか〜」

「当然、目指します」

「分かりました〜ではコルナさん〜よろしくお願いします。」

ローブの女性コルナさんが前に出てくる。

「私は勝てる気がしませんので辞退させていただきます。」

「え〜じゃ〜試験はどうするんですか〜」

「俺がしてやろう。」

いつの間にか現れた巨大な戦斧を担いだ、大男が言った。  
てか、声が若本さんなんだが。

「マスター」

大男はどうやらこのギルドのマスターらしい、しかしこの容姿はどう見てもギルドの名前、‘福音の鐘’に全く合っていない。

「良いだろう、少年？」

「はい、よろしくお願いします。」

「ふはは、今日の俺は紳士的だ、優しく倒してやろう。」

「ちょ、ちょっとマスターはSSランクなんですよ、本当に大丈夫なんですか」

「構わん、少年よ私に認められればSSランクだ。心して掛かってくるが良い。」

「はい。」

若本ボイスって怖いな

「どうなっても知りませんよ………  
はあ、両者良いですか、それでは試合開始」

「一瞬で終わる、耐えぬ方が身のためだ、破滅のグランバニッシュ、」

「いきなりか！、マ・セシルド、」

巨大な盾を呼び出して何とか防ぎきる

「ほう……面白い、行くぞ！　ぶるあああああああ」

マスターが思いつきり突進してきたので、また瞬歩を使いかわして後ろに回る

「俺の背後に立つんじゃない！　バック・スナイパー、」

何故かマスターに掴まれて地面に叩き付けられる。

「ぐはっ！　ちっ！」

鋼皮イエロがあるのになんか効いてしまい、更に斧で斬りかかって来たので、たまらずに後ろに下がる。

「男に後退の二文字はねえ！　絶望のシリングフォール、」

「くそ、理不尽な、武装錬金、シルバースキン、」

幾らかは弾けたが、致命傷にはならなかった。

てか、魔王を無傷で倒せるチートなのになんでこんな苦戦すんだよ。

「微塵に碎けろお！　ジェノサイドブレイバー、」

「マスター殺り過ぎですよ」



「うおおおお、縛道の八十一、<sup>アナザータイプ</sup>断空、マ・セシルド、ラシルド、武装錬金、シルバースキンAT、」

思い付く限りの防御で固める。

断空が割られ、マ・セシルドが砕かれ、ラシルドが貫かれ、シルバースキンが弾かれて、<sup>アナザータイプ</sup>ATがかるうじて残り防ぎ切った。

「はあ……はあ……何とか防いだ……」

良く考えたらまだ俺、攻撃してねえ、このマスターは強すぎる。

「最後の一発で沈めてやるよ、覚悟は出来たか、ワールドデストロイヤー、」

「こっちも最後だ、バオウ・ザケルガ、」 『バオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

マモンを倒した時より大きく、強力なバオウを呼び出す。

「ぶるあああああああああ！……！」

マスターはそのバオウすら飲み込む衝撃波を放って来た。

「ちょ、相手の呪文を飲み込む技のバオウを飲み込むって」

「ぶるあああああああああああ！！！！」

衝撃波は完全にバオウを飲み込み襲い掛かって来た。

「ぎゃああああああああ！？」

俺自身も衝撃波を食らい吹き飛んでしまった。

倒れた状態で気を失う前に見たのは「マスター殺り過ぎです」とか言いながら受付の人がマスターに殴り掛かり、マスターが「ぶるああああああああああ！」と叫びながら宙を舞う姿だった。

受付が最強……だと……

そして、意識が完全に無くなった。

## 九話目（前書き）

何故こうなった……受付を暴走させすぎた。

マスターもつついやってしまったし……

やはり、その場のノリで書き続けているからキャラの暴走が激しい。

それでも、なんとか頑張って書いていくのでよろしくお願いします。

## 九話目

目が覚めるとそこは

「知ら「あゝ起きましたかゝ?」」

言わせて欲しかった……

「ここはゝギルドの医務室ですゝあなたが気絶したのでゝここに運ばれましたゝ」

「そうですか、ありがとうございます。

あの、一つ聞いて良いですか?」

「んゝなんですかゝ?」

「あのマスターって本当にSSですか。」

「はいゝ一応はSSですゝ」

マジか…つまりはGはあれより上か……

「でもでもゝ別に落ち込む事無いですよゝマスターは昔にゝ当時の  
Gランク七人とゝ本気で喧嘩してゝ勝ってますからゝ」

…は……………?

「えーと……七対一で………?」

「そうですねでもマスターは〳〵此処を離れたがらずに〳〵SSのままなんですよ〳〵Gランクの人は〳〵首都勤務ですからね〳〵」

……………マスター化物じゃねえか!

いや、若本ボイスの時点である程度は予想出来たよ、ゲームでもラスボスや裏ボスより強かったからね、でもチートに無傷って。

この世界の最強マスターじゃね? もうあの人が魔王倒せば良いじゃん。

てかあの人が魔王じゃね。

「あの〳〵大丈夫ですか〳〵なんか百面相を披露してますけど〳〵」

「あ、ああ大丈夫、大丈夫」

あれ、そういえば、この人マスターを殴り飛ばしてなかったか?

「大丈夫なら良いですけど〳〵それからあなたのランクですが〳〵Sランクに決まりました〳〵おめでとうございます〳〵」パチパチパチパチ

拍手しながら言う受付の人

「ありがとうございます。」

お礼はちゃんと言わなければいけませんよね。

「それで、これがギルドカードになります。身分証明書も兼ねてるので、なくさないで下さいね。」

渡されたカードには、俺の名前やらなんやら色々書かれていた。

「あと、マスターが、あなたに、俺に勝たなければSSの資格は無いぞ、って言っていましたから、頑張って下さいね。」

「……………もう一度言ってもらっても良いですか…………」

「頑張って下、その前です。」

「え、確かに俺に勝たなければSSの資格は無いぞ。」

「そこです。」

なんで、マスターに勝たないとランクが上がらないんですか?」

「マスターが決めた事ですから。」

「何故?」

「マスターが決めた事ですから。」

「……………」

マスターに勝てる人間って居るのか…………

「居ませんねーこの前もギルド最強と謳われたGランクの人も軽くあしらわれてましたねーそう考えるとーあなたはーそのGランクの人より強いかも知れませんねー」

さらっと心を読まないで欲しい……でもこの人、マスターを殴り飛ばしてたよなっことはこの人は人間じゃ、グサツ、」余り失礼な事を考えては逝けませんよ」

「すみませんでしたー！」

医務室のベッドの上で音速より速く土下座した。

何をされたかは想像にお任せします。しかし、あそこまで本能から恐怖したのは初めてかもしれない。

「ふふ、分かれば良いですよー」

あんた、マジで何者だよ！

「それではーギルドランクSカズキさんーあなたに福音の加護があらんことをー」

「はい、よろしく願いします。」

これで俺は正式にこのギルドの一員になった。

「あとー私の名前はアネリアですー今更ですけどーよろしく願いしますー」

「本当に今更ですね。」

アネリアか……姉御って渾名にしたいな……なんとなく似合いそうだし……

「私の事はアネリアか、せめてさん付けにして下さいね。」

「はい、了解しました。

ですから、その大鎌をおろして下さい。

お願いします。OTZ」

このギルドもう嫌だ、皆が怖い

こんなん、これからのギルド生活大丈夫なのかな………

「大丈夫ですよ〜きつと楽しいですよ〜」

だから、心を読まないで下さい………姉御

「ふふふふふ、まだ分かってないんですね。ふふふふふ」

ゾクッ

なんだ、この殺気は……ヤバい殺られる

「瞬歩」



ガ  
シ  
ツ

「逃がしませんよ……」

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ  
ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ  
攻撃したら絶対に死ぬ、けど逃げる方法が思い付かない。

「ごめんなさいすいませんでした申し訳ございません誠に反省しております。」

「もう……許さない……一辺死んでみる……？」

「ぎゃあ ああああああああ！」

な……んで……二話……連続で……こんな目に……

## 十話目

ギルド登録から三日が経った時にやっと目が覚めた。

「あれ？ 俺っていつ寝たんだ？」

確か……………受付のアネリアさんに……………

ガタガタガタガタガタ

な、なんだ体が震える。

俺は、俺は……………駄目だ思い出せない。

「じ、じじょううう！」 バッ

ドスッ 「ゴブラッ！」

くくくく

鳩尾に頭突きは効くぜ

最近こんなんばっかだな

「じじょうう大丈夫ですか、腕、腕は付いてますか？」

「腕？ 俺の腕に何があったんだ？」

今は普通に付いてるし、大概の怪我は超速再生で直ぐ治るし……

「あの時は本当に駄目かと、腕があんなになって、更に目や足まで

も〜」

「だから俺の体に何があったんだよ!」

「良かったです、本当に良かったですー」

「だー、だから何があったか説明しろー!」

「しーしーうー!」

「離れろ、落ち着け、説明しろ。」

「うわーん!」

「おい。」

——あれからミコを落ち着かせるのに大分掛かったが、それでも何があったかは分からなかった。  
ミコ曰く「あれは人の修行ではない」らしい、恐らくだが、修行ではなく所業だろうが。

「ふう、師匠本当に何ともなくて良かったですね。」

「もう…何があったかは聞かない事にしたよ。」

「それで、師匠のランクはどうなったんですか？」

「ランクか、ランクは確かSだったな。」

「Sですか、流石は私の師匠です。」

このギルドではA以上はマスターだけだったんですよ。」

「あゝ」

何と無くだが分かるな、多分マスターに「俺に勝たなければ——」  
とか言われて他のギルドに移ったんだろ、俺も正直勝てる気しない  
し。

「だから、実質的に師匠がこのギルドのNo. 2です。」

「……………」

いや、マスターよりも恐ろしいアネリアさんがいるし、最高でもNo. 3だろうな。

「師匠！　どうしたんですか、突然真っ青になって。」

「大丈夫、うん大丈夫だから。」

暫くトラウマに成りそうだな

「やっぱりまだ休んだ方が良いんじゃない？」

普通の人なら死んでる状態だったんですよ、医者も何故生きてるのか分からないと言っていましたし。」

「待て待て、俺ってそんなにヤバかったのか！」

「はい、でもアネリアさんが医者と何かしたらもう大丈夫だって。」

「……………」

アネリアさん……あんたは本当に何なんだ……

「なあ、アネリアさんってどんな人だ？」

「アネリアさんですか……えー、受付をしている時はいつもニコニコしていて、おっとりした話し方でよく場を和ませてくれる。優しい、良い人ですね。」

「……………そうか、優しい人か……」

「でも……時々、裏アネリアがどうかの噂は聞きますね」

「へえ、どんな噂なんだ？」

「初戦は噂ですよ、何でもどんな凶悪なモンスターも逃げ出す、生物最凶の存在だとか、普段の姿を見ていると根も葉もない噂だと思いますけどね。」

「成る程ね」

「どうしたんですか、師匠アネリアさんの事なんか聞いて、もしかしてアネリアさんに惚れたとか？」

惚れてはない、怖れているだけだ。

「さて、怪我也治ってるし、早速依頼を受けにいくか。」

「ええ、大丈夫何ですか？　もう少し休んだ方が。」

「大丈夫、大丈夫ほら逝くぞ、お前の修行も兼ねるんだからな。」

「ちょっと待って下さいよー」

待たん、早よ来い。

あ、そういえば依頼を受けにくときはアネリアさんに会うことになるのか。

ああ、鬱だ。

## 十一話目

いきなりだが依頼を受けようと思う。

「それでは、Aランク依頼【ファイアドラゴン10頭の討伐】で良いですか？」

「はい」

受付がアネリアさんじゃなくて良かった

「師匠、なんでA何ですか？ Sを受ければ良いのに。」

「修行も兼ねると言っただろ。」

「手続きが終わりました、こちらをお受け取り下さい。」

「？」

渡されたのは二枚の札

「師匠は依頼を受けるのは初めてでしたね、それは依頼を受注した証拠みたいなモノです。」



「成る程成る程」

「そういう事です、期限は二週間です。  
二週間以内に連絡をしてください。」

「分かりました、行くぞミコ」

「はい、師匠。」

そうして、ギルドを出て依頼の目的地に向かう。

「お、依頼かい頑張ってな。」

門番さん久しぶりですね。

「はーい、頑張りますー」

返事したのはミコだぞ、俺は軽く手で返事をしたただけだからな。

「じゃあ、本当に出発するぞ。」

「はい師匠、で……どうやって？」

「走って。」

「ええー！　かなり距離がありますよ。」

「何事も修行だ、修行。」

「一分で目的地まで行くぞ」

「無理ですよ！　馬車でも一日以上かかる道のりなんですよ。」

「マッハ30で走れば直ぐなのに。」

「マッハで走るの人間には不可能ですよ」

「じゃあ、俺がミコを抱えて」

「空気抵抗やら圧力で死にます」

「そう言えば、地の文に应えてるけど端から見たら完全に独り言だぞ。」

「読者と師匠しか居ないから大丈夫です」

「メタ発言するな。」

## 閑話休題

ミコがあまりにも走りに文句を言ったので、結局馬車を使う事になった。

馬車といっても、荷車を引いているのは馬ではなくて、大人しい草食のモンスターだが

「全く、無駄に金を使って」

「こういうのは普通、必用敬意です」

誰を敬うんだよ

その後も二人で駄弁しながらも出発した。

しかし、この依頼が後に大変な事件の引き金になるとは、誰も思っ  
てはいなかった。」

「師匠、突然どうしたんですか」

「言ってみたかったただけだ」

「はいはい、お二人共良いですか？ 出発しますよ。」

「はい」

「よろしく頼む」

「ホレ、行くぞ」

ピシッ

行者がモンスターに鞭を入れて、ようやく馬車が動き出した。

さてさて、道中に面白い事があればいいけどな。

「暇だ……」

「そうですね……」

馬車の中では特にすることもなく、暇を持て余していた。

「何か、問題が起きねえかな……野盗とか……モンスターとか……」

「起きたら起きたで大変ですからこのまま、まったりのんびり平和に行きましょうよ」

もう遅い、既にフラグは建っているんだ

「だ、旦那盗賊が出ましたー！」

「ほらな。」

「ほらな。じゃないですよどうするんですか！」

「略奪？」

「逆です、それは相手がする事です。」

「おい！ お前ら、命が惜しかったら金目の物を全て寄越せ！」

「まあ、俺達に狙われたのが運の尽きだと思って諦めな」

「ほう、女がいるじゃねえか……しかもかなりの上玉だな、へへへ  
拐って売れば高くつきそうだな」

「うぜえ………」

盗賊は喋った三人を含めて全部で二十人ちよっとか

「師匠どうするんですか、結構いますけど………」

「うーん……お前はついさっき喋った三人をやれ、それ以外は俺が  
殺る」

用件をミコに伝え、俺も決めたノルマをクリアするために動く。

さて、あの三人とそれ以外は距離がそこそ空いてるから大丈夫だ  
とは思うが……

さって、こいつらはどうやって倒そうかな？

「あ？　なんだ、お前一人で全員を相手しようってか？」

「げへへ、ふざけた野郎だ」

「ヒヤッハー！　汚物は消毒だー！」

「ちよ、熱っ！　火炎放射器を振り回すな！」

「なんで、野盗なんて採算性の悪い事をわざわざするんだよ、もつ  
と先を見て…ブツブツ…」

「身ぐるみ全部置いていけ」

ワーワーギャーギャーワーワーギャーギャー

「……うるせえ……」

何なんだこいつらのまとまりの無さは、マモンの所のモンスターを  
思い出す。

「おら！　取り敢えず死んどけ！」

野盗の一人が剣で斬りかかって来たので

キン

腕で受け止めた

「なっ!？」

「そおい」

バキィ

「ぐほっ」

驚いて硬直している内に殴り飛ばす。

「ひゅとぅりゅめ」

「くっ、こいつ中々強いぞ、一斉に掛かれー!」

「うおおおおお!」「ヒヤッハー!」「肉体労働苦手……」  
「ぶるああああ!」「あれ?武器がない」「汚物は消毒だー!」  
!」「だから、振り回すな!」「熱っ!うお、髪が燃えたー!」「  
何してんだよ!」「はあああああ!」「俺、この仕事が終わった  
ら結婚するんだ…」「死に去らせー!」「きええー!」  
死亡フラグが聞こえた気がしたが……

気にしたら負けだな、発火布の手袋を着けてと

パチン



ドオオン

「ぎゃああああ！」 「熱いいい！」 「もう指輪も用意してあるんだ」  
「それ以上言うな！」 「何人やられた」 「五人程です」

パチンパチンパチンパチン

ドオオンドオオンドカァンゴウ

「「「「ぎゃああああ」」」」

「安心しろ、焼き加減はウエルダんだ」

「こんがり焼いてんじゃねえか！」

「まだ、生き残りがいたのか」

「誰も死んでねえよ！」

当然だちゃんと手加減位は出来る

「で、どうする？ 大人しく捕まるか、抵抗して捕まるか、お前が何をしようと俺の指パッチンのが速いだろうけどな」

「くっ……俺は「めんどい」は？」

パチン

ドオオン

「ぐわあああああ」

「ははは、悪党に選択権が在る訳無いだろうが！」

これでこっちはノルマクリアだな

「師匠……台詞や行動がまんま悪役ですよ……」

「ん、終わったのか。」

「はい…」

大きな怪我はないようだか……肩を軽く擦ってるな  
ミコも俺が見ているのに気づいたようで

「大丈夫ですよ、こんなのただの擦過傷です」

「痛そうじゃねえか」

かすり傷と意味は同じだが

「『双天帰盾』俺は拒絶する」

「あ、ありがとうございます、師匠」

「別に良いぞ、そろそろ行くか」

「え？ この人達はどうするんですか？」

「ほっとけ」

「……………」

固まっているミコを無視してさっさと馬車に向かう

「ハッ！ 師匠！ 待って下さいよ」

どうやらミコも盗賊をほっとく事にしたようだ

「行者さん、行こうか」

「へ、へいー」

ピシッ

ガタンガタン

「師匠」

忘れてたが、まあ良いだろ

| Hours per week | Number of students |
|----------------|--------------------|
| 0              | 10                 |
| 1              | 20                 |
| 2              | 30                 |
| 3              | 40                 |
| 4              | 50                 |
| 5              | 60                 |
| 6              | 70                 |
| 7              | 80                 |
| 8              | 90                 |
| 9              | 100                |

あれからしばらく馬車に揺られていると、ようやく目的地に到着した

「まずは村長に挨拶してファイアドラゴンの事を聞かないとな」

「ぜえ……ぜえ……良く付いて……来ました……私……」

ありや、ミコが倒れちまったよ、全く高が50キロ走ったぐらいで  
……

「おい、ミコ、平気か？」

「……………」

「返事がない、ただの屍のようだ。」

「一応……生きてますよ……」

「仕方ないな……よっ！」

「うひゃ！」

特に変な事はしてないからな、ミコを抱えただけだからな。

「師匠……私も一応女の子なんですけど……この扱いは酷くないですか……？」

俵持ちですが、何か？

「村長の前に宿に行くか」

「師匠、無視ですか？」

「文句があるんだったら歩かすぞ？」

「判りました〜……………」

そんなこんなで宿を探して適当な所を選んで入った

入った所はあまり大きくはないが、そこそこ綺麗な宿だ

「すみません、ここに泊まりたいんですけど？」

「はいはい、何日お泊まりになりますか？」

「えー……………」

今日は村長の所に行って話をして、明日はドラゴン狩ってからもう一日位は泊まりたいし……………」

「二日で、二部屋お願いします」

「おや？ 恋人じゃないんですか？」

「全く持って違います」

何処の世界に恋人を俵持ちする彼氏がいるんだか

「はいはい、二日ですね、ならお代は此だけになります」

「はい」

幾らかのお金を渡す

そういえば、やけにミコが静かだな…

「スー…スー…むにゃ…もう食べられないです…」

寝てるよこいつ、しかもなんてベタな寝言

「お食事は食堂で頼めば朝昼夜何時でも食べる事が出来ます。  
これが部屋の鍵です」鍵を渡して来たんだが…

「何故一つだけ何ですか？」

「おやおや間違えてしまいました、でもその方が良いのでは？」

うざいな……こういったおばさんって何処に行っても居るもんだな



……

「冗談はもういいから早く渡せ」

「はい……」

おっと、軽く殺気が出てしまっていたようだおばさんが青ざめている。

気を付けねば……

鍵を受け取り部屋に向かう、部屋は二階の奥の並んだ二部屋のようなだ

部屋の鍵を開けて

「ホイッと」

「ぎゃぴ」

ミコを部屋に文字通り放り込む

「~~~~~っ！」

顔からダイブした（させた？）から、鼻を打って相当痛いようで声も出せてない

「じゃ、明日は朝一で村長の所行くから、ゆっくり休め」

返事がないた（ry

「あ、鍵はこれな」

鍵を部屋に投げる

「俺はどうするかな……とりあえずは村長に到着した事だけでも伝えとくか……」

部屋に荷物だけ置いて、村長の家に向かう

村長の家はすぐに分かった、そんなに大きな村ではないし村人に聞いたら簡単に教えてくれた

コンコンコン

「はい」

ノックをしたらすぐに返事が来た

ガチャ「どちら様ですか？」

扉を開けたのは二十代前半位の女性だった

「ファイアドラゴン討伐の依頼を受けたギルドの者です。

今日はこの村に到着したことを報告しに来ました」

俺って口調安定しないな、相手によって変えるのは当然だけど自分で驚くほどに変えられるからな

「あ、そうなんですか

それではお上がり下さい、村長は父がやっているんですよ」

「失礼します」

家に入り客間のような所に案内される

「こちらでお待ち下さい

すぐに父を呼んできますので」

「はい、分かりました」

目の前にお茶を出されたが、特に手を付けずに待つ

少しの間待っていると村長と思われる初老の男性が入って来た

「ようこそいらっしゃいました。」

私はこの村の村長をしているシェラフ・マルテと申します」

「ご丁寧にも有り難うございます。」

私が今回の依頼を受けた、ギルドランクSカズキです。

今日はこの村に到着したことを伝えに来ました、ドラゴンの討伐は明日にでもしようと思っています。」

「ほう！ ランクSですか、それは何とも心強い 私達もあのドラゴン達にはほとほと手を焼いておりましてね、いやファイアドラゴンだからといって本当に手を焼かれた訳では無いんですけど————でね、その時に村の若者が————で私が言っちゃった訳ですよ、この村は————おっとついつい話込んでしまいました、それでは明日はお願いします。」

凄いマシンガン Took だったな、相槌しか打てなかった。

「あははは ま、任せて下さいよ。」

それではまた」

「ふうー……」

疲れた、あんな会話の仕方かなり久し振りだったから、精神的にき  
たな

村長との対談も終わり、日も大分沈んでいたのでさっさと宿に戻る  
事にした。

そういえば……この村に着いたのは何時頃だったんだろ？  
最初に馬車で一日掛かるとか言ってたのに明確が時間表記がなかつ  
たような……

ま、気にしても仕様がないう事だな

「ただいま……」

宿に着いて自分の部屋に入る、  
「ただいま、」  
と言っても返事は無い  
んだけどな

「お帰りのさいです、師匠」

「はあ……どうやって入った、ミコ」

「鍵が開いてましたよ」

「なん……だと……」

只の鍵の締め忘れだったのか……

「そんな事よりも 師匠、さっきの扱いは酷すぎますよ！

床にキスするなんて経験普通しませんよ！ 私のファーストキスが  
床ってどう責任取ってくれるんですか！」

「無生物相手なんだからノーカウントで良いだろ。」

「でもですね！」

「腹減ったな、飯食いに行くか」

「師匠舞ってください、まだ話は終わってないですよ！」

「パラパラでも踊るか、三分間位」

そのまま食堂に行き適当にメニューから選んで食べた

それでもミコがなんか言ってたが省略して良いだろ

そして部屋に備え付けの風呂に入って寝た。

## 十二話目

翌日

早速村長の家に行き、ドラゴンの詳しい出現場所を聞きドラゴンの居る森に向かった。

「森か」 “ファイア” ドラゴンなのに何で森に居るんだろ？」

「餌場とかじゃないですか、そのせいでこの村の家畜や住民に被害が出てるとか？」

「棲み家は別の場所か…」

「基本成長途上の竜種は群れる性質が在りますからね」

「何その設定」

「竜種はその成長で名前が変わっていくんですよ、例えばファイア



ドラゴンは“ファイア↓フレイム↓バーン”ドラゴンと名前が変わっていきます。

名前が変わるだけではなくその強さも桁違いに上がってますから。」

出世魚みたいなもんだな

そうこうしていると探査にドラゴンが引っ掛かった

数は14体で依頼より少し多いが問題ないだろ

「ミコ、居たぞ…気を入れろよ」

「っ……はい」

一気に緊張したようだな、まあBランクのモンスターに殺されかけていたからな

あれ？ そう考えるとこの修行かなり無理があるんじゃないかね

………ま、いっか成るように成るだろ

見えたドラゴンは赤色の鱗で翼があり、ファンタジーの定番のような姿だった

「さて、蹴散らせ、ロス・ロボス群狼、」

毛皮のコートを羽織  
手には拳銃が現れた

ゼロ・メトロジェッタ  
「無限装弾虚閃」

拳銃から大量の虚閃を放ちドラゴンを殺していく

ドラゴンを13体倒した時点で撃つのをやめる

「ほえゝ凄いですねゝ」

「後の一体はお前が倒せな」

「えっ………無理無理無理無理ですよー」

私まだDランクですよ！

この前だってBランクのモンスターに襲われて死にかけたのに  
師匠は鬼ですか！」

「ああ、鬼だ、悪魔だ。  
さっさと逝け」

ミコを掴んでドラゴンの目の前に放り投げる

今度は顔から落ちないようにしっかりとコントロールした  
いやゝ俺って優しいなゝ

「字が違うし滅茶苦茶非道ですよー！」

「軽い援護だったらしてやるから安心しろー」

———ミコ視点

うう非道いですね師匠は、顔から落ちなくても投げられたら結構痛いのに

「グルルルルル」

おっと、それよりも今はドラゴンに集中しないと

私の魔法は魔力を細く放出して糸のように扱う魔法なんですよね

魔力に属性を付与すれば色んな効果が発揮されるかなり応用力が高い魔法です

「ふっ！」

魔力の糸を作り出し周りの木を利用してドラゴンを囲む

「スウウウー——」

ドラゴンは大きく息を吸い込み……吸い込み！？

「ブオオオオオオオオ！！」

ブレスを放ってきた

私は急いで糸に火属性の魔力を付与してブレスを受け流そうとするが

ブチブチブチブチ

糸がブレスに耐えきれずに切れてしまう

「きゃあああああ！」

私は急いで回避する

「うわっ、人間で本当に緊急回避みたいな避け方出来るんだ」

師匠、笑って無いで援護して下さいよ。

唯でさえ勝ち目の薄い相手なんですから

それでも囲んでいた糸を操り、風属性を付与して鋭さを増してドラゴンを切り裂こうとする

「グオ？」

ドラゴンは糸が絡んでいるのに全く動じずに此方に向かって来る

「くっ、貫け」

糸を束ねて槍の様にしてドラゴンを貫く

「グオオオオオ！」

ドラゴンの翼の薄い膜に当たり貫く事に成功するが大したダメージは与えられず、怒ったドラゴンが突っ込んで来る。

「テオ・ザケル」

突然横から雷撃が飛んできてドラゴンを吹き飛ばす

師匠……軽い援護であれですか…

私がどれだけ考えて苦労したか…

「ほら、気を抜くな

まだ生きてるぞ」

「グッ………オオ………」

確かに生きてますけどかなり辛そうですよ

「はあ、貫け」

糸を束ねて風属性を付与しドラゴンの傷口の鱗の無い部分を狙って放つ

ドラゴンもは立っているだけでも辛いのか大した回避行動もとらずに貫かれる。

「グオオオオオオオオオオ!!」

———俺視点

なんとかミコはドラゴンを倒したか

本当はザケルか白雷位にしようと思ってたんだが、余りにもミコの攻撃が効かなくて、ついやってしまった。

「はぁあゝゝ……………」

ミコがその場に経たり込んでしまった

「大丈夫か？」

「かなりきついです……」

糸を収束させるのは結構魔力を使うので」

「そうか、なら少し休んでろ

俺はドラゴンの素材を剥ぎ取ってくるから」

さて剥ぎ取り、剥ぎ取りドラゴン素材って結構高く売れるんだよな、

自分で武器やら魔具やらを造っても良いし、

……………剥ぎ取り中……………

剥ぎ取り終了



「結構な量になったな、よし、**武装錬金**、」  
カバンの**武装錬金・インフィニットストレンジ**

これは只ほば無限に物を仕舞えるだけのカバンだ

「よし、完了。」

じゃ、村長に報告してさっさと帰るか」

来た道を辿り村に向かう

———村長の家の客間

「ファイアドラゴンの討伐、完了しました。」

今、村長と向かい合い依頼達成の報告をしている

「おお、ありがとうございます。」

報酬はギルドの方にちゃんと渡しておきます。

これで我が村は安泰です。」

「いえいえ、もし万が一次に何かあったらよろしくお願いします」

「ははは、そうそうありませんよ今回のような事は、普段もＣランクまでのモンスターしか出ませんし」

「そうですか

では私はこれで」

「ええ、本当にありがとうございました」

報告も終えて宿に戻る

「明日の朝に出発するからな、それまでは自由だ」

「はい、分かりました」

ミコに自由時間をやって俺もやりたい事をする

それはこの世界の魔法を調べる事だ

最初に神がこの世界はドラ○エとF○を合わせた感じの世界だと言っていたのに、マスターのはまだ分かるとして、ミコの魔法だ魔力を糸として使うとは聞いたことが無い

だからこそ、この世界の魔法を調べて俺もオリジナルの魔法を使えないかと思ったんだ

あれから暫く魔法について調べていると幾つか分かった事がある。

一、似たような形質・性質であれば全くの同一の魔法は同時には存在しない。

例えば同じ火を使う魔法が在っても色や性質が変わってくるらしい。

二、魔法はそのタイプ事に大別されているらしい。

ミコのは魔力を、放出、して、それを、固定、し、更に、操作、や、属性付与、をしている。

俺は最初念かよ！　とか思ったが今はどうでも良いだろ。

全くの同一の魔法が存在しないのは、全く同じ人間がいらないとか、世界のバランスだとか色々書いて在ったが割愛しよう。

そんなこんなで俺は自分に合ったのをじっくりと考えて創っていくことにした。

「師匠ー晩御飯の時間ですよー」

調べたり考えたりしている内に大分時間が経ってしまっていたようだな

「分かった今行く」

ミコと食堂に行き、適当に飯を食べて、シャワーを浴びて何個かの魔法の案を出してから寝た。

次の日も朝食を食べてから、朝の内に馬車を使ってギルドがある街に戻った。

ミコが依頼は帰るまでが依頼ですとか遠足のアレみたいなことを言っていたがどうでも良いだろう。

## 十二話目（後書き）

魔法ですが、募集したいと思っています。

なので、感想にこんな魔法を使って欲しい等を良ければ書いて下さい。

逆にもう能力は要らないだろ、とかの意見も募集しています。

取り敢えず何か、感想下さい。

## 十三話目（前書き）

引き続き、カズキとギゼンの魔法を募集したいと思います。

期限は特に決めませんので、感想にどんどん書いて下さい。

その中で作者が色々意見をまとめて書いていきたいと思っています。

また、同時にこんなキャラを出して欲しいとかの要望も受け付けます

どうぞよろしくお願いします。

## 十三話目

「ギルド対抗戦？」

「はい」

「そうです」

俺は、あのファイアドラゴンの討伐から幾日か経ち、ミコのランクもBランクまで上げた時にアネリアさんに呼び出された。

そして冒頭のギルド対抗戦の話になったのだ。

「で、そのギルド対抗戦って何なんですか？」

「ギルド対抗戦は、五年に一度、首都に集まって、それぞれのギルド代表が戦って、最強のギルドを決めるんです」

「へ」

因みに前回の優勝ギルドは？」



「前は優勝ギルドは出なかったらしいですよ」  
記録にも残ってないし、出場した筈のマスターも詳しく教えてくれないし」

「H A H A H A H A H A ……」

絶対に何かやらかしたな

「それで、何でもかマスターが出場禁止なんで、貴方に出場してもらいたいんですよ」

「良いですよ」

ちょうど良い修行になるだろ

「わ、ありがとうございます」  
チムは最大五名までなんで、貴方がメンバーを選んで下さいね」

「いや、俺とミコだけで良いですよ」

「それでは、出発は三日後です」  
馬車はこちらで用意しますので、それ以外の準備をしておいて下さいね」

「分かりました」

「詳しい書類は明日渡しますので」

「はい、それでは失礼します。」

「はい、どうもです」

そうして部屋から出る

ギルドの広間に出ると酒場スペースで休んでるミコを見つけた

「ミコ、三日後に首都に行くからな」

「はい？」

突然何ですか、師匠」

「ギルド対抗戦に出場する事になった。だから、三日後にここを出発して首都に向かう」

「ええー！

しゅ…出場するんですかー！

あのギルド対抗戦に！」

「あの？」

「知らないで決めたんですか、ギルド対抗戦にはGランクの人も出るんですよ！」

「おう、Gランク」

でもマスターより弱いんだろうな」

この前もGランク最強を軽くあしらったとか聞いたし

「軽いですよ師匠、一応師匠はSランクなんですからね。  
いくら強くても本当の世界最強に勝てるんですか」

こいつ、何を言ってるんだか今までの俺の戦い方を見てないのか？

見てないな、大概一撃か見えない程速く終わらすし

「大丈夫、大丈夫

あ、あとお前も出るぞ。てか俺とお前しか出ないし」

「はいっ！！」

あ、容量オーバーだな固まってる

ミコの再起動待ち……………

「マジですか？」

再起動完了

「本気と書いてマジだ」

「二人だけですか？」

「二人だけだ」

「本来は五人一チームですよね？」

「言ってたな、そんなこと」

「…………マジですか？」

「本気と書いてマジだ。」

「はぁぁ」

まあ師匠だからで納得します。」

「ひでえ納得の仕方だな」

俺は普通の元学生だぞ

「じゃあ、師匠私は準備があるので一旦帰ります」

「ああミコ、ついでに次のページから三日後だぞ」

「マジですか？」

「本気と書いてマジだ。」

「いつまでこの掛け合いはするんですか」

「飽きるまで」

「……………」

黙って出ていくミコ

三日後になり俺とミコはギルドの前に集まった

そこには馬車とアネリアさんがいた

「準備は出来ましたか」

「はい、出来てます」

「私も大丈夫です」

「そうですか、首都までは紙に書いてあった通り五日かかります、道中モンスターや野盗の危険もありますがお二人なら大丈夫だと思うので頑張ってくださいね」

「はい」

そうして馬車に乗り込む

乗り込んだのは俺、ミコ、アネリアさん、である

「アネリアさん……付いて来るんですか？」

「当然です」

どう当然なのか聞いてみたいが、アネリアさん相手なので無言を貫く。

「まあ良いじゃないですか師匠、人数が多い方が薬しくて」

「読み仮名無いと解りにく過ぎるぞ」



「もう良いですか」  
「それでは」出発です」

ミコとグダグダ話しているとアネリアさんが出発の音頭を取って出発してしまった。

てか行者がいなかったらアネリアさんが手綱を握って馬車を操っていた

「何で運転出来るんですか？」

「受付のたしなみです」

頬に指を当てて小首を傾げながら言ってくる

うっ、可愛い。

じゃなくて、見た目的に無理がありますよ、明らかに二十代k『コロシマスヨ』

「すみませんでした！OTZ」

ガタガタガタガタ

町を出発してからしばらく

ミコは御者台に移動してアネリアさんと喋っていた。

俺は荷台に座ったままぐっすりと眠っていた

目が覚めるとそこは真っ白な空間だった

「またか………」

でも今回は夢だというのがはっきりと判るな

「いやー、久しぶりだね

――君」

声がした方を見らるといつぞやの神様がいた

「神様か……なんか用か？」

「いやなに、君達が旅の目的を忘れてるんじゃないかと思ってね。僕はこんな形でしか世界には干渉出来ないから夢の中に出てきたんだよ。」

「目的………？

あれだろ？ ほらあれ、チート能力持って異世界で面白可笑しく暮らすってやつ」

「全く違うよ、君達の本来の目的は七つの大罪を司る魔王を倒す事だよ」

「あぁー  
在ったなそんな設定、今幾つだったけか？」

「はぁ……“強欲”“怠惰”“嫉妬”の三つだよ」

「まだ、半分行ってないんだなこのペースでいって大丈夫かな」

「大丈夫じゃない、問題だ」

「ちょ、神様なんで……」

「それに最近の話が脱線し過ぎて先に進まないだね、なんでギルド対抗戦に魔王を一人参加させる事にしました」

「…………その魔王ってどんなレベル？」

「うーん…………そうだなあ…………今馬車に居る二人で云うと…………ミコちゃんだったら魔王に瞬殺されるね……」

でも…………アネリアさんだったら魔王を拳一つで悶絶させれるだろう

な（ボソッ）」

「でも、なんだって？」

「いやいや、何でも無いよ

それよりも分かったよね君達の目的は七つの大罪を司る魔王を倒す事。

もう一人の——君は居場所も解らないんだよね君も会ったらその事を伝えといてね。」

「分かった分かった了解了解しました。」

——君の所は解らないが理解出来る

「処で同じ事を二回言ったら一気に信憑性が無くなるのは何でだろうね？」

「知るか、それよりもお前の性格が変わりすぎてゐるぞ」

「僕は神様だけど精神集合体みたいな者でも在るからね。だから僕で逢って私で逢って俺で逢って君で逢って自分でも逢う。確固たる我がないんだよね。……まあ戯言だね」

「……………はあ、オーケー解ったややこしいのは嫌いなんだ、そろそろ帰してくれ」

「ん、良いよ君も起きる頃だろうし……」

グラ

「っ！……………」

なんだ、頭が重い

「限界だね、バイバイ——君」

「……………う……………ししよ……………てください……………」

ん……………なんだ

「師匠！

起きて下さい！」

「ううん……………なんだあ……………ミコ」

「やっと起きましたか……………着きましたよ。  
今日はここに泊まるらしいですよ」

「ふぁ…分かった」

「ほら早く行きますよ、アネリアさんはもう宿に行ってるんですからね」

言いながら俺の服の袖を掴む

「引っ張ってもお前の力だと無理だぞ」

「むー」

頬を膨らまして俺を睨むがあまりにも恐くない

「はいはい、睨んでも恐くないからさっさと行くぞ。  
アネリアさんを待たすのは怖いからな」

「師匠のせいで遅れてるんですよ」

「責任とは擦り付けるモノだと昔の偉い人は言ってたよう言ってたような……」

「そんな無責任なこと過去の偉人が言ってたまるもんですか」

「仲がいいのは良いですが、早くしましうね」



「サーイエスサー」

声が聞こえた瞬間ビシッと敬礼をする

「ほら早く行くぞミコ！」

「師……師匠突然どうしたんですか？」

口答えするな逆らえば殺されるぞ

「フフ……こっちですよ」

アネリアさんに案内されてとある宿に入る

「宿は予約を取ってあるので直ぐに準備がされていますよ  
はい、鍵はこれです」

それぞれに鍵を渡される

「鍵に付いている札が〓部屋割りです〓」

俺は2008、ミコは2007、おそらくアネリアさんは2006か2009だろ

「最近〓この辺りで〓盗賊の被害が頻発しているので〓戸締まりはしっかりしておいて下さいね〓」

「はいです」

「分かりました。」

盗賊フラグが建った

「ん?.....なんか嫌な電波が.....」

「まゝ何はともあれ移動で疲れたでしょうからゝゆっくり休んでくださいねゝ明日も早いですしゝ」

部屋の前まで行きそれぞれの部屋に入る

アネリアさんは隣の209のようだ

「あゝそうだカズキさんゝ？」

「何ですか？」

「夜這いは駄目ですよゝ」

「しませんよ……」

アネリアさんは確かに美人だけど、そんな死にに逝くような真似は絶対にしたくない

「私は別に良いですよ」

お前は入ってくるな、後俺はロリコンじゃないからお前には100%欲情せん

「フッフ…そうですか」

やたら妖艶に笑うのは止めて下さい

そんなやり取りもあり、今は部屋で寝る準備をしている。

準備と言っても軽く食べてからシャワーを浴びて着替えてるだけだ。

夜、ぐっすりと眠っていたのに外が騒がしくなり目が覚めた

「なんだ？」

起き上がり窓から外を覗くと、所々から火の手が挙がり人の悲鳴も聞こえてきた

「は、面倒な……」

我が身に降りかかる不運を嘆いていると、廊下から慌ただしい足音がするのに気付いた。

ドカッ

「盗賊だ！ 命が惜しけりや金目の物全部寄越しな」

「白雷」

「あぎゃ!？」

扉を蹴破り顔を頭巾で隠した如何にもな奴がナイフ片手に脅してきたが、速攻で沈めた。

白雷も黒焦げアフロになって気絶する位に威力を抑えた

「さて……ミコとアネリアさんは無事かな…」

二人の安否が気になり部屋を出ようとしたが、隣から声が――

「すみません、すみません、すみません、気の迷いと言うか魔が刺したと言うか、本当にすみませんでした。」

「あなたが何をしたか分かってるんですか？」

「すみません、痛っ！　あの人間の関節はそっちには痛たたた！」

「まだですよ！ほらこっちをこうして〜♪」

「痛たた！　えっ！？あの？　何を、ぎゃあああああ！」

——しなかったな、うん　何も聞こえなかった。

「さて……ミコは無事かな……」

部屋から出て、ミコの部屋に向かう、向かうとしても隣だから直ぐだ。

「ミコ、無事か？」

部屋の扉は壊されていてその役目を果たせていない

「ああん？　なんだあてめえは？」

部屋の中にはスキンヘッドの筋肉達磨が居た

ミコはこの状況でもまだ眠っているようだ  
あいつ意外と大物に成るんじゃないか

「一応、その女の子の保護者みたいな者だ」

「保護者ねえ………だったら残念だったなこの子は今から奴隷として売られるんだからなあ。」

言いながら下卑た笑い声をあげる筋肉達磨。

俺はひたすらうぜえと言う気持ちとこの世界にも奴隷制って在るんだと言う気持ちがあった

「まあ兄ちゃんそういう事だから大人しく引きな、俺は人死にはあまり好きじゃねえからな  
それよりもこんな子は需要が高いからな、顔も良いしかなりの儲けになりそうだ」

俺を無視して儲けの事を考える筋肉達磨  
しかし、あいつの向こう側にはミコがいるので相手を吹き飛ばしたり、あまり威力があるのは使えない、白雷も同じ技は連続で使わないと決めているので無理だし……うーん。

「あっ！そうだ」

「なんだ？いきなり」

「縛道の六十一、六条光牢、」

六つの光の三角形が筋肉達磨を捕らえて動けなくする

「なんだ！ 動けねえ、魔法か？」

「そんなもんだ」

筋肉達磨に一步近付いた時に俺は重大な事に気付いた。

……瞬歩で後ろに回り込めば良かった……

「くそっ、はああああ！」

俺が落ち込んでいると筋肉達磨が雄叫びを上げて六条光牢を壊そうともがいている

「多分無理だぞ。

さてお前には選んで貰おうか？ 痛い思いをして捕まるか、痛い思いをしないで捕まるか、……どうする？」



質問しながら、人差し指を親指で押さえて溜めを作る……所謂デコピンだ。

「へっ！ そんなん効くかよ、見てろこんな魔法俺の肉体強化で碎いてやるよ！」

「痛い思いをしたいようだな」

ドゴン

通常のデコピンでは絶対にしないような音を出して筋達で良いや、筋達の額に決まる。

「ぐはっ！」

筋達は頭をガクガク揺らしながらも六条光牢のせいで崩れることも出来ずに気を失っている

「……………気持ち悪……………」

白目を剥きながら頭をガクガク揺らし、口からは泡を噴いている筋達……かなり気持ち悪い。

「ミコ、起きろ」

「むう〜？　なんですか師匠……夜這いですか？」

「違うわ、村が盗賊に襲われてんだよ」

「それはそれは、お休みなさいZZZ…」

「うおい！起きろ！」

「むう〜？　なんですか師匠……夜這いですか？」

「だから違うわ！　いい加減起きろ！　最近話が進まなくてサクシヤも苦しんだよ」

そんな漫才のようなやり取りも終わり  
今は広場に盗賊が集まっているようなので、町の人の救助や処置をミコに任せて広場に向かっている

アネリアさんは恐怖に敗けて声を掛けることも出来なかった。

広場に着くと三十数人の盗賊が居た。

捕まった町の女性は一カ所に固められて十四人の見張りがいる

そこから少し離れた所にある人物：恐らくボスの周りに十数人がいて残りは周囲を警戒している。

盗賊にしてはかなり統率が執れていると思う、俺は勝手にならず者の集団をイメージしてたからな。

## 閑話休題

どうするかをちゃんと考えねば、町の女性を人質にとられると厄介だし……また、縛道を使うか……いや、待てよ確か……あれを使えばかなり楽になるか

「よし、武装鍊金、サテライト2（ツー）、」

二人に分裂する

意識を共有して複雑な動きは七人まで出来るが今回は二人で大丈夫だろ

そして俺は響転<sup>ソニード</sup>を使って配置に着く

準備が整ったので人質に近い方の俺が小声で、セウシル、を唱え、盗賊と人質を分断する。

見張りが異変に気付いたようで、騒ぎ出したので俺も姿を現す

「これをやったのはオメエか！」

「ある意味俺だ」

サテライト2で出したので両方が俺だからな 間違いではないだろ

「ちっ、てめえらあの男を囲め！」

ボスらしき…いや、指示を出してるし確実にボスだろ、ボスが指示を出し盗賊が一斉に俺を囲む

「むさ苦しい男に囲まれても嬉しくとも無いんだが」

俺が軽口を聴いても無反応に武器を構えてこちらを見据える盗賊達

この世界に来て初めてまともに統率が執れた集団を見たな

「さて、吼えろ、蛇尾丸、」

刀を出し、刀身をなぞりながら開号の言葉を言う

盗賊はあるものは剣やナイフを構えて突っ込み、またあるものは魔法で火の玉、氷の槍、雷の鞭を出しそれらを振るってくる

「はっ！」

蛇尾丸を使って火の玉を切り裂き、氷の槍を砕き、雷の鞭を弾き飛ばした、突っ込んで来た盗賊も同様に死なない程度に切ったり弾いたりした。

「意外と扱えるな」

かなりトリッキーな動きをするから扱いが難しいかとも思えたんだが何にしても盗賊は気絶させられたしいいか

後残っているのは見張りをしていた奴とボスだけだな

「な、何者なんだてめえは！」

わなわなしながらこっちに怒鳴るように問い掛けてくるボス

「通りすがりの旅人です」

「ふざけんなー！」

ボスは槍を持って特攻してくる。

てかボスの武器槍かよ普通盗賊のボスって剣とかだろ

一先ず蛇尾丸を消して素手になる

「嘗めてるのか！」

更に怒り狂うボス

「おら！ 死ねー！」

走ってきた勢いをそのままに俺の心臓目掛けて槍を突きだしてくる

ガシッ

「なっ！ そんな……」

突きだしてきたその槍をただ掴んだ

「そおい」

そして、ボスの腹に掌底を喰らわして殴り飛ばす

「ぐっ………はっ………」

苦しそうにするがそれでも立ち上がるボス

「くっ……て……てめえ達、手伝え」

「……………」

「おい！ てめ……え……達………？」

返事をしなかった部下を不振に思ったのか見張りの方を見たボスは  
絶句していた

「…全……滅……………」

そう、セウシルをかけた方の俺がこちらに注意が入っている間に見  
張りを全部気絶させたのだ。

「どうする？」



「まだだ、まだ“これ”がある」

ボスは懷から札のような物を取り出した。

「なんだ？」

あいつの使う魔法か何かだろうか

「なっ！ あれは召喚符  
魔力を込めるだけでモンスターを召喚出来る貴重な物を何でただの  
盗賊が。」

こいつ誰だ

それよりもあれが何か解ったから良いか、召喚系なら俺も使うか。

多分、忘れてる人ばっかだろうな……覚えてくれてる人いるかな……

常に付けている腕輪に魔力を込めて呼び出す（別に魔力を込めなくても呼び出せます）

「レヴィアタン！」

「来やがれ、バーンドラゴン！」

ギャオオオオオオオ↑レヴィ

グオオオオオオオ↑バーン

巨大な海竜と火竜が対峙するように現れた

レヴィアタンは空中に浮き、バーンドラゴンは地面に居るが

「火系ドラゴンの最上位のバーンドラゴンに……なんだあの竜は……はは……私は夢でも見てるのだろうか……」

だからお前誰だよ

「これを出しちまえばもう終わりだ、なんたってSSランクのドラゴンだからな。」

盗賊は余裕を取り戻したのか薄ら笑いを浮かべて見てくる

「いや、こっちもドラゴン擬きが居るからね、ランクは判らないけど」

「主ヨ、アレガ我ノ敵カ？」

レヴィアタンがバーンドラゴンを尾差し？しながら聞いてくる

「そうだ、適当に相手してやれ」

「はははは、殺っちまえばバーンドラゴン」

そういえば、何で言うこと聞くんだけ？ テンプレじゃ大概制御出来なくて暴走ってオチなのに

「恐らくはあの召喚符に細工が、本来自分より上位のモンスターを召喚しても命令も聞かず暴れまわるだけなのに。」

「あれ、俺声出したか？」

まさかの読心術！  
別に珍しくないけど

「いや、顔に出てただけ」

そうなのか、でお前本当に誰なんだよ

こんな会話をしているが側ではレヴィとバーンの鬨いが繰り広げられています。

「私はこの町で本屋をしている者です。  
だから、多少の知識は有ります」

「そうか、俺は通りすがりの旅人だ、この町に泊まっていたら盗賊に襲われてこうなった。」

「そうなんですか、お互い大変ですね。」

「全くだ」

「はははははははははは」

「てめえ達状況分かってんのか！」

二体の竜の戦闘をBGMに談笑しているとボスが喚いて来た

「五月蠅いなー、あっ後ろ危ないぞ」

「あゝ？ そんな幼稚な手に引っ掛かるわー」「そおい」「ごぼっ」

「あーあ、だから言ったのに」

簡単に説明すれば、セウシルの方の俺がボスを後ろから殴っただけだ

ボスが倒れて、気を失ったのかバーンドラゴンも光になって還って逝った

「フン、モウ終ワリカツマランナ」

レヴィもやや不満の様子だった

「おーい、レヴィアタン  
後、町の火を消しといて、それが終わったら還って良いから」

「任セロ」

レヴィが返事をする、レヴィの周りに水球が現れて町に降り注ぎ  
全ての火を消した

「ソレデハ主ヨ、マタ呼ンデクレ」

レヴィアタンも光になって還って逝った

「えっ？ えっ？ 終わり？ こんな呆気無くて良いの？」

「こんな呆気無くて良いんだよ」  
グリーンだよ

事後報告すると、今回捕らえた盗賊は約40名怪我人は重傷が一名、  
軽傷多数で処罰は町の人に任せた

町の人には怪我人は少なく、死者も一人出なかった。

めでたし、めでたし

そんな訳で次の町を目指して旅立った。



## 番外話（前書き）

何と無く書いてみました。  
かなり短いです。

## 番外話

そこはとある吊り橋

一人の女性を取り囲む三人のならず者と言うかチンピラ

「へへへ 嬢ちゃん俺らと遊ばねえかい」

「嫌……やめて下さい……」

「へへへへ嫌……だってよ可愛いね」

どこの世界にもこんな奴らは居るものだ  
するとそこに

「おい、邪魔だ  
退くでござる」

一人の日傘を差した着流しの男が現れた

「ああ？ 邪魔なのはおめえの方だ！」

取り囲んでいた男の一人が剣を抜き、着流しの男に斬りかかった。

着流しの男は差していた日傘で男の剣を見切り、男を吊り橋から弾き飛ばした。

「あ！わ！うわあああああああ！」

男は悲鳴を上げながら谷底に落ちていく

「やりやがったな！」

「ぶっ殺してやる！」

それを見ていた他の二人も剣を抜き着流しの男に向かって走り出す。

着流しの男は無表情にそれを眺めながら、傘を上投げる

傘を投げたその手には一本の刀が握られていた。

それを見て男達は足を止めてしまう。

「すげえ……こんな剣……見たことねえ……」

「ああ、太陽が透けて見えらあ……」

その刀は薄く美しい刀だった

「刀は見世物ではない。  
斬る物にごさる」

「「おお?」」

「拙者にときめいてもらうでござる」

ヒューー

一陣の風が吹いたようだった。

「う、ぐおあ ああ……」

ドサッ

ドサッ

着流しの男は投げた傘を掴み、歩き出す

倒れた男は死に際に言った

「か……………かつこいい……………」  
ガクッ

「なーんか違う気がするな……………はぁ……………やっぱりキャラ作りは大変

だな。

次は何を試してみようかな？」

着流しの男……ギゼンはそんな事を言いながら

忽然と姿を消すのだった

## 番外話（後書き）

どうでしたか？

ただギゼンの出番が少ないがために書きました。

## 十四話目

あれから、二三町を経由したが無事に首都に到着した。

跳びすぎ？ 気にしたら負けだ。

首都には、王城やこの国最大の王立魔法学校が在り、最初見た時はしばらく呆気にとられた。

そんな訳で、今はギルド対抗戦出場者用の宿、もといホテルにいる

アネリアさんが「明日の朝に受付がありますのでそれまでは自由行動です。観光なり休憩なりをしてくださいます」と言ってくれたので自由なのだが、表に出たら何かがおきそうなので暇をもてあましている。（ミコは言われて直ぐに首都にくり出した）

「.....」

.....

.....暇だ.....」



まだ、昼前で余りにも時間が在りすぎる。

もういっそ、トラブルやイベントが在っても良いから外に出ようかとも考えてしまう。

「トラブルもイベントも今更だ、外に行こう」

結局、そんな結論に至ってしまい外に出ることにした

「しかし、この判断が後にとんでもない結果を出してしまうとはこの時は知る由も無かった」

「はあ…突っ込み役がいないと空しいだけだな」

外に出て、大通りを目指して歩く、特にこれといった用事は無いが

只の暇潰しだ

大通りにはギルド対抗戦の為にたくさんの屋台が並んでいた。

屋台の内容は食べ物やアクセサリや武器、他には輪投げ、射的、くじ引きまである。

「どんな組み合わせだよ……」

楽しそうに輪投げをする子供の隣で、真面目腐った顔をして武器を見るおっさん……中々にシュールだ。

「昼飯でも買うか」

屋台の中でも食べ物系が並んでいる所に行き、昼飯になりそうなものを選ぶ。

「おっちゃん、これたこ焼きか？」

見た目は小麦色に焼けたあれ、まんまたこ焼きだった、関西人だった俺としてはかなり嬉しい

「たこ焼き？ 何言ってんだ坊主、これはくら焼きだぞ」

……くら？

「なあ、くら、って何だ？」

「はあ？ 坊主知らねえのか、くら、たとえば、クラーケン、の事だろが」

く……らー……け……ん？

「クラーケンッ!!」

「うお！ びっくりした、いきなり叫ぶなよ」

「あ、ああ…悪い、あまりにも意表を衝かれてしまった。一つ貰えるか」

「お、別に構わねえぜ、ほれ」

「サンキュー  
はい、お代」

辺りを見回し、手頃なベンチを見つけ座る

「頂きます」

蓋を開けて中を見る、中身は完全にたこ焼きだ

「くっくっ」

爪楊枝を二本握りくら焼きを一つ持ち上げる

まだ焼きたてで湯気を出し、ソースのいい香りが鼻腔をくすぐる。

「パクっ……モグモグ……!!」

美味しい！ 中のタコ、いやクラークンの歯応えが素晴らしく、さら

にそれが外の衣にとても良く合っている。ソースも味付けがやや甘口にしてあるが、噛むほどに丁度良くなるように考えられている。

瞬く間に他のくら焼きも食べ尽くしてしまい、かなり満足した。

「はー、美味かった。

次はどうしようかな？ このまま食べ歩くか」

それから食べ物関係の屋台を回り、最初にトラブルだとかイベントだとか言ってたのが信じられないぐらい首都観光を満喫していた。

首都観光も日が陰りだすころには粗方終わり両手一杯に食べ物を持っていた

「あー楽しかった。

明日からは大会で忙しくなるだろうし、案外良かったかも知れないな。」

「いや、止めて下さい」

「へへ、良いじゃねえかちょっと遊ばねえかい」

「そおい」（蹴り）

「がべらっ!」

ええええ分かってましたよ、何か起こる事ぐらい

「ありがとうございます。

助けて下さって」

「良いから、良いから、気を付けて帰れよ」

面倒な印象を持たれるのは勘弁して欲しいな

「強いんですね、対抗戦に出るギルドの人ですか？」

「そうだ、それよりも少し急いでいるからこれで失礼する」

「あ、すいません

それと対抗戦応援します」

軽く手を振って答えホテルに戻る

明日からは対抗戦だな

## 十五話目

対抗戦当日

今日はギルド対抗戦の予選会があるらしい。

資料にはかなり大雑把にしか目を通していなかったから、今朝ミコに教えられた。

予選会にはギルドが80チーム程参加するようで、本選には16チーム上がれる、因みにシードで予選免除のチームが3つあるらしい。

199

そんな訳で今、予選会場にいる

受付とかはミコに任せたので俺は一人で待っている。

「うわー、いかにも嚙ませ犬みたいなおっさんとかいるよー」



最近<sup>ベスキス</sup>は探査でそいつの魔力とかが分かるようになり、大概の実力は測れる

「あぁん？ 今、なんつった小僧？

俺様を見ながら嘸ませ犬とか言いやがたったな！」

「ナンノコトデスカナ、ボクニワマルデワカリマセンケド」

「おちよくってんのか、小僧」

「いや、別に、からかってるだけです」

「一緒じゃボケエ、予選前の準備運動代わりに潰してやろうか」

「からかい過ぎたかな？ 顔に青筋起ててるし、今にも殴りかかって来そうだ。」

それでも、反省も自重もしないけどな

「おいおいおいおい、よくよく考えてみろ、こんなところで暴れて失格にでもなったらどうするんだ？」

そんなことも解らないほど馬鹿なの？ 阿呆なの？」

あるれえ？

俺ってこんな性格だったか、何かからかうのが面白くなって口が勝手に

「はは……はははは……は……死ね、小僧！」

おっさんは何処から出したと聞きたくなるようなハンマーで殴り掛かって来た

「やれやれ……全く、最近の若者はすぐキレる。  
カルシウムが足りてないんじゃないか」

まっ、十中八九俺が悪いんだけどな。

でも、人がそこそこ居るこんな場所でハンマー何か振り回すなよ。

受け止めようとしたら、こっちに飛び込んでくる人影が見えたので、辞めておく

カキーン

飛び込んで来た人影は刀身から鰐、柄まで真っ黒な刀でハンマーを受け止めた

「あ？ 何だお前は！」

「こんな所で喧嘩なんかするな、するならするで誰にも迷惑の懸からない所で喧嘩しろ」

おいおい、殺気を飛ばすなよおっさん、萎縮しちゃってんじゃねえか

「あ、ああ、分かった気を付けるよ」

おっさんは逃げ去った。

「お前もだ、こんな所で挑発なんかするな」

お、俺にも殺気を飛ばして来たなでも、この位なら問題にもなりやしねえな。

「あいあいさ」

てか、こいつこの世界の主人公だろ、明らかに魔力量がおかしいし。まっそれでも俺よりは少ないがな

「ふん」

主人公君は立ち去って行った

黒ローブ（フード付き）に真っ黒な刀……………厨二っぽいな。

いや、俺も技とか呪文を言いながら戦う時点で厨二か

何だ、激しく自己嫌悪に陥りたくなって来たぞ…………でも、呪文は言わないと術は使えないしこういうのは開き直りが肝心だな

## 閑話休題

あれからしばらく待ち、ようやくミコが受付を済ませて戻って来た

「師匠、予選ブロックはEブロックでした。」

予選は各チーム代表一人でのバトルロワイヤルで、勝敗は場外が絶対です。

相手を殺したら即失格らしいですから、気を付けて下さいね。」

「ワンブロック、何人だ？」

「人数ですか？ 大体、6チームなので師匠を除けば5人ですね」

意外と少ないな

殺したら駄目は面倒だな相手もある程度の使い手だろうし。

「でも師匠、このブロックのランクは最高がSですので師匠なら余裕だと思いますよ。」

「さいですか。」

そういえば、この世界のパワーバランスはどうなってるんだ？

多分、あの主人公がこの世界の最強なんだろうけど、マスターに負けてるらしいしな

「ミコ、ギルド最強って誰だか分かるか？」

「突然どうしたんですか？ 師匠」

「いや、ちょっと気になっただけ」

「えーと、確かGランクの序列一位の人がギルド最強とか言われていますね。しかし、その人は誰にも正体を教えてないとかで、二つ名の‘漆黒の覇王’、としか呼ばれてませんね  
でも、現役を恨んだギルド連盟の総長もかなりの実力だとか……」

一応訂正

恨んだ↓退いた

「そうか………漆黒か………」

やっぱりかー滅茶苦茶心当りあるー

てか、なんでそんな奴がこんなところ居るんだよ！

「師匠、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫。

少し自分を取り巻く環境について考えていただけたから……」

なんなんだろうな………作者は俺を不幸にしたいんだろうか………

違う世界の事を考えても、栓なきことだな。

「そろそろ時間ですよ、早くステージに行きましょう。」

ステージ上には俺の他にゴツいおっさん二人（装備はA素手とB剣）、軽鎧を着て細剣を携えてる女の人、ローブを着て杖を構えている女の人、同じように杖構える男の人、の俺を含めて六人だ

ようは、最後までステージ上に残れば勝ちなのでわざわざ闘う必要はない

ということだ

「グ・リアルク」

体を透明にし、気配を消してこの戦闘が終わるのを角の方で待つ。

ステージ上では一番の手練れであろう、おっさんAがおっさんBと細剣を使う女の人と戦っている。



素手なのに剣を相手にしても斬れないのは何故かと思い、よく見てみると腕や足に魔力を纏わせて強度や筋力を上げてるようだ。

ほぼ二対一の状況なのにややおっさんAが押している

一方、あのローブを着た魔法使い風の二人は離れた所で魔法合戦をしていた。

女の人は氷を出してそれを男の人に向かって打ち出し、男の人はそれを炎の壁で防ぐ。

今度はその逆に男が攻めて、女が防ぐ、そんなたちごっこな戦闘が続く。

近接系の三人はすぐに勝敗が着きそうだけど、魔法使いの二人は長そうだ。

それでも、根気よく睡魔と戦いながら眺めていると、意外と魔法使いの方があっさりと片が着いた。

女の魔力が尽き、魔力切れで倒れて気絶してしまったのだ。

しかし、男の方もかなりきついらしく足が若干ふらついている。

そんな男の所に向こうで戦っていたおっさんBがおっさんAに吹っ飛ばされて、飛んできた。

ふらふらの男が避けることも出来るはずがなく、二人仲良く場外に逝きましたとさ。

そんな訳で、今、おっさんと女の人に向こうで戦っている。

女の方は小刻みに突きを出して、おっさんに間合いを詰められないようにしている

おっさんも突きを交わしながら、間合いを詰める隙を伺っている

さて、いい加減ただ見ているのにも飽きてきたので、そろそろ手を出そうかと思う

体を透明にしたまま、少しおっさんに近付き、横から場外に逝くように調節して手を向けて

「破道の一、衝、」

手から衝撃を出し、おっさんを吹き飛ばす

「ぐっ!?!」

「え?」

完全に意表を衝いていたので、おっさんは反応も出来ずに吹っ飛び、場外に出る

鬼道を使った影響で、グ・リアルク、が解けて姿が現れる。

「え?      なんで?      何時から?」

女の人俺が突然現れて混乱している。

「まあ、何でもいいだろ、‘衝’」

おっさんと同じように衝撃を喰らわして吹き飛ばす。

そして、ステージに立っているのは俺のみとなり、俺の決勝進出が決まった。

## 十六話目（前書き）

【総PV】一万突破

【総ユニーク】1800突破

ここまで読んで下さった皆様ありがとうございます。

これからも頑張るので何か感想下さい。

## 十六話目

「お疲れ様です。」

ステージから下りるとミコが労いの言葉をかけてくれた。

「おう、まっ、俺はほとんど何にもしてないけどな。」

「そういえば消えてましたね、でも、今さら消えても増えても師匠なら何も不思議はないですけどね。」

両方出来るけどな。

「何はともあれ、予選突破だ明日には組み合わせ発表と一回戦があるし、今日は帰って祝勝会でもするか。」

会場を後にして近くの酒場に向かいそこで祝勝会を挙げた。

祝勝会と云ってもただ、酒を飲んで騒いだけだったが

頭が痛い……

完全な二日酔いだ……

元々酒が強い訳でも無かったのに飲み過ぎた。度数は分からないが、多分6リットルは飲んだな。

「うぷっ……」

思い出したら、吐き気が……駄目だ……気分悪い……

「だらしないですよ師匠、たったあれだけ飲んだ位で」

お前……確か俺より飲んだよな………何で平気なんだ………おえ……  
……さるか……さるのか………

因みに飲んだ量

参加者

俺、ミコ、アネリアさん、マスター（何でか居た、もう居ないが）、  
ギゼン（本人希望で出現）、酒場に居た知らない人

弱い方から

酒場の人<<俺<<<<<<<<ミコ<<<<<<ギゼン<<<<<<越え  
られない壁<<<<<<マスター<<<<<<<<アネリアさん

その時の詳しい話は、また今度に

そんな訳で、今の俺のコンディションは最悪………もう、シン・ベル  
ワン・バオウ・ザケルガ’で瞬殺しようかな………あれは人類に使っ  
たら駄目なものかも知れないけど………別に良くね？



（シン・ベルワン・バオウ・ザケルガは地球では使えるレベルの呪文では有りません、バオウ・ザケルガの恐らく十倍以上のサイズと威力のものです）

「駄目ですよ師匠、人殺しは御去渡なんですから」

「ナチュラルに思考を読むな……」

後、さんずいの場所が違うぞ

「読んでませんよ、顔に書いてあります。」

顔は今、真っ青になっているんだが判るのか……

「あつ、組み合わせの発表が始まりますよ」

うっ……ヤバイ…最大級の波が…！

「ごめん、駄目、もう無理、トイレ逝ってくる」

「え、師しょ、ってまた消えた！」

チートスペックを無駄遣いして、トイレへと向かう  
ミコが何か言っていたがこの際無視だ

トイレの個室に入り胃の中のモノを全て吐き出す。

「オ——以下自主規制——」

「ふう……」

胃の中が空っぽになり、かなりすっきりした。

手と口の周りを洗いミコの居るところに戻る。

戻る時は特に急がずに歩いて移動する。

ミコの所に戻ったらやけにどんよりと項垂れていたので、声を掛けるのを少し躊躇った。

「えーと……どうした？」

「師匠、あれを見て下さい。」

組み合わせ表を指差すので、それを目で追うと其所には我がギルド  
‘福音の鐘’の文字が！！

「って、だからどうした？」

「対戦相手ですよ！ 対戦相手！」

「えー……………」

さっき見つけた所の上にある、一回戦の相手はと……、  
「竜王の翼、  
忠二くせえ

「強いのか？」

「あのギルドにはGランクが三人もいるんですよ！ はっきり言っ  
て今回の大会の優勝候補の筆頭です！」

「優勝候補ねえ…そういう下馬評が一番当たらないもんなんだよね  
え、世の中つてもんはさあ」

二人で話していると突然後ろから知らない声が聞こえた。

「どちらさんで？」

「どちらさんでもこちらさんでもええやないかあ、それよりも面白  
いそうなのはなしやないか続き聞かせてなあ、お嬢ちゃん」

「え、あ、はい。」

ギルド、  
「竜王の翼、  
はさっき言った通り、Gランクが三人います。」

序列は第三位、第五位、第六位ですね。」

「ほく、そらまた、えらいところと当たるんやなあ、気張りよお。」

「あんたの処はどうなんだ？  
出場者なんだろう？」

魔力はミコより多いがそこまで凄くはない、ランクはせいぜいAA  
かよくてSだろ

「ウチか、ウチは平気やあ、相手はSSが一人居るけどもそこまで  
有名な処でも無いしなあ」

「ふくん……」

「なんやあ、あんまり興味なさそうやなあ。  
そういえば、こんだけ話しこんどってまだ自己紹介してなかったな  
あ、ワイはリエル、リエル・ウォンや、よろしゅうなあ」

「ミコ・ユカリキです。 よろしくお願いします。」

「カズキだ、まあよろしく。」

似非関西弁の男、リエル・ウォン、身長は俺より少し高くて筋肉質な体つきをしている。年は俺より7、8上を感じる、魔力についてはミコより多い位。髪は金色で目は翠っぽい色、容姿はなんとなく優しげで人懐っこい印象を受ける。まあそんな感じ

「ミコちゃんにカズキ君ね、もし当たったら目一杯ええ試合しよな」

「はい」

「ああ」

「おい、リエル、時間だぞーさっさと来いよ。」

「お、悪いなあ、どうやらワイの出番らしい、もうちつと話したかったけども、しゃあないなあ……ほな気張ってくるわ」

「頑張ってください」

「頑張れや。」

そして去っていくリエル

「俺らも行くか」

「はい……」

なんか、一気に雰囲気が静かになったな。

あれが関西人のオーラなのか。

そんなこんなで、ただ今本選出場者控室

控室は東と西に一つずつあるらしく俺達は西側にいる、リエルの姿がないし恐らくあいつのギルドは東側なのだろう

俺達の出場順は五番目なので次の次だ。

ここで本選のルールを説明しておこう。

本選は大体五対五のチーム戦になる。俺達は五対二だが、そして、それ以外は予選と同じで人殺しは駄目、気絶、場外で負け。他は武器有り魔法有りの何でも有りの試合だ。

「師匠、終わりましたよ。私達の番です」

「ん、おお行くか」



## 本選会場

会場は予選のように真四角のステージが中央にあり、それを取り囲むように二階建ての観客席がある

ステージと観客席の間は10メートル位空いていて、そこに落ちると場外なんだろう

しかし

「こんなに観客席が近かったら危ないだろうに……」

「師匠、これは大会役員が強力な結界系の魔法使いを雇ってこのステージを霸っているのだから観客席は安全なんですよ。」

一先ず訂正

霸って↓覆って

全然似てないだろ。

「そうか、考えてあるんだな。」

ステージを覆っている結界を見ながら（透明で見えないが）答える

そうしていると対戦相手のチームが入場してきた。

相手は男2女3の編成で全員同じ柄の服を着ている

「あー、そういえば……誰がGランクか分かる？」

「竜王の翼は結構有名なギルドなんで分かりますよ。  
えっと、あの右から二番目の女の人が第三位で、極光の電姫、と呼ばれてますね。」

電姫誤字に非ず

「で、今度は一番左の男の人とその隣の女の人ですね。  
男の人が第五位で、恋愛街道まっしぐら、と呼ばれてます、女の人  
は第六位で、剣群の首領、と呼ばれてます。」

「……………」

なんだよ、恋愛街道まっしぐら、って、何したんだよ。

「ルフィアちゃん♪」

向こうで第五位の男が第六位の女の人に抱き着こうしていた。

「成る程、そゆことね。」

「でも、裏では——」

ドスツドスツドスツドスツドスツドスツ

「うざい、私に触れよう思うな。」

「——」  
「万年振られ男、とも言われてますね」

「うわ——」

女の人の魔法で現れた剣が男を串刺しにする

あれが剣群の首領の由来か

「あれ、生きてるのか？」

急所っぽい所とかにも刺さってるぞ。」

「多分Gランク同士ですし……序列もあの人の方が上ですし……きつと大丈夫かもしれないですよ……」

顔が引きつってるし、その言葉じゃ説得力がまるでないぞ

「うおおおお！！」

あ、復活した。剣刺さったままだけど

「ははは♪、ルフィアちゃん相変わらず連れないね、そんなに恥ずかしいのかい？ カサミちゃんもなんでそんなに静かなの、もっと自分を出さなきゃ、君達は美しいのだから！」



「でも、あれが……」

審判は剣が刺さって黒焦げの何かを指差しながら言う

「大丈夫だろ、そろそろ時間だし。」

「えー、ギルド、竜王の翼、の皆様準備はよろしいですか？」

「はい、大丈夫です。」

「えー、ギ「大丈夫です」……グスッ」

台詞を途中で遮られた位で泣くなよ。

「グスッ……それでは、竜王の翼、対、福音の鐘、の本選一回戦を開始します。」

「……両者、始め……グスッ」

まだ泣くか

「ミコ、適当に援護頼む。」

ヴァルセーレの剣を呼び出しながら言う。

これは呪文ではないが、何故か呼び出す事が出来た。恐らく、これは呪文の媒体なるようなものだからだろう。

「ほう、私と同系統か、しかし、それでは私には勝てんよ」

他のメンバーを下げて一人前に出てくる。

一対一でやるつもりらしいな。

「繼鶯薈劍駝遲飢」

第六位の人改め、ルフィアが何語か判らない言葉を唱えたと思えば

[illegible]





「安心しなさいよ、あの変態に放ったのと同じ様に刃は潰してあるから、死ぬことはないよ。」

「いやいやいやいや、思いつ切り刺さってますやん。」

変な関西弁が出てしまった

しかし、こちらにも剣群の首領という、通り名からある程度予想していた。

だから、ヴァルセーレの剣を用意したのだ

「行くぞ、初『シン』級呪文、シン・ヴァルセレ・オズ・マール・ソルドン、！」

呪文を唱え、ヴァルセーレの剣が分解、展開される。

そして、俺上空にも

剣―以下略―

ちよつ、そんな、相手には千文字以上使ったのに、一文字で

気を取り直して

「はああああああ!!」

柄だけになったヴァルセーレの剣を振り下ろす。

柄だけのくせにかなり重い

「くっ、陂拏弓」

相手も剣群を放って来た

俺と相手との中間地点で剣達がぶつかり合う。

数は互角だが、ヴァルセーレの剣の特性『魔力吸収』があるため、  
徐々にこちらが押している。

「ちっ、繼熨枷譴嚴」

また、ルフィアが何語かを唱えると。  
向かって来る剣群が増える。

「だが、それでも俺の術は止まらない。」

相手の剣群の壁を喰い破り、俺の剣がルフィアに殺到する……直前に術を止めて剣を消す。

「あ……ああ………」

ルフィアはその場にへたりこんでしまう。

戦意喪失だな

Gランクの割には戦意喪失するの早いな、それとも実力差を見せ付けられたからか

「ルフィアちゃん！ 貴様よくもやってくれたな！」

第五位の変態が俺に向かって喚いてくるが、それよりもあの状態からどうやって復活したかが知りたいのは、俺だけだろうか。

「ここからは、僕が相手だ、ギルド、竜王の翼、所属Gランク序列第五「邪魔です、変態」あばばばばばば！」

いや、言わせてあげようよ、それにこれは一応チーム戦なんだから少しは協力しようよ、何か怨みでもあるのか

「全く……不愉快な変態です。なんでこんなのとチームを組まないといけないのでしょうか……いつそこで一思いに……殺ってしましましょうか……」

怨みアリだな

「あのー、つかぬことをお訊きしますが、その変態は何をしたんですか？」

「この変態は、いつもいつもギルドの女子更衣室を覗くわ、ギルド

の女性メンバーを強引にナンパするわ、いきなり抱き着くわ、しかもアホだから嫌がる相手も照れてると勘違いするわ、それでもGランクの実力があるから周りもあまり言うことが出来ないわ、で、内のギルドの厄介者なんです。」

「えーと……お疲れ様です……？」

すごいストレス溜まってるとんだな。

「おまけに私の最大電力を喰らっても生きてるし、どんなに痛め付けても次の日にはピンピンしてるし……ブツブツコロスカブツブツ」

この人怖い

「えーと……トリップしてる人は置いといて、先にやるか？　そこの人ら」

Gランクじゃない二人に問い掛ける。

「ええ、そうですね、カサミさんはこうなると一時間は何をやって  
も無駄ですし。」

こいつ……イケメンだ……

「……………うん……先にやる……」

「うしっ、ミコはあの女の子な、俺は横のお兄さん殺るから。」

イケメン殺し確定

「一応僕はSSランクだ、甘く見ないことだね。」

こいつは俺がGランクに勝ったとこ見てないのか？

「……………頑張……………」

「行くぞ！」

「来い！」

「縛道の一、塞、四、這繩、六十一、六条光牢、六十三、鎖条鎖縛、九十九、禁、」

――キエフSIDE

僕はキエフ・グリブナ、竜王の翼、所属のSSランクだ

今は対戦相手のカズキと向かい合っている。

相手はSランクだし、余裕だな（この人はカズキとルフィアとの戦いを見ていませんでした。）

「行くぞ！」

「来い！」



「縛道の一、塞、四、這繩、六十一、六条光牢、六十三、鎖条鎖縛、九十九、禁、」

「なっ、ぐっ！」

なんだこれは！体が動かない。

「さあ……イケメンは私刑だ。」

「くそっ、この程度の魔法など！」

「ザケル！ ザケル！ ザケル！」

ザケルガ！

ザケル！ ザケル！ ザケルガ！」

「ぐぎゃあああああああ！！！」

「スウウウウウウウ、スウウウウウウウ」

この人……息継ぎしてる

「ザケル！ ザケルガ！ ザケル！ ザケルガ！

ザケル！ ザケル！ ザケルガ！ ザケルガーーーーツ！」

「がひゃ！ あぐひっ！ ぎやははうわあああああ……！！！」

「サイフォジオ」

あれは……剣……あれで止めを……？

「ていっ」

グサッ

刺さったのに痛くない？

むしろ痛みが和らいでいる？

これは……回復魔法……？なんで

相手の顔を見ると……めっちゃくちやいいエガオでこちらを見ていた。

嫌な予感しかないね。

——カズキSIDE

さて、こっからは俺流だ

「ザケル！ ギコル！ レイス！ ウイガル！ サイス！ ミケル！  
ビライツ！ グランセン！ アクル！ ゾニス！ ネシル！  
ゼガル！ ラドム！ ドグラケル！ ウォケル！ フレイド！ マ  
グルガ！ ガロン！ ファノン！ ミグロン！ ラギユウル！ ボ  
ギルガ！」

「ぎゃっ！　ぐはっ！　おおおおお！　うふうあああああ！」

この呪文をどの魔物が使っていたか全部分かる人はすごいと思うな。

「ごめんなさい…もう…許して…降参します…ごめんなさい  
……ごめんなさい……」

ちっ、もう終わりか。　根性ねえな

後、残ってるのは……

「ブツブツブツブツブツメルツブツブツブツブツブツブスブツブツ  
ブツブツブツブツ」

怖っ

「…さわらぬ……カサミに…祟りなし……だよ」

「なんだ、そのこじつけは……お前、ミコに勝ったのか。」

「…………ふい…」

辺りを見回すとミコが倒れていた、遠目気味だが大きな怪我はなさそうだ。

「一応俺は敵だぞ。」

「…いいよ……私の敗けで……こう……なりたく……ないし……降参……します……」

こう↓「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

ここは雛見沢ですか

「どうすっかな……」

残っている敵は、近寄りがたいオーラを放ちながらブツブツ言っている、リーダーのカサミ

「ブツブツブツブツコロスブツブツコブツブツ」

正直怖い

それと、電撃を喰らっても生きてるらしい変態

「あへへ、皆どうしたんだい突然抱き着いて来たりして、やっと僕の魅力に気付いてくれたのかい」

ピクピクしながら半目で寝言を呟く変態

正直キモい

クイクイ「ん？　なんだ？」

「私に……考え……ある……耳……貸して……」

「お前はどっちの味方なんだ？ いきなりフレンドリー過ぎるだろ」

「……良いから……ゴニョゴニョ」

「はぁ！ んな事しなくちゃ行けねえのか！」

「……グッ……」

その親指にとてつもない殺意が沸く

「……がんば……」

「………」

カサミに近付き少ししゃがむ……

そして……

「高い高い」

脇の下に手を通して持ち上げる。

子供に良くする高い高いだ

この試合は大勢の観客に見られているので羞恥心が半端ない

「ふえ……なんなんですかこれは！」



顔を真っ赤にして叫ぶ。  
気持ちには分かる

「早く降ろして下さい!」

「降参したら降ろしてやる」

「うゝゝゝゝ」

顔を真っ赤にして唸る。  
なんだかとても可愛く見えて苛めたくなる。

「どうする? 降参する? それともこのままが良いか?」

「うゝゝゝゝなめないで下さい。  
私はまだ戦えます。」

バチパチパリッ……………

「あれ…………？」

電池切れ…………？」

「どうする？（ニコニコ）」

「う……………！」

……………ん……ます」

「なんて言ったの？」

「う……………！」

……………降参します！ だから降ろして！」

「良く言えました。」

ちゃんと言ったので降ろしてあげる

「審判、俺達の勝ちで良いか？」



本選一回戦を突破した

## 十六話目（後書き）

ここまでの読了時間が100分ジャスト。

ちょっと凄いと思った。

## 十七話目（前書き）

ノリで主人公をイケメン嫌いにしてしまった。

これはこれで面白いから良いかと開きなりました。

それと、何か感想下さい。何でも良いです、批判、指摘、ホント何でも受け付けます。

## 十七話目

どうも、イケメン嫌いのドSに認定されたカズキです。

まあ、その設定は置いといて

あの試合が終わり、次の日になり、今は二回戦の相手と向かい合っている。

話が飛んだとかそんなは無しの方向で

対戦相手はギルド‘天使の涙’、なんと序列第一位の‘漆黒の霸王’、  
がいるところらしいです。

チーム編成は男の三人組、霸王君は真っ黒のローブで全身を隠して  
いて中央に、その両脇に控えるように他の二人が並んでいる。  
因みに二人はSランクらしい

「ミコ」

「何ですか」

「試合が始まったら、即行で場外に逃げてろ。  
面白そうだから、少しだけ本気を出す」

「あの、私この対抗戦に来た意味ありますか？」

予選出番無し

一回戦知らぬ間に敗北

二回戦始まる前に避難

「……………試合を見るのも大事な修行だ、観客より近くで見れるじゃないか」

「……………はあ……………分かりました、試合が始まったら、即行で場外に逃げます。」

「よし。」

「ギルド、天使の涙、の皆さん準備は良いですか？」

「ああ」



「ギルド、福音の鐘、のお二方、準備は良いですか？」

「はい」

「それでは、ギルド、天使の涙、対ギルド、福音の鐘、の本選二回戦を始めます。

……両者、始め！」

「来い、斬月、」

霸王君は真っ黒いあの刀を抜く。

両脇の男達もそれぞれの武器を構える。

俺も斬月を前に出して構え、霊圧を高めていく、霊圧の量は総隊長より少し多い位らしい（携帯で調べた）

「叩・解、天鎖斬月、」

手には刀身も鐔も柄も全てが漆黒の刀が握られていた

「来いよ……………って、なんで気絶してんの……………?」

霸王君以外の二人は既に気絶していた。

何と無く後ろを見ると、ミコもかなり辛そうにしていたので霊圧を抑える。

「面白いな、あんた、Gランクになって初めてだよ、自分と同じ位な奴と戦うのわ、俺も本気で行こう……『黒龍』」

霸王君も刀を構える。

「はぁ!」

「ふっ!」

お互いが超速で動いて斬り合う、袈裟斬り、斬り上げ、突き、薙ぎ払い、大きな傷は無いが相手には小さな斬り傷増えていく、それに對して俺はまだ無傷だ。

「ちいいっ！」

霸王君は大きく薙ぎ払い、距離をとる

「喰らえ、黒爪煉覇、」

振り下ろしと同時に複数の黒炎が襲いかかってくる

「月牙天衝，！！」

俺も斬月に霊圧を喰わせて黒い斬撃を飛ばす。

黒炎と斬撃は相殺されて消えた

「なら、これはどうだ、黒血下翔，！」

霸王君は刀を地面に突き刺した。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

なんだ？

グサグサグサグサグサ

「~~~~っ！！」

地面から棘が飛び出して来て危うく串刺しになる所だった。

この試合が人死御法度なのを知ってんのか

「くっそが！　　‘月牙天衝’」

良く考えたら、これ、技が一つしかねえ！

「ふっ…　　‘黒麟除極’」

霸王君の前に盾のようなものが現れて月牙天衝が防がれる。

霊圧上げてえ……このままじゃだるいだけだな。

あれかな、力の次元が違えば周りに影響出ないかな、でも、最後の月牙天衝使えないしな

刃禪2000時間とか普通に無理だしな。

「黒血下翔」

また、地面に刀を突き刺した

「二度同じ手が効くか！」

上に跳び、足元に霊子の足場を作る

が、地面に生えていた棘が文字通り、飛んできた

「はぁ、んなのありかよ、月牙天衝、！」

飛んでくる棘を吹き飛ばす。

失敗したなく抑えた霊圧じゃ無理がある  
今は大体副隊長レベル

そして、天鎖斬月を消す

「諦めたのか？」

「はっ、まさか！

武装錬金、バスターバロン、」

バスターバロンはフルプレートアーマー全身装甲の武装錬金だ、見た目はまんま巨大ロボ  
ットだけだな。

それが、俺の後ろに出現する

「きゃあああああ！！」

あ、後ろにはミコが居たんだった

「な、なんだそれは？」

「バスターバロンだ！」

通じる訳無いよねゝ

「そうか」

通じた！

「おら！ 行くぞ！」

バスターバロンに飛び乗り、操作する

バスターバロンで殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る蹴る殴る殴る蹴る殴る殴る踏む殴る殴る踏む殴る殴る踏む殴る

「くっ、よっ、はっ、ぐはっ！ ちっ、黒麟除極，（パリン）  
なっ、くっ、はっ、ぬっ、ごはっ！ ぎゃぴ！ へべら！ かはっ  
……………」

あれ？ 静かになったな、もしかして殺っちゃった？

バスターバロンから降りて、霸王君に近付く

「……………あ……………」

辛うじて息が有り、呻き声を出している。

「審判。」

これ、もう駄目だろ」

審判に言って試合を終わらせてもらおうとする。

「はい、少々お待ち下さい。」

審判が意識の有無を確かめるために動き出す

「くっ…、黒…尾…闇縛…、黒…玉…界…包…！！」



霸王君の刀から縄状の黒い何かが噴き出し、俺を拘束する。

更に、俺の上空に魔方陣と呼ぶべきようなモノまで展開された。

「死んだフリは卑怯じゃないか？」

「終わりだ……、黒龍葬送、！」

魔方陣からは漆黒の力の塊が降り注いだ。

「はあ…はあ…はあ…はあ…」

終わった、俺が使える中でも最強の一撃だ。しかし、これを使う必要のある人間が居ると思ひもしなかった。

この魔法は射程が短いから、あの巨人に乗られていると使えなかった……

おかしい、普通術者が気絶すれば魔法は解除される筈なのに……まさか…

ガラガラガラガラ

「痛ってえ、結構効いたぞ」

そんな、俺はGランク最強、つまり世界最強だぞ、その一撃を喰らって、なんで…なんで…

「なんで、お前は立ち上がれるんだ！」

——カズキSIDE

「なんで、お前は立ち上がれるんだ！」

「知るかよ、俺の強いからじゃねえの？」

いきなりなんだ、こいつは

て言うか、これだったら今までの魔法は交わさなくても良かったな。

交わしてたのは心理的なものだからな、棘が飛んできたらびびるよ、普通に

「嘘だ！嘘だ！嘘だ！」

俺は最強なんだ、ギルドでも、学園でも、常に最強だったんだ！」

「うーん……………」

これって、何系主人公何だろ？

常に最強って事は捨てられ最強じゃないし、巻き込まれ系でもないし……………天才最強系？　んなのあんのか？

「俺は、俺は負ける訳にはいかないんだ！  
絶対にあんたを倒す！」

「……………あまり強い言葉を遣うなよ、弱く見えるぞ。」

「この技はあまりに強力過ぎるから使いたくなかった……………だがあんたを倒すにはこれしか無いんだ！」

スルーですか

「なら、もっと早く使えよ……」

難だろうね、最初から一番強いを使えば良いのに

俺は全力で殴るのが一番強いから、絶対に使わないけどね。

「はああああああああああ！！」

一応待ってあげる

「逝くぞ、堕黒傲狂冥禍、」

そう言えば、俺以外で技名叫んでるのこいつだけじゃね。

ぷっ、痛い奴。

そうすると俺も痛い奴か…OTZ

『ふははは！ 力が、チカラが、無限に湧いてくるようだ。』

そう言う奴の姿は、最早人間から欠け離れていた。

「なんだ、その姿は！」

『もうこうなったら、人間に勝ち目は無いぞ。』

その姿は、奴の通り名‘漆黒の霸王’に違わず、上から下まで真っ黒に黒光りし、地球でも三億年前からその姿は殆ど変わってないと言われている。

台所に良く出るあれだった。

『どうした、あまりの圧倒的な差に声も出ないか？』

まあ、Gだ、Gランクの伏線に気付いた人がいたら驚きだな。

ついでに言う、勘違いしている人も多いが、奴は人間の時は常にフードを被っていて顔が見えなかったから、イケメンかどうか判らないんだよね

『無理もない、この姿を見た者は全て悲鳴を挙げて逃げ出すからな。』

そら、人間大のGが立ってたら誰だって逃げ出すわ

それと、新たに一つ確信した、こいつ魔力が異常に多いだけで主人公じゃないわ、Gに変身する主人公とか見たくない。…………微妙に見てみたいかも……

『ふははははははははは！  
行くぞ、このスピードについてこれるかな？』

カサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサ

この音でどんな動きか予想出来ますよね？

ぶっちゃけかなり気色悪い。

しかし、かなりのスピードが出てるのは間違いない、バスターバロ  
ンで捉えるのは難しいかな

「そうだ！ ‘ダレイド’」

術を使うと、辺り一面にとある液体がばらまかれる。

『ふっ、こんなものがどうした』

ブーーーーー

「飛んだー！」

正面から飛んでくる特大のG、この恐怖は経験者にしか判らない筈  
だ。



辺り一面にばらまいたせいで、逃げ場がない

『策士策に溺れるとはこの事だな。』

「なんてな、  
‘虚弾<sup>バラ</sup>’」

飛んで来たのをジャンプでかわし、バラで地面に叩きつける

『くっ、しかし、この体にその程度の攻撃など効かぬわ』

当然、バラだけが目的じゃない、真の目的は‘ダレイド’の液体に触れさせる事だ。

『まだまだ行くぞ、この羽は鋭利な刃物になっている、触れれば真  
っ二つだ』

羽を広げて飛ぼうとするが、勝負は既に着いている。

『なんだこれは？  
足が離れない！』

「ふふふふふふふふ」

『止めろ、近寄るな、その手に持っているのはなんだ？』

「これはな、GJP」と言ってな……………効果は今から身を持って  
味わうことになるよ。」

『止めろ、嫌な匂いがする（プシューー）ぎゃあああああああ  
あ！！』

ギルド、福音の鐘、準決勝進出決定

## 十七話目（後書き）

GJP（ゴ○ジェットプロ）効き目凄いよね。

ただ、それだけです。

## 十八話目（前書き）

お待たせしました。

十八話目です

## 十八話目

今日は対抗戦の中休みで出場者には自由が与えられた。

さすがに準決勝、決勝の連戦前に休息が必要だからだろう。

「師匠、今日はどうするんですか？」

「今日か……そうだな、暇潰しにお前の修行でもしてみるか。」

「はい。」

「……………やっと出番が……………ボソッ」

そして、出場者が使用できる訓練場に移動する。

「まず、言っておくが、俺は糸魔法の使い方も教え方も知らん。俺が教えるのは戦い方だ。」

「はい。」

「それじゃあ、とりあえず今から攻撃をするから、それを避けるか防ぐかしろ。」

一時間経過か俺に触れたら終了。

そのルールでやってみるから、後俺はその場から動かない。

殺す気で来いよ、お前の全力でも俺に傷一つつかないんだから」

「それは嘗めすぎじゃないですか、師匠。」

「お前は今まで何を見てきたんだ？  
始めるぞ、暇潰し（しゅぎょう）を

‘ファルセーゼ・バーロン,’」

辺りに一面に大量の星が召喚される。

これは一つ一つが呪文の発射台になる星を召喚する術である。

「行くぞ。」

せめて30分は持てよ。

‘ファルス’」

星の幾つかからビームが発射される。

「きゃあああああああ」

「ほらほら、走れ走れ、動きを止めたら当たるぞ。」

心の力と魔力を併用して連射する

「鬼——！」

鬼とは失敬な、星は全て円運動してるから、法則を見付けたら大丈夫な筈だ。多分

「糸で壁を作るのは良いが、受け止めるんじゃないかって受け流せ。それじゃあ、少し強い攻撃を受けたら破られるぞ。ほれ、‘ファルガ’」

少しだけ強力な術を使って、糸の壁を破る

「ひ  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
い」

「足を止めるな、思考を止めるな。  
少しでも可能性を見つけろ。」

「はいー！」

「ほら、次行くぞ、回転、デーム・ファルガ、」



星達を回転させて、ランダムにビームを照射する。

「いやあああああああ！」

そんな感じで、適当にローテーションして行っただが、ミコが20分位でへばってしまい、小休止にした

「……ぜえー……ぜえー……」

「だらしないな、せめて30分はもたせろよ。」

「……そもそも……良く考えたら……Gランクを四人も……倒した……師匠に勝てる訳……ないじゃないですか。」

「別に勝てとは言って無いだろ。」

「一時間経過か俺に触れたら終了って言っただろ」

「あの弾墓を掻い潜るのは無理です。」

訂正。墓↓幕、 潜↓潜

なんだろう、やっぱりルビが無いとこのネタは使いにくいな。

「そこは糸で何とかしろよ、例えば星を糸で絡めるとか、動きを制限するとかさ。」

「やろうとしましたが、糸の強度が足りませんでした。絡めても普通に動いてましたし。」

「要修行だな。」

それじゃ、後20分休憩したら再開するぞ。」

「ええ、もう魔力が無いですよ。」

「それでも、飲んどけ。」

俺の能力でブリーチに出ていた霊力回復の薬の魔力バージョンを渡してやる

「…………あのー…師匠、これ、思いっきりドロマーク入ってるんですけど。」

「知ってるか、ミコ？」

人間は死の危機に一番能力が上昇するらしいぞ。」

「なぜ、このタイミングでそんなことを言うんですか。」

「さあ」ニコニコ

「その笑顔からは悪意しか感じられないんですけど！」

「そろそろ休憩終わるぞ、次はちゃんとクリアしろよ。」

星は展開したままで軽く動かしていたので準備万端だ

「ほら、ヨーイ……スタート。‘ファルス’」

「そんな、いきなり！」

「お前、姿勢が前傾過ぎてバレバレ、大方、術を使われる前にタッチして終わらせよう。とか、思ってただろ。」

「うっ」

図星のようだった。

「ほら、どうする？」

このままじゃ最初と同じだぞ。

‘ファルガ’」

「ぎゃああああああ」

「駄目だな。」

あれからも、逃げ切れた時間だけ休憩しながら繰り返したが、ミコは俺に触れる事さえ出来ずに時間が来てしまった。

「……………」

ミコは地面にうつ伏せに倒れて死んでいる。

「起きろよ、時間だから帰るぞ。」

「……………」

返事がないただの「……んっ」

仰向けになって手だけを出してきた

「なんだ？」

「おんぶ」

「俺は一応お前の師匠だぞ。」

「おんぶー」

「お前、なんだか幼児化してないか？」

「ぶー」

駄目だこいつ早く何とかしないと

「はぁ、仕方ない、ほれ早くしろ。」

「わーい」

ミコを背負ってホテルへと戻った。

その姿をアネリアさんに見られた時に「あらあらまあまあ」とか言われたが、こっちも疲れていたので何も言わなかった。



## 十八話目（後書き）

ミコを幼児化させてみた……どうでしょうか？

これからもちよくちよく壊れる可能性があります。

何か感想下さい。

## 十九話目

準決勝当日

昨日の修行という名の暇潰しのせいでミコがダウンしてしまった。

理由は魔力切れの倦怠感と筋肉痛だ。

筋肉痛は筋肉が強くなる証みたいなもんだから、下手に回復さしたくないんだよな。

（この現象は超回復と言い実際にあります。）

そんな訳で、今日は俺だけが出場する。

……あいつホントに何しに来たんだろうな。

気を取り直して、次に当たるのが恐らく魔王が居るであろうギルド

‘魔の支配’。

名前からして如何にもって感じのギルドだ。

登録されているのも一人しかいないようだ。

ランクを調べるとFランクと直ぐに分かった。むしろ、Fランク一人のギルドがベスト4まで残ったのが話題になっていた。

向こうのブロックに残っているのがGランクの第二位と第四位が居るギルドと、第七位が居るギルドなので、こちらの異常さが際立つ。

てゆーか、Gランクの半分は俺が倒してるんだよねー

あり得ねえ確率だろ。

そうは言っても、所詮終わった話だ。

今日だけで準決勝と決勝を消化しなければならない。

オマケに魔王を倒して、でも魔王はルール上殺せないんだよな。

そんな事を鬱々と考えていると時間が過ぎ。試合の時間になった

ステージに上がると、既に相手はこちらを待ち構えていた。

相手は特に背が高い訳でも、筋肉がついてる訳でもない何処にでも居そうな男だった。

「……………」

何処にでも居そうな男だが、無駄に目力が強くこちらを無言で睨んでくる。

「ギルド、魔の支配、準備はよろしいですか？」

「……………コクッ」

頷いて肯定する

「ギルド、福音の鐘、準備はよろしいですか？」

「はい。」

「それでは、魔の支配、対、福音の鐘、準決勝を開始します。

……両者、始め！」

「一応、名乗ろうか？」

我は「あつ、別に良いよ。」  
「ご………」

台詞を途中で遮られてめっさ睨んできた。

いい加減、睨まれるのにも慣れてきたので、睨み返す。不良のガン

の飛ばし合いみたいになってしまった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

お互いが目を逸らさないでいるので、なんとも進まない。

「はぁ…………どうぞ御名乗り下さいな。」

「ふん！ 最初からそうしておれば良かったのだ。

我は‘傲慢’を司りし魔王‘ルシファー’だ！

お前を殺すために反逆地獄から呼び戻された。神に最も近い存在だ。」

名乗り挙げると、その背に十二枚の翼が生え、男とも女とも取れる中性的な美形に変わっていった。

「神に近いつってもさあ、確かそのせいでミカエルに敗けて墮天させられて、地獄で氷漬けにされてたんだよな。」

「う、うるさいわ！　今はそんな些事関係無いだろう！」

めっちゃ焦ってるじゃねえか、それに氷漬けが些事かよ。

「行くぞ！　‘ヘレル・バン・サハル’」

ルシファーが唱えると手元には暁に輝く槍が出てきた。

‘ヘレル・バン・サハル’はルシファーの異名の一つだったような……確か、ヘブライ語で‘暁の輝ける子’合ってるよな、多分

その思考は置いといて。

槍か……それなら

「武装錬金‘サンライトハート’」

ランス

突撃槍の武装錬金だ

「槍で我に勝てる等と思うておるのか？」

」

「当然。

久しぶりに真っ向からやり合って勝ってやるよ。」

「ふはははは！

思い上がるなよ！ 人間風情が！ ヘレルの錆びにしてくれるわ！」

キンキンシンカキンシャシャキンキン

槍で何合も打ち合う。

こっちは身体能力だよりのごり押しに対して、ルシファーは技でこちらの攻撃を捌き、いなして、その流れのまま攻撃してくる。



「ちょ！お前！かなり！強くね！」

「当たり前だろうが、高々数年しか鍛練していない貴様に負ける訳が無かるうて。」

数年処か四ヶ月しか、そういう経験してねえよ。

俺が戦えるのは、あくまで神様からもらったチートスペックがあるからだよ。

……今度から何か武術しよ。

「エネルギー全・開、サンライトスラッシャー、」

槍に付いている飾り布からエネルギーが放出され、その勢いで突進する。

「隙も作らずに大技を使って当たると思うたか。」

槍の穂先を器用に使われて、綺麗に力を受け流されて無防備になる。

「隙とは、こうやって作るものだ、シンクオブライト、！」

槍が輝き、一条の光となって俺を貫こうとする。

「おおおおおおお！！！」

気合いで体を動かし、マトリ。クス風に仰け反って難とかかわす。

「ふはははは、面白い事をするな。しかし、お前では我に勝てんな。」

「は」

確かに槍の腕前じゃ、勝ち目は無いかな。

力業を全部受け流されてちゃ、世話ないな。」

「はっ！諦めるのか？」

が、それもまた必然だ、恥じる事はない。」

「でもな、最近はずっと手加減して動くことの方が多くてな。ルシファー、お前相手なら、少し力を入れてみても良さそうだ。」

そして、俺は少し力を入れてルシファーの周りを円を描くように走り出した。

「中々の速さだか、我にとっては大したことはないぞ。」

「なら、もっとスピードを上げてくぞ。」

更に力を入れて走り出す。

観客は、もはや視認すら出来ていないだろう。

しかし、ルシファーは俺の位置が分かっているようで常に槍の先を調整している。

「どうした？ 何時までもそうして回っているつもりか？

そろそろ攻めてきたらどうだ？」

挑発に乗らずにどんどんスピードを上げていく、音速より少し遅い位の速度になったら、そのスピードを殺さずにルシファーに向かって行く。

音速越えたら、衝撃波で会場がえらい事になるだろうし。

カキーン

「ふっ、まだまだだな。

この程度でどうにかなると思ったか。」

「だったら、これでどうだ！」

当たる瞬間にエネルギーを発して突進の威力を上げる。

「ぬっ！」

そのままの流れで様々な角度から突進しまくる。

「くっ………！」

それでも、ルシファーはなんとか対応して一つも決定打にはならなかった。

あゝ、縛りプレイはやっぱだるいなゝ

少しだけなら大丈夫か

スピードを更に上げて音速を越える。

「何！　ぐあああああああ！」

ぶっちゃけ、裏蓮華を食らったガアラみたいになった。

「ふー………ほんの一瞬でも音速での切り返しはきつかったな。」

ステージは色んな所が挟れていて悲惨な事になっていた。

そのほぼ中央でルシファーが槍の傷と衝撃波の影響でぼろぼろになって横たわっていた。

「がはっ！ ごほっ！

……よもや我が敗れるとはな。」

「結局は力業だったけどな。」

パワー・スピード・テクニクの三要素でテクニクは圧倒的に負けてたからな

やっぱなんか武術しよ。

「ふっ……それでも敗けは敗けだ。  
殺すが良い。」

「いや、無理」

「は？」

「ルールで人殺しは出来ないんだよね。  
だから、殺るなら後でね」

「ふはははは！本当に面白いな貴様は。」

「そりゃ、どうも。」

「我は一度退こう。  
この対抗戦<sup>あそび</sup>が終われば、お互い全力でやり合おうではないか。」

「退く前に結晶寄越しやがれ。  
それと、ぼろぼろになって寝てるお前にそんなこと言われてもなあ。」

「くっ、動けんのだから、仕方無かろう。  
ほれ、これが結晶とやらだろう。」

「よし、そんじゃな。」

やることやったし、戻ろ。

「待て。 貴様、名は何と言う。」

「カズキだ。」

「そうか、覚えておこう。我の名も忘れるで無いぞ。」

「はいはい」

軽く手を振りながら、ステージを降りる。

ギルド、福音の鐘、決勝進出決定

戦利品

大罪の結晶・傲慢

残りの大罪三



## 二十話目（前書き）

すいません、めっちゃくちゃ短いです

## 二十話目

長かったギルド対抗戦もとうとう残すところ後、一試合になった。

ピンチになるようなことも殆どなく、ほぼ無傷で勝ち上がって来たが、やはりこういうものは少し感慨深くなってしまふ。

相手ギルドは、‘道化の鼻’、第七位がいる方のギルドだった。

決勝戦は、武器の類いを使わずに素手で即行で終らせるつもりだ。

さっきから、後ろの観客席に座っているルシファーが「早く終わらせろ」と言うオーラを振り撒いていて、精神衛生上大変よろしくない。

それほど本気で試合たいか。

そんな訳で即行で片付ける事にした。

「ギルド、福音の鐘、準備は良いですか？」

「はい。」

悠長に説明してたけど、もうステージに上がってて、試合開始を待つだけだったんだよね。

「ギルド、道化の鼻、準備は良いですか？」

「ええよ。」

この関西弁で気付いた人もいるかもしれないけど（いないか？）こいつはリエルだ、あの、竜王の翼、の時に出てきた奴。

こいつ、Gランクの第七位なんだよ。

「最終戦です、両者正々堂々これまでで最高の戦いをしてくれる事を祈っています。」

それでは！

ギルド、福音の鐘、対ギルド、道化の鼻、の決勝戦を始めます！

……両者！  
始め！」

シュッ

ドカッ×5

「ぐはっ」×5

バタバタバタバタ

しゅーりょー。

『『『『え~~~~~~~~~!!!!』』』』

観客五月蠅い。

しかし、ホントに瞬殺。

多分、相手は何で負けたかも分かって無いんじゃないかな。

何をしたって？

ただ、瞬歩で近付いて殴っただけだよ。

「えっと……勝者、福音の鐘、………？  
良いのかこれで？」

審判、疑問形にするなよ。  
それに良いんだよこれで。

なんだか周りは「え？これで終わり？」みたいな空気になっているが、気にしたら負けだ。

そんな盛り上がらない雰囲気の中、優勝トロフィーやら、賞状やらの授賞式並びに閉会式をした。

何はともあれ、無事ギルド対抗戦は終了した。

余談だが、決勝は大会史上最短試合時間で六秒だったらしい。

ルシファーとの試合は二秒で終わらしたがな。

ついでに後日談。

決勝で不様に敗れた‘道化の鼻’の五人はその悔しさから猛特訓して、全員Gランクになったとかならなかったとか。

それでも、再登場予定無しだがな。

### 番外話3（前書き）

本編から少し離れて、ギゼンにも活躍の場を。

### 番外話3

これは、カズキが参加した、対抗戦から一月程経った話

どうもギゼンだ。

久しぶりに本編に登場出来る事が出来て嬉しい限りだ。

いやはや、長かった。

まあ、メタ発言はここまでにしておいて、さっさと魔王を倒そうか。

神が言うにはここから程近い場所の筈なんだが。

道なりに進んで行けば何とかなるか。



.....

目の前に倒れている人がいるんだが……嫌な予感しかない。

倒れている人は丈の長い黒いローブを目深く着ていて、うつ伏せに倒れているので、男か女かを判断しかねる。

言っておくが、ここはそこそ山奥の道の真ん中だ、普通こんな所で行き倒れていればモンスターの餌になっていただろう。

運が良い奴だ。

そして、自分は運が悪い奴だ。

はぁ……

「何をしてるんだ？」

「人探し……見つからない……道に迷った……やっと道に出たけど……一昨日から何も食べて無い……お腹空いた……もう駄目……動けなくなった……以上……」

声からすると女だな、それと、こいつは計画性皆無だな。

「そうか」

確か、どこかに……あつた

「これ、食うか？」

取り出したのは、日本が誇る万能食おにぎりだ

ガバツ！！

パシッ！！

ムグムグムグムグー！

全てに！が付く勢いでおにぎりを引ったくり食べ始める。

「ゴクン………ありがとうございます。  
おかげで助かりました。」

昼飯だったんだが、別に良いか

「どういたしまして。それで、何で人探しが遭難なんて危険な物に  
成り変わったんだ？」

「いや、恥ずかしながら、あたしの兄が一月程前から行方不明に  
なってしまって、それを探して。」

「兄を探してるのか」

「はい。」

あ、そう言えば、あたしはレイナと言います。  
それで、兄は一月前にあった大会に出場したらしいんですけど、負  
けてしまい、悔しさからか失踪してしまっただけですよ。

最初はその内帰って来るだろうと思ったんですけど、流石に一ヶ月も音沙汰がないと、不安になってきて……それで、探しに来たんですよ。

情報では、この山の何処かで修行しているらしいので山に入ったんですけど……結果は……その……あの……」

「道に迷って行き倒れたと。」

「はい……」

「はぁ……素人が安易に山に入ったら、下手したら死ぬ事になるぞ」

「身を持って思い知りました。」

もう良いか。

「じゃあな、もう平気だろ。」

これ以上は、厄介事に巻き込まれそうだ――

「お兄さんも山に入るんですね。  
でしたら、連れていってもらえませんか？」

——訂正。既に巻き込まれていた。

「正気か？」

普通、初対面の男にそんな事言わないぞ。」

「大丈夫です。」

初対面で食べ物恵んでくれる人が悪い人な訳有りません。」

「これから向かう所には危険があるが、それでも良いのか？」

「大丈夫です。」

その位ドンと来いです。」

何処から来るんだ、その自信は。

はあ、面倒だあ。

「もう堂とでも成れ。」

.....

また、暫く歩いて行くと頻繁にモンスターに襲われるようになった。

襲って来る奴等が昆虫型のモンスターで数が多いと、かなり気色悪かった。

レイナもモンスターを見る度に悲鳴を上げたり、涙目になっていた。

そして、後少しで山頂に着く時に、それは起こった。

「ん？　なんか変な臭いしないか？」

「え？　臭いですか？」

なんだ？　この臭いは、上に行くにつれて強くなっていく。

「そういうことか」

山頂に居たのは、‘ベルゼブブ’、暴食を司る魔王にして、‘蠅の王’、  
‘高所の神’、‘糞山の神’と呼ばれる。  
かつて、神と謂われる事もあった悪魔にして魔王だ

……何が言いたいかと言うと。

山頂が肥溜めみたいになってるんだよ！

臭い。本当に臭い。ただただ臭い。

『人間カ？ 一体何ノ用ダ？』

ベルゼブブが聞いてくるが、多分解ってるだろう。

「何しに来たかは解ってるんだろう。」

『フツ、勿論ダトモ我ヲ倒シニ来タノダロウ？』

「その通りだ、さっさと始めて、さっさと終わらせようぜ。」

『ソウ早マルナ人間ヨ、我ノ前ニ先ズ我が卷属ヲ倒シテカラデナイ  
ト我ニ挑ム資格スラ無イゾ。  
出テコイ、我が卷属達ヨ』



ブーーーーー

出てきたのは大量の蠅。

肥溜めのあちこちから飛び出して来る。

「それがどうした、スキル、動物よけ、発動。」

飛んで来た蠅が一斉に逃げ出す。

そう言えば、レイナはこの肥溜めから少し離れた所に置いて来ている。

というよりはレイナ自身が近付きたがらなかった。

『ドウシタノダ我が眷属達ヨ！早く、アノ者ヲ殺サヌカ！』

ベルゼブブが何と言おうと蠅はある一定以内には入って来ない。

「どうした、あんたの巻属とやらは役に立たないな。」

『クッ、其ナラバ更ニ力ノ在ル者ヲ使エバ良イダケダ。  
出テコイ!』

肥溜めから現れたのは

「人間？」

『クハハハハハ。』

確カニコノ者ハ人間ダツタ。シカシ、今デハ我ノ人形ダ。

少シ前ニコノ者ガ我ノ縄張りニ侵入シテキテナ、ソレヲ捕ラエタラ  
コノ者ノ力ト心ガ我ノ力ト相性ガ良ク、試シニ力ヲ与エテヤレバ、  
コノ通り我ニ忠実ナ人形ニ成ツタノダ。  
クハハハハハハハハハ。』

『……………』

ベルゼブブは笑い、人形と呼ばれた人間はこちらを無言で見ている。

『サア行ケ人形!』

『排除します。』

機械が喋った方がまだ人間味がありそうな声で話し、黒い刀を構えて操り人形のような不恰好な動きで走り寄ってくる。

さて、どうするか……肥溜めから出てきた奴に触りたくないし、そうだな……

「、跪け、」

ドシヤッ

人形は動きの途中で不自然に（動きその物が不自然だが）止まり、片膝を付いてこちらに頭を下げる。

『ぐ………!』

言葉の重みで身動きが取れなくなってしまっているが何とか動こうとする。

『何ヲシテイル。サツサト殺サヌカ!』

ベルゼブブの腕の一本が鈍く光だす。

『が、ぐおおおおお!!』

「意思を無くした人形が勝負になる訳ないんだよ。」

「兄さん?……兄さん!」

わーお、びっくり。

このタイミングで登場ですかあ、レイナさん。

「なんで来たんだ!」

「っ! すいません。」

さっきの叫び声が兄さんの声だったので。それより、兄さん!」

跪いてる兄さんに必死に声を掛けるが、反応は無い。

「無駄だ、こいつはあそこにいるベルゼブブの操り人形にされてるらしい。」

「そんな……兄さん！  
あたしが判らないの！ 妹のレイナよ！」

『ククク、無駄ダ無駄ダ今ノコ奴ニ自我ナゾナイワ、我ニ忠実ナタ  
ダゾ人形ダ。  
動ケ無イナラ、更ニ力ヲ注ゲバ良イダケダワ！』

ベルゼブブの腕の光が強く濃くなって行く。

『ああああああああああ』

体の構造が変わり、人間から欠け離れていく。

脇腹からは新たな腕が生え、全身は固い殻に覆われていく。

「兄……さん……？」

体の変形が終わったその姿はGだった。

いや、対抗戦の時の姿がGなら今の姿はGOKIBURIだな。  
うん、進化してる。

より一層氣色悪く成っている。

ガサガサガサガサガサガサガサガサガサ

「いやー！ー！」

何あれ何あれ何あれ！ 気色悪い気色悪い！ 今すぐ潰して殺して燃やして滅して亡ぼしてー！」

うおい、一応お前の兄だろが。

しょうがないな。

「<sup>ゲート・オブ・バビロン</sup>王の財宝」

取り出したのは、様々な情報が記載された紙……………新聞紙だ！

テンション上げてもどうしようもないな。

さて、新聞紙を丸めてと…やっぱりGOKIBURIにはこれが一番だよな。

装備武器・丸めた新聞紙

「全刀流、速遅剣」

全刀流は凡そ棒状の物を全て刃物として扱えるのだ。つまり、新聞紙で人を斬る等造作も無いことだ。

そして、速遅剣は刀の刃渡りを自由自在にする事が出来る技。

この技の前には間合いなど大した問題では無い。

ズバシヤアツ!!

『ぴぎゃああああああ!!』

……GOKIBURIの鳴き声って、ぴぎゃあなのか……？  
どうでも良い疑問が湧いてしまった。

『糞、所詮ハ人形カ。

役ニ立タンナ。』

こっちもこっちで酷い言い様だな。

何だろ、このGOKIBURIがとても憐れに見えてきた。

『つつ……ぐうう……!!』

また、GOKIBURIから、人間の姿に戻る。

「元の兄さんの姿に戻ったぞ。」



「いや！ あんな蟲擬きに近付きたくない、視界に入れるのだって嫌！

あんなのと、血縁関係が在ると思うだけでも死にたくなるわ！」

こっちのが酷い。

「一応、兄なんだしさ……もう少しソフトな対応とか……」

なんで、フォローしてんだろ？

『ぐっ……はあ……はあ……レイナ……か？』

意識が戻ったようだ。

レイナを認識出来てると云うことは、ベルゼブブの洗脳も解けたの  
だろう。

「何ですか兄さん（蟲）？」

『何で……はあ……こんな所に……？』

「あなた（蟲）が一月もの間行方不明になっていたから、探しに来たんですよ。」

この子こわい

『絶望したか……兄がこんな存在で……？』

「ええ、まさかあんなモノにまで成り下がって力を求めるとは、探しに来た自分が馬鹿みたいですよ。  
逸ぞ、滑稽だわ。」

少し前まで、あんな良い子だったのになあ……

「えーと……兄妹で積もる話もあるだろうし、ちょっと魔王の相手してくるわ。」

逃げた、とか思わないでくれ、あの空気には耐えられん。

不慮エンカウンターの事故で誰かに押し付けりゃ平気だろうけど。

『人間トハ、ゲニ恐ロシイモノダナ。』

凍る火柱アイスファイアで肥溜めを凍らせながら歩いていく。  
靴に付くのは嫌だからな。

「魔王ベルゼブブよ、お前を倒すのは文明の利器だ。」

両手に鶏の絵が印刷されたスプレー缶を持つ。

『ソナモノガ、ナンニナル。』

「喰らえ、キンチョ○ルの力を。」

プシューーーーーー!! ×2

『フハハハハ、ナンダコレハ、コンナモノデ我ヲ倒スダト。』

フハハゲホッ！　ゴホッ！　ヒックシ！　エックシ！』

クシャミをする蠅……中々見られるものでは無いだろうな。

殺虫剤でなんでクシャミが出るんだ？

『ズズッ……コレハ効イタゾ。』

あれで効いたのかよ。

『今度ハ此方カラ行クゾ』

空を飛ぼうと羽ばたくが……

『ムッ？

ナンダ、脚ガ凍ッテイルダト！』

肥溜めを凍らせるついでに脚も凍らせて身動きを軽く封じておきました。

使う武器は、羽虫に対して絶対の概念を持つ武器

「ハエ叩きだ。」

『クッ、 取レナイ!』

「終わりだ。」

ハエ叩きを大上段から降り下ろす。

『クソガアア!』

ゴガアン!!

魔王ベルゼブブを潰した後に残ったのは、鈍く光る大罪の結晶だけだった。

今、ここに一つ戦いが終わった。しかし、これから更に厄介な戦いに巻き込まれるのだった。

「本当になんでこれがあたしの兄なんでしょうね？」

『いや……そのー…なんかゴメン。』

「全く、謝って済む問題じゃ無いですよ。なんで魔王なんか力を見て、あ・ん・な・姿に！」

『……でも……お前に教えて無いだけで、昔から変身能力あったし……対抗戦で今まで積み上げてきたもの、全部壊されて、悔しくて……それで……魔王に囁かれて……つい……』

「つい……ついですって！ そんなので、一ヶ月も行方不明になつて！」

『……ごめんなさい……』

何時まで続くんだろ、この不毛なやり取りは。

帰って良いだろうか？

「大体、兄さん（蟲）は！」

『ごめんなさい。』

帰ろ。

番外話3 (後書き)



## 二十一話目

久しぶりだが、カズキだ。

対抗戦も優勝と結果を残した俺は、福音の鐘、がある都市に戻ってきた。

都市に戻ってきてからはクエストをしたり、ミコを虐めた……もいい特訓したりとのんびりと過ごしていた。

そのおかげで、ミコはギルドランクSになる事が出来た。が、やはり、マスターには勝てず、SSにはなれなかった。

けれど、ミコは良くやったと思う。

あいつは、糸に風の属性付与するのを極めて、切れ味を信じられない位上げて、鋼皮を持つ俺の腕を切り落としたんだ。

なのに、マスターはその糸が絡んでいるのを無視して技を使いまくって、その上切れないんだよ。

あれは最早人類じゃないな。人の形をした何かだよ。

まあ、そんなこんなで紆余曲折経て平凡な日常を送っていた。

「はあゝ平和だねゝ」

「そうですねゝ」

「あらあらゝ二人共どうしたんですかゝ」

「少し平和を謳歌してみたくなっただけですよ。」

「そうですねゝ」

「クスクス。

それでも少したれすぎじゃないですか」

「たまには良いじゃないですか、こんな感じでも。最近、挑戦者が多くて辟易してるんですよ。」

「そうですね」

対抗戦で優勝してからは変な挑戦者が来るようになってきたのだ。大抵はミコの修行相手になってもらってるけどな。

「そういえばそうですね」でも「それでギルドの知名度が上がるなら」良いことですよ」

「当事者としては疲れるだけですけどね。」

「そうですね」

ミコ、お前、 「そうですね、」 だけで会話になると思っているのか。

バター

「ん？」

ギルドの入り口の扉が勢い良く開かれた。

「対抗戦優勝者のカズキは居るか！  
居たら勝負しやが「死ね。」 れえー！ー！！」

また、挑戦者か。

あまりの面倒臭さについて、 虚弾<sup>バラ</sup>を撃ち込んでしまった。

ま、いっか。

「今回は早かったですね」

「順番ですからね。」

そう、最初の内は修行を兼ねてミコだけが相手をしていたが、俺の腕を切り落としてからは順番制になったのだ。

まあ、それには多少の経緯は在ったのだか別にここでは関係無いだろうな。

「そうですね、確かに一々切り落とされていたら大変ですからね」

「改造なおすのも楽しいと言えは愉しいんですけど、流石にこう多いと……」

一日に何人も来られたらうざい。

バターン

「またか？」

「オラオラ！カズキとかいうやつ出てきやがれ！俺様がぶっ倒して名を上げてやるぜ！」

「次はお前の番だぞ。」

「そうですね〜」

突っ伏した状態のまま指先だけを動かす。

「どうした！びびっちゃったのか？」

俺、普通にカウンターに座ってるんだが、何故気付かない？

「俺様に恐れをなして逃げやがったな！はっはっはっ（ドサドサ）は？」

あちゃー、またやっちゃったな。

簡単に言うと、ミコが挑戦者の両腕を切り落とした。

「ぎゃー！！ 腕が！ 俺様の腕があ！！」

「五月病です。」

キュッ「かつ……………」ガクッ

頸動脈を締めて落とした。

最初からそうしろ。

「アネリアさん、補肉剤まだ在ります？」

「在りますよ」

まだ、予備があるか。でも、挑戦者がこのペースで来るとすぐに無くなるな。

（補肉剤はブリーチに出てくる薬物で、投与すると欠損した体の部位を修復・再構成する。）

これは、ミコがあまりにも挑戦者の手足を切り落とすので、造ったのだ。

わざわざ、双天帰盾を使うのは邪魔くさいからな。

でも、人の手足が飛ぶことに慣れているギルドってのも恐ろしいな。

補肉剤で治すと、腕や脚が生えてくるのが見えてかなりグロいんだけどな。

ギルド員皆今では、その光景を普通に見てるしな。

はあ、それにしても最近日増しに挑戦者が来るんだよなあ。

何でだろ。



「何でだと思います？」

「それは多分対抗戦優勝者って名前だけが独り歩きしてそれですランクならもしかしたら勝てるんじゃないかとか思われてるんですよ」

「へー、面倒極まりないですね。

いっそ、俺もしばらく旅でもしようかなあー。」

そうすれば、俺に対する挑戦者もいなくなるだろ。

ん、会話が成り立って無い。アネリアさんが読心術を遣えるのが解ってるんだから、あれで良いんだよ。

「そういえばこのギルドに来るまでは旅をしていたんですけどっけ？」

何のための旅だったんですか？」

「言ってますでしたっけ？」

「言ってませんでした」

読心術でも？

「そんなに深いところまでは解りませんよ」

「浅いところは殆ど解るということですね。」

「そんなところですよそれよりも教えて下さいよ  
こういうのは人の口から聞くから面白いんですよ。」

「そうですか、分かりました。」

えー、旅の目的でしたね？

目的と言ってもまだ達成された訳では無いんですよ。」

「えーまだ終わってないんですか」

「はい。今も目的の途「対抗戦優勝者！出てこいや！」中：ザケル  
ガ：「ノオオオオオオオオオ」：途中なんですよ。まあ、目的自  
体がそんなに急いでやることではないんですけどね。」

「へーでー肝心の目的は？」

「笑ったり、驚いたりしないで下さいね。」

「大丈夫ですよーどんなことでもー私は笑ったりなんかしませんよ

」。

「そうですか。では、お話ししましょう。俺の目的は…「ギルド最強と呼ばれる男。カズキと勝負して貰いたく、参上致しました。」…本当に多いですね。」

「ミコさん。出番ですよ。殺りなさい。」

怖いです。

そして、また、指先だけを動かす。

ゴト

ゴロゴロ

グラリ      ドサッ

「……………首は補肉剤じゃ無理だよ。」

「ミコちゃん！ 流石にやりすぎじゃないかい。」

「すいませーん、ついとうっかり手先が狂いました。」

「そうか、うっかりなら仕方ねえな。

わはははははは。

こいつの運が悪かったただだ。」

豪快笑ってるけど、殺人ですよ。

「カズキさん。後始末お願いします。」

「はぁ……双天帰盾。

俺は拒絶する。」

便利だなこれ、死んでも平気だし。

「皆さーん、そこにいる人達をー外に出しといて下さいねー」

「「了解しました。」」

もう、この風景にも慣れたな、うっかり殺人もたまにあるし。

最初の皆の取り乱し方が懐かしくなってしまうよ。

「それでは〜続きお願いします〜」

「はい。えーと、確か目的でしたよね？」

「はい〜」

「俺が旅をしていた目的は七つの大罪を司る魔王を全て倒し、その上にいる魔神を倒す事です。」

「あ〜また出たんですか〜ちゃんと倒した筈なんですけど〜」

What?

「倒した筈なんですけど〜って、どういうことですか。」

「いや〜少〜し前に暴れていたの〜倒して回った事があるんですよ〜」

中々強いかったですねー魔神なんかはー三発もかかってしまいましたー」

ふと、それを聞いていた近くに座っていた若きギルドメンバー（ラ  
ンクC）が

「魔王の話ですか？ 僕も子供の頃は良く聞かされましたよ。でも、あれはご（ズドン）ぴゃく！！」

若きギルドメンバーアアア！！

ごびゃくってなんだよ、五百か五百なのか

「それはそれとしてー大変ですねー私も全て倒すのにー一週間もかかりましたよー」

「あの……少し前って……具体的にはどのくらい何ですか？」

「それは別に良いじゃないですかーということとはーこの前ー対抗戦に出ていた人はーやっぱり魔王だったんですねー何処かで見たことがあるなーと思ってたんですよー懐かしいなー」

もう、倒したんですけどね。

「でも、残りの魔王の居場所が判らないので、ゆっくりと情報を集めてるんですよ。」

「大体の居場所なら判りますよ。教えてあげましょうか？」

何で知って……いや、考えるのはよそう。

「教えて下さい。」

「分かりました。え。どの魔王について知りたいですか？」

「憤怒・暴食・色欲ですね。それ以外の四つは既に倒してます。」

「なるほど。地図を持ってくるのでちょっと待ってて下さいね。」

アネリアさんは奥へ入って行った。

「ふーむ……ミコ、お前は どうする？」

俺は魔王の居場所が分かればまた旅に出るが。」

「どうでしょうか、いや、師匠はどうして欲しいですか？」

「俺か？ 俺は……」

さて、どうするか

「俺としては、お前を置いていきたいな。  
その方が速く動けるし。」

「そうですか……私との関係はそんな簡単なものだったんですね……  
…ヨヨヨ」

泣き真似が業とらしい。

「もう、修行やらも必要ないだろ。  
後は自分でより高めていくだけだ。」



「はい、師匠。」

そうですね、戦い方によっては私の方が強いんですね。」

「近距離だけな。」

近距離だったら、即行首切られて終わりだしな。それ以外なら、糸の射程外戦えば勝てるし。

「師匠、だったら何か卒業した証みたいなの無いんですか。」

「証か……ふむ、考えとこう。」

「ありましたよ」

アネリアさんが戻ってきたか。

「魔王の居場所はこここの三カ所です。後少し毛色は違いますが似たようなのがここにいますね」

「毛色が違うって何なんですか？」

「それはゝ行ってみてからのゝお楽しみですゝ」

「そうですか。」

「でもですねゝ正直ゝ憤怒とゝその毛色の違うのはゝ別格なんです  
よゝ傲慢に苦戦していたゝカズキさんではゝキツイと思うんですゝ  
更に魔神はゝその遥か上をいきますからねゝ」

「で、つまりは？」

「はいゝ簡単に言えばゝ今のあなたの実力をゝ見極めようと思いま  
すゝそしてゝ必要ならゝ私直々に鍛えて差し上げますゝ」

「それはそれは……丁重にお断りさせていただきます。」

「じゃあゝ訓練場に向かいましょうかゝ楽しみですねゝ♪」

「ミコ、卒業の証には何が欲しい？　なんなら今から買いに行っても良いが？」

「師匠……現実を視ましようよ。」

「H A H A H A H A H A H A , N A N N O K O T O Y A R A ?」

「逝きますよ〜カズキさん〜♪」

「師匠……逝ってらっしゃい。」

嫌だ！嫌だ！  
アネリアさんとの特訓なんてそんな死亡フラグ満載のことしたくねえよ。

あの人、ひとことでレベル∞とか書<sup>い</sup>われてるんだぞ。

レベル160の俺が生き残れるわけないだろ。

「人を鍛えるのは久々ですね。前はマスターでしたから中々無茶も出来ましたし。ふふふふふ」

「ちょ、何故鍛えるのが前提になってるんですか！それに口調が！」

「ほら、逝きますよ。」

ズルズルズルズルズル

おれが引き摺られていたときにギルドでは、ドナドナが流れていたとかいなかったとか。

そんな俺にも一つだけ確実に分かる事がある。

トラウマ  
心の傷になるな……と

## 二十二話目

生き延びた………生き延びる事が出来ましたー！

イヤツフウー！！

生きてるってえすうばあらしいい！！

……………ゴホン。

忘れて下さい。

少しでもテンションが上がってしまいました。

しかし、しかし、それでも、俺は、アネリアさんの特訓を嫌あれは特訓ではない最早拷問だ、それを耐え抜きました。生き延びました。

生きてるってえすうばあらあししいい！

はっ！またやってしまった。

## 閑話休題

あれから幾日経ったかわ分らないが、それなりに経ったようだ。

特訓中は常に極限状態まで追い込まれてたので、時間感覚がおかしくなってしまった。

それでも、効果は莫大だった。レベルの上昇率は異常だったし、短時間であらゆる格闘技の基礎を叩き込まれた。発展的にしたのは合気だけだったけど……

そうそう、拷……特訓のおかげで音速を超えても衝撃波を出さないようにする事が出来るようになった

理論とかは分からないが出来た。

後、アンサートーカーを完璧に扱えるようになった。むしろ、扱えなきゃ早々に死んでいた。でも、アンサートーカーを使ってもアネリアさんに勝つ答えは出なかった。

特訓の報告はこんなものかな。

報告も終わったし、そろそろ魔王を倒しに行くかね。

「アネリアさん、ミコ、そろそろ行ってきます。」

「行ってらっしゃい

師匠、師匠なら大丈夫ですよ、あの特訓をしても普通に生きていられるんですから。」

「まだまだ技術的な面は鍛え足りませんが、魔王を倒す位なら大丈夫でしょう。でも、私に一発は入れて欲しかったですね。」

「はははは、んな無茶な。」

この人、殴りかかっても、斬りかかっても、音速超えて衝撃波を出しても受け流して、俺の勢いをそのままにカウンター入れて来るんだよ。おまけに内部浸透のダメージを。  
綱皮貫通してダメージ与えてくるんだ。勝ち目ねえよ。

「ここはもう私遠の家で、皆は家旅です。必ず戻って来て下さいね。」

「ん、必ず戻るよ。  
じゃあ、行ってくるか。」

瞬歩を使い移動する。ミコには突然消えたように見えただろう。  
アネリアさんは見切っていたようだが。

さて、まずはアネリアさんが言っていた少し毛色が違う奴からにするか。



方向を定めて、最高速で走る。

一秒半で……到着！

嘘です、通り過ぎました。

初速でマッハ50超えてたからね。はははは、これに対応出来てたんだよね……あの人……

着いた所は教会だった。

そこはギルドより大きいがとてもボロボロになっている。

廃れた教会だった。

教会……大罪を司る魔王なのに……教会

似合わねえだろ。

入口でうろろうろしていても始まらないし、入るか。

ぎぎいゝゝ

重々しい木の扉が擦れる音を聞きながら、中に入る。

中は外に比べれば、そこまで荒れ果ててはいなかったが、あくまで比べれば、だ、人が過ごせるような空間では無かった。

「誰も居ないし……さて、どうするか？」

ここでの選択肢は、待つ、壊す、探す、帰る、だな。

待つのはだるいから却下だ、壊すのも何があるか分からないから却下、探すか。

こういう時は、大体風を感じて地下に行くための階段を見つけるのがベタなんだが……あちこちからすきま風が来て分かん。

……アンサートーカー使うか、これは卑怯臭いからあまり使いたくないんだよな。

じゃあやるか、魔王の居場所は………やっぱり地下か、行き方は……あの像の下に隠し階段があるな。

その像は女の顔に額に第三の目があり、長い舌をダラリと垂らし腕は四本、二本は腕を上げもう二本は片手には生首、もう一方には剣を持っていた。首には骸骨のネックレスそれ以外は何も身に付けていなかった。

ぶっちゃけ、カーリー神だ。

インドの最高神三柱の石柱。

細かい事を知りたい人はググってくれ。

（うろ覚えです。作者の頭に最初に浮かんだ神がカーリー神だっただけで他意はありません。かなり自分の思考回路について悩みましたが。）

変な電波が来たが無視しよう。

カーリーの像ということは、ラクタヴィジャか？  
それともそのままカーリーか？

まあ、東方の悪魔か神が出てくるんだろう、教会は西洋風だからまだ分からんか？

でも、これは和洋混同も甚だしいな。

どうでもいいか、神に会った今でも俺は無神論者だし。

それにしても神話とかに詳しいって？

ファンタジーとかそう言うのは大好きだったんだよ。

ゴホン！

気を取り直して。

パンッ

バチバチバチバチ

像から扉を錬成して階段と繋げる。

言っとくけど、俺は豆粒ドちびの錬金術師みたいに趣味悪くないぞ。

普通に、シンプルに錬成したぞ。

「すうううう……はああああ、うし！ 往くか！」

軽く気合いを入れて階段を下っていく。

コツ コツ コツ コツ コツ

と、暗い階段に足音だけが響いている

あれからどれ位下っただろうか、空気も冷たく地下特有の匂いがする。

そんな永遠に続くように思われた階段も唐突に終わりを告げた。

地下聖堂と呼ばれるものなのだろう。

上の廃れ具合が信じられない程の荘厳な空気を漂わせる空間だった。

「は〜」

その空気にあてられしばし茫然と辺りを見回す。

「……凄いな」

とてもじゃないが、魔王が居るとは思えない神聖な場所だ。

「……ZZZ」

……神聖な場所だ。

「……むにゃ……はぐれ……メタル……経験値……アルテマで……  
……ああ……合体した……」

何の夢なんだ？ 気になる。

それとも起こすべきか。

「……エルロン家……死者の目覚め………にぎゃあああああ  
ああああ!!」

勝手に自分の夢で文字通り跳び起きた。寝転んだ状態のまま本当に跳んだ。

「はっ！ 貴方は。」

こちらに気付いたようだ。

「俺は「いえ」」

遮られた……

「言わなくて結構です。」

私は予め貴方と此処で出会う事を予想していました。」

……寝てたじゃねえかよ。

「それでも、お互いに初対面であることには変わりありません。なので、自己紹介をしましょ。どうぞ、自己紹介して下さい。」

俺からなのか？

この流れで？

「あーえーと……俺の名前はカズキ。  
ギルド‘福音の鐘’に所属している」

「ええそうでしょう。貴方がその様に自己紹介するのを私は予め予想していました。」

お前の返答は俺の予想の斜め上を行きっぱなしだけだな！

「それでは、私も名乗りましょう。  
私はミカエル。九階級の最高位熾天使にして四大天使の一人です。  
気軽にミカエルかミーちゃんとも呼んでください。」

「西洋か〜〜〜」

しかも、天使ってなんだよ、天使って。

悪魔とか魔王とかの対極の存在じゃないか。



「ええ、貴方がその様にリアクションをとると私は予め予想していました。」

それで、貴方は何をしにいらしたんですか？

いえ、予想は出来ているのであくまで確認ですが。」

「俺も一つ確認したいが……良いか？」

「問いに問いを返すんですね。しかし、構いませんよ。何故なら、私は貴方がそう返して来るのを予め予想していましたから。」

「ミーちゃんは何か大罪を司っているのか？  
司っているのなら、何の大罪を？」

「貴方のその疑問も私は予め予想していましたので、答えて上げましょう。」

一つ目の問いに対してですがYES…です。

二つ目の………問いに対しては、司る大罪は正義………です。」

そんな大罪は、七つの大罪の中には無い筈だ。

七つの大罪は、強欲・怠惰・嫉妬・暴食・色欲・傲慢・憤怒、の七つの筈だ。

## 八つ目の大罪……第八の大罪・正義

「で、何でそんな大罪が存在していて、それをミーちゃんが司っているんだ。」

「貴方が（r y

何事にもイレギュラーというものは存在するのですよ。

それでは闘りましょうか。

神に貴方達に出会えば闘うように仰せつかっていますので。」

「ああ、最後に一つ良いか？」

「別に構いません。何故なら貴（r y  
で、なんですか？」

「アネリアさん……って知ってるか？」

「ひっ！

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ。

知らない私は何も知らない。ただ神に頼まれて結晶を受け取っただけなんだ。

だから……だから……いいやあー！

なんだ、こいつも被害者か。

ミーちゃん……君とは友達になれそうな気がするよ。

「……なんか、ごめん。」

「はあ、はあ、はあ、はあ、大丈夫だ、もうあの女はいない。何百年前の話だと思っているんだ。

大丈夫大丈夫大丈夫。私なら出来る。大丈夫だ。」

必死に自分を慰めてる……ホントごめん。

「落ち着いた？」

「はい。ありがとうございます。」

あれから紆余曲折あったが、どうにか落ち着いたようだ。

しかし、あの動揺の仕方は経験者にとっては同情を禁じ得ないのは致し方ないと思う。

「それでは闘りましょう。あのモノを知りながらも生きているということは、私も本気を出さざるを得ないでしょう。」

ミーちゃんは幅広の西洋剣を抜き放つ。

それは実戦用に創られているにも拘らず、儀礼用にも劣らぬ美しい装飾が施された剣だった。

「行きますよ、天界最強の私の剣技  
その身に受けなさい。」

ミーちゃんは剣を構えて間合いを詰めてくるが、俺には通用しない。

でもさ、よくよく考えたら、アネリアさんを知ってる奴は、内のギルドでは結構いるけどな。

あれかな？ ほらあれ、人間歳をとると丸くなるってやつ。

話を聞く限りアネリアさんの年齢は、はっきり言ってばば（ズドーン！！）

「がああああああ！！！」

ば、馬鹿な！ チートを超えた俺が知覚も出来ずにダメージを受ける攻撃なんて！！

ミーちゃんの動きは完璧に見切れていたし、仮に当たっていたとしてもここまでの威力は無いはず。

「え？ え？」

ふむ、どうやらこの攻撃はミーちゃんのものでは無いらしいな。

本人も訳が分からず、おろおろしてる。

「……ゴホン……どうですか？ 私の一撃は。」

「お前の攻撃だった事にするんかい！」

『え？ え？』とか言いながら、慌ててたじゃねえか！

「くっ、しかし貴方がそう反論するのを私は予め予想していました。それでは先程のダメージは誰が与えたと言うのですか？ 私以外に有り得ないでしょう。」

確かにここは地下聖堂で入口らしきものは後ろの扉だけしかない、特訓の成果からこの程度の距離なら余裕で気配を読むことが出来るし不意打ちは無い筈だ。

やはり、何か見切れない攻撃をされたのか？  
それにしても当たるまで一切感知出来なかったし、ミーちゃんの反応も不自然だ。

「確かに状況はミーちゃんしか有り得ないな。」

考えるだけ無駄か。

「仕切り直しといきましょうか。」

「そうだな。俺もそろそろ武器を使おう。  
来い、ヘレル・ベン・サハル、」

「っ！ その槍は！ 貴方が何故それを！  
………いえ、私は予め予想していましたので言葉は不要です。  
いきますよ。」

言葉は不要……か、折角これを選んだんだから、もっとリアクシヨ  
ンをとってもらいたかったなあ……

一応ミカエルとルシファ―は双子の兄弟なんだし。

「はっ！」

「ちょ！」

槍、なんだから、肉薄、されたら、苦しい、んだよ。

「タンマ！ タンマ！ いきなり激しすぎるぞ！」

「うるさい！」

「取りつく島も無しかい！」

なら、響<sup>ソニード</sup>転で後ろに。

「甘い！」

「はいー！？  
うごっ！」

あっさりと反応された上に斬り飛ばされた。それに、変な声出しちまった。

「弱すぎますね。それで、本当に彼を超えたのですか。その槍は見せ掛けだけの偽物ですか。」

言わせておけば……禁断<sup>アネリアさん</sup>の言葉を使うぞこの野郎。

「ふっ、槍の扱いに慣れていないだけだ。」

「威張って言うことではありません。」



ちょ、そんな冷ややかな目で見ないで。

実は、このタイプの槍は使うの初めてなんだよ。

アネリアさんの特訓は無手が基本だったんだ。

武器は手の延長だとしか教えてくれなかったんだ。

だから、そんな目で見ないでー！

「閑話休題」

「突然何です。いや、貴方が（r y」

「俺には槍は向かないらしい。」

サンライトハートしかり、ヘレル・ベン・サハルしかり……あれ？  
俺ってまともに武器を扱え切れてない？

全部、特殊能力か身体能力のゴリ押しじゃね。

この自問自答も何回目か。

「と言う訳で、」

「どう言う訳ですか。脈絡が無さすぎます。いえ、それでも私は予  
(r y」

ヘレルをしまい。

「武器を変えるところでしょう。  
乱舞せよ！‘崩山’」

「貴方も剣を使うのですね。しかし、私(r y」

「これは刀と謂うものだ。いくぞ‘崩山乱舞’」

とにかくやたらめったに刀を振り回しながら間合いを詰めていく。

「そろそろどうした手も足も出ぬか！！」

「……………」

無言はやめて、かなり心が痛い。

それでも、最後まで貫くぜ。

「なに

恥じることはないそれが道理！

なにせ これはとある大剣豪の剣技！

今までただの一度たりともやぶ（ゴッ）

ズザーー ドゴン パラパラ

「余りにも隙だらけですよ。」

「よっと、やっぱり無理か。」

何事も無かったかのように立ち上がる。

どうなったかは擬音から予想してくれ。

「思いつ斬り！ 刃で打ち据えたのに、何故全く切れないんでしよ  
うか。」

「うん。俺もちょっと引いてる。」

少し衝撃があるだけで痛くない。さっき吹っ飛んだのもたんなるノリだ。

「……………どうやら……………私も本当に全力を出さないといけないようですね。」

ミーちゃんから何かオーラのようなものが溢れる。

「神と同等の者と謳われたこの力……………出来れば人間に使いたくは無かった……………」

言いながらも背中には巨大な一對の翼が生えてくる。翼には複雑な文様が刻まれて妖しく輝いている。

「しかし、これを「そおい」へぶらいつー!!」

なんかヤバそうだからついやってしまった。

反省も後悔もしてない。

むしろ、戦闘の最中に悠長に語りながら変身をする奴を待つ義理も無い。

「この場合、お約束と云うものが有るでしょう。」

「知ったことか。世の中そんな甘く無いんだよ、そんな甘っちょろい幻想なんぞ本やテレビの中にしかねえよ。」

現実是如何に卑怯に姑息に立ち回れるか何だよ。はっ」

それらしい事を並べているだけの戯言だ。

いや、それらしい事も並べていないな。それでこそその戯言だけだね。

「しかし、今の私にこの程度のダメージ、耐えきれないとしても。」

「そりゃ、手抜きがなく手を抜いて加減なく手加減して容赦も情けもかけてやったんだから、立ってもらわないと困るよ。」

「くっ、言いますね。しかし、その余裕が何時まで続くか楽しみで  
す。」

「あ、志む、じゃなかった。ミーちゃん後ろ後ろ」

「いったい何です？」

後ろを確認するミーちゃん。だが、

「そおい」

「よしゅあー!!」

「戦闘中に敵から目を離してはいけない。基本中の基本だよ。」

「貴方が言ったからでしょう!」

「おいおい人のせいにするなよ。それに、こんな初歩的な引っ掛けに反応するとは思ってなかったし、普通あんな話題の切り替えは不思議に思っただろ?」

「~~~~~っ!」

なんかこう、からかうのが楽しくなりすぎたな。そのせいで戦闘意欲がことごとく削がれていくが。

ミーちゃんの本気モードも今ではコミカルに見えるし。

「もう、終わらせない?」

「貴方が散々掻き回してこうなってしまったんでしよう!」

「それもあるんだろうけど」

「それが全てです」

「俺の責任でこうなったけど、もう面倒だしお互い全力で攻撃してそれで決着つけない?」

「……………良いでしょう。」

受けてたちます。私の全身全霊を込めて御相手致しましょう。」

「別にそこまで頑張らなくても良いよ…………」

「くうあああああああー!!」

背中の翼を大きく広げ文様が金色に輝く、さらにミーちゃんの前に複雑な魔方阵が描かれていく、それが文様と呼応するように輝き出す。

「バシレイユ・ビオレゲンス、これが私の最強の技です。」

「どんだけ」

この温度差が痛い。

ミーちゃん真面目。俺悪ふざけ。

「一応、攻撃だけは真面目にやるか……………バオウ・ザケルガ!」

今のバオウは真の力に目覚めている。なので、以前マスターに破られたのとは、サイズ、威力から全て違うのだ。

「バオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

声は同じだが



「くっ、バシレイウ・ビオレデンス、発動！」

ミーちゃんの前に描かれた魔方陣から多数の光線が放たれる。

光線は曲線の軌道をしていて、軌跡には羽を残していく。

見た目は竜の息吹だ。  
ドラゴンブレス

「綺麗だなあ……………」

「うう…………ああああああっ!!」

あ、バオウって側面からの攻撃に弱いな、正面は飲み込んでるけど側面は光線が爆発してる。

ダメージが有るかどうかは別だけど。

ドドドドドドドドドドドドドドドド 「バオオオオオオオオオオオオオオ」

光線の中を喰らい進むバオウ。  
そして……

パキーン

「そんな……魔方阵が……」 「割れたな……見事に。」

「オオオオオオオオオオオオオオ」

「きゃああああああああ」

「俺の勝ちだな。」

「私の負けですね。ふふふ……まさか敗けるとは……これが私に渡された結晶です。」

投げ渡されたのを受け取る。

「これが……正義か」

「もう、行きなさい。私は直に消えるでしょう。」

「ミーちゃん、最期にいいか？」

「良いですよ。私は貴方が最後の最期に疑問をぶつけてくるのを予め予想していましたから。」

今わの際までその口調を貫くとは……

「これ（結晶）ってさあ……魔神呼ぶために必要？」

「必要無いですね。」

バツサリ切られた。

「魔神を呼ぶのに必要なのはあくまで七つの大罪の結晶ですから、正義はあってもなくても一緒ですよ。」

「ああ、やっぱり無駄骨か……」

「無駄ではありませんよ。」

ほら、この剣と秤を授けましょう。天使の力が込めてあります。」

「天使の力か……役に立つのか？」

「悪魔等の魔に纏わるものに対して強力な効果があります。」

「ほろろキーアイテムみたいなもんか。」

「ふむ、どうやら、そろそろ限界のようですね。」

「そうか。」

ミーちゃんの足先が透けて見えかかっている。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「なんだ？」

「この地下聖堂は私の力で存在してます。」

「つまり？」

「私が消えれば当然崩れます。」

「ふっざけんなああー!!！」

この地下聖堂がどれだけ深い所に在ると思ってるんだよ。

「ガンバ。」

戦闘中でも沸かなかった殺意が今ここで信じられないほど噴出してきた。

「くそがあああ!!」

ダッシュで階段まで行き駆け上がる。

「あんまり、衝撃を与えると崩壊を早めますよ」

「ぬおおおおおおおお」

衝撃を出来るだけ与えないように走り方を変える。

階段を使うしかない螺旋階段が憎たらしい。

――ミーちゃんSIDE

行きましたか……

「また人間に敗れるとは……因果なものですね。」

もう体も大分消えてしまいました。しかし、私には消滅はあっても死はありません。

次に目が醒めるのはいつたい何時になるんでしょうね。

目が醒めた時にはどんな人が現れるんでしょうか？

どんな事があっても運命として受け止めましょう。

それが私の生き方ですし。クスクス

もう……本当に……限界の……ようですね。

今回は楽しかったですね。

ミーちゃんと呼んでくれましたし……そういえば、私は女何ですけど……なんでルーちゃんと……兄弟とか言ってたんでしょう？  
まあ……良いですか……

.....  
ズズウン

,



## 二十三話目

どうも、カズキです。

今から重大発表があります。

それは……………

容姿が思いっきり変わってしまいました!!

え？ 文字だけの小説だから解らない？     それほど重大じゃない？

画面の前の皆様方はそうかもしれないですけど、当人としてはかなりの問題なんですよ。

今の俺の容姿は、180を越える長身、螢火色の腰まであるような

長髪、そしてなにより……顔が完全に女顔に成ってるんだよ……O  
TZ

もう一つ大きな問題もあるが、今は置いておこう。

せめてものの救いは、よくある可愛い系シヨタじゃなく、凛々しい系の顔だった事か……これだったら、着る物によっては男に見えなくもない……無理だな……息子の方は無事だよ。むしろ、前より立派になった。

ゴホン

あゝ〜なんでこうなってしまったんだろ。

あんな時に好奇心なんて発揮するんじゃないかなあ。

———あんな時

「悪魔に対しての武器が手に入っただのは良かったけど……この結

晶どうしょ？

魔神を呼び出す為には必要ないんだよな。」

でも、なんかには活用したいよなあ………何に使える？

確か、神がメールで大罪の結晶はそれ自体がエネルギーの塊とか言ってたしなあ

そうだ！ 黒い核金と融合させてみよう、ついでに賢者の石も。

ヴィクター化はエネルギードレインのコントロールの問題で、黒い核金を作ったはいいいけど、使えなかったんだよな〜

もしかしたら、これを使えばいけるかも。

そして、賢者の石、黒い核金、大罪の結晶を融合させる。

出来上がったのは………そうだな………紅い核金………と呼ぼうか………紅い核金が完成した。

後はこれを心臓に埋め込めばOKだ。

一応、緊急用に白い核金を準備しておいて、埋め込む。

結果から言えば成功した。

髪の色は螢火色になり、かなり伸びてしまったが許容範囲だ、周りの草木に影響がまるでないことから、エネルギードレインは無いか、在っても極微量なのだろう。

肌の色も赤銅色に成ることは無かったが、やけに白すぎる。前よりも白くなった位だ。

立ち上がり、周りを見渡せば目線が高くなっている事に気付いた。

それに背中になんか違和感が……

「はて？」

自分がどうなったのかが気になり、全身が映るサイズの鏡を錬成する。

鏡に映った、その姿を見て。

「なんじゃこりゃー！」

太陽に吼えてしまった。

実際は鏡にだけど。

――

そんな訳で、この顔になってしまった。

別にイケメンとかなら良いよ。

確かにこの顔は美形だ。十人居れば十人振り返るだろうほど美形なのは認めよう。

ただ、どう見ても美女なんだよ。

結晶か？

結晶が原因なのか？

何処とは無しにミーちゃんに似てるけど、ミーちゃんも確かに男と  
も女ともとれる顔をしていたけどもだ。

今の俺の顔は100%女だ。

もし、ギルドに戻っても気付いてもらえるかな？

『ただいま』

久しぶりだなミコ。』

『えっと……あの……どちら様ですか？』

『……………』

うん、簡単に幻視できる。いきなり知り合いの顔が変わって判る人

がいる筈無い。

もう、この顔で生きていくしかないんだ。賢者の石も大罪の結晶も使っちゃったし、こうなったら、さっさと魔神を倒して、なんとかしよう。

決意新たに魔王の居場所目指して歩き出す。

「あ、あまりのショックに方角が分からなくなっちゃった。」

直ぐに足が止まった。

「どっちだったかなあ？」

地図見ても辺り一面全部草原だから判んねえよ。」

街道なんて気の利いた物なんてない。

「町探すか……」

.....

「ぶはっ！」

嫌な目覚めだ。

「はあ……はあ……」

なんて夢を見てしまったんだろう。

俺が女顔に成るなんて冗談にも程がある。

「はあ、顔でも洗って目を覚まそ。」

ここは、ミーちゃんと戦った教会から、そこそこ近い位置にある町の宿屋だ。

記憶があやふやだが、疲れたのでここで宿を取ったのをなんとなく覚えている。

部屋に備え付けてある洗面台で顔を洗う。



バサア

「ん？」

待て待て、俺の髪はこんなに長くないぞ、それにこの色……

螢火色……

夢じゃなかった……

夢じゃなかった……

重要な事だから二回言った。

「あ~~~~~」

もう良いや、諦めよう。

大分強く成れたし、この顔でも俺は男だ。未練も捨てた。

「そういや、夢？ 記憶？ が正しければ……………ふん！」

バサア

背中に紋様が刻まれた翼が生えてきた。

ミーちゃんの背中に生えていた翼だ、これは自由に出したり引っ込めたり出来る。

この翼の効果は広がっていると自然に頭に入ってきて、理解する事が出来る。

完全に出しきれば、ミーちゃんの使っていた、‘バシレイユ・ビオレゲンス’も使えるだろう。

後は、空も飛べる。

空を飛べるのは、今さらどうでもいいがそれ以外は便利な事が多い。

くう

「まず、飯だな。」

宿屋の食堂に向かい、朝食を摂る。

朝食の味は可もなく不可もなくというような味だった。つまり、普通だ。

そして、食堂で昼食のサンドイッチを買って、宿屋を出る。

「さて、次は距離からして憤怒かな。  
折角空を飛べるようになったんだし、空の旅といかか。」

町の中で翼を出せば、流石に目立つので町から少し離れた場所  
で翼を出す。

今までは一瞬で目的地に着いていたし、たまにはのんびりとした旅も良いだろ。

出した翼をゆっくりと羽ばたかせて、浮かぶ。

これは何処の筋肉を使ってるんだ？

背筋？ 胸筋？ 腹筋？ 幾らか魔力を使ってるとしても、今まで動かさなかった筋肉を動かす感覚は何ともいえない。

「うーん……でも、筋肉痛になるようなこともないだろ。」

考えながらも羽ばたきを続けていたので、結構な高度になっている。

「では、のんびり、ゆったり、景色を楽しみながらの空の旅に洒落込みましょうかね。」

憤怒を司る魔王・サタン。

その居場所目指して飛ぶ。

圧力でサンドイッチが台無しにならないぐらいの速度で。

## 番外話4（前書き）

ここまでのキャラ紹介とキャラ説明

## 番外話4

キャラ紹介& a m p; 説明

カズキ

身長／187センチ

体重／72キロ

この作品の一人目の主人公。

身体能力は世界最高峰になっているが、技術的なものが足りていないため、戦いはごり押しが基本。

アネリアさんに鍛えられ、合気道だけは使えるようになった。

容姿が、賢者の石十大罪の結晶（正義）＋黒い核金、から出来た紅い核金を取り込んで女顔になった。

変化後の顔は、凛々しい系のお姉さんみたいな感じ。見た目20代前半。かなりの美女……男なのにな。

倒した大罪は、強欲、嫉妬、傲慢、正義の四つ。だが、本人は正義をカウントする気がない。

因みに、もうどうでもいいだろうが、レベルは255、初期能力の25万倍の能力。なので、紅い核金を創った時にブリーチのざらきが付けていた眼帯のように、無限に霊圧を喰い続けるリストバンドを二つ作り、更に限定霊印をして、アンサートーカー封印等いろいろ制限かけている。

それでも、多分霸王君には圧勝出来る。ルシファーには善戦して、ミーちゃんには惨敗する。

しかし、全部解除して全力でマスターに挑んだら、互角の戦いを出来たが、僅差で負けた。

アネリアさんとは、語るまでもない。

そんな感じ。

ギゼン

身長／不定  
体重／不定

この作品の二人目の主人公。

だが、影が薄い。キャラが定まらない。等の問題が多くて、出番が  
少ない。

作者的には一番めんどくさいキャラ。

カズキとは逆に身体能力頼りではなく、虚刀流や全刀流、真庭忍法  
を巧みに扱う技巧派。

ゲート・オブ・バビロン  
王の財宝に新聞紙やキ○チョール、蠅叩きを入れて物置代わりにし  
ている。

異常や過負荷はメインではなく、サブとして使う事が多い。  
容姿も、骨肉細工や骨格変化で定まらない。

覇気は、見聞色が得意で動きの先読みはかなりのもの、反面武装色  
はあまり得意ではない。霸王色は完璧にコントロール出来るよう  
になっている。

倒した大罪は怠惰、暴食の二つ。

レベルは140。

本人はレベルを気にしていないのでどうでもいいらしい。

レベル差はあるが、相性的にカズキに絶対勝てる。スカーデット（致死武器で心  
の傷を開かれれば、多分精神崩壊を起こすから。）



マスターにも勝てると思う。  
マスターもアネリアさんの特訓を受けているので、カズキと同じ理由。

アネリアさんとは、語るまでもない。

神

身長／168センチ  
体重／52キロ

身長、体重は二人の前に現れた時の姿  
二人にチート能力の元を与えた人物で、強さは作中No. 2  
No. 1はおして知るべし。

スライム

体高／50センチ  
体重／25キロ

初登場のモンスター。  
物理攻撃無効と実はそこそこ凄いモンスター。でも、雑魚キャラ。

## 宿屋の夫婦

身長／169センチ・163センチ  
体重／56キロ・82キロ

初めて止まった宿屋を経営していた夫婦。

夫は金貨を見ただけで卒倒する程気が弱く、妻は勝ち気で典型的な  
かかあ天下だが、仲はかなり良い鴛鴦夫婦らしい。

あの金貨を元手に今ではかなりの金持ちだとか。

## マモン

身長／197センチ  
体重／112キロ

強欲を司る魔王。

魔王でかなり偉いくせに、言動が小物臭い。  
魔法は空間を操るもので、実はかなり強力。ギゼンの見稽古で既に見取られている。

モンスターちっくな人

身長／206センチ  
体重／145キロ

レヴィアタンの居城にいたモンスター。  
魔王の居場所を聞き出すためにカズキにグラビティによる拷問と言  
う名の質問をされ、ちゃんと答えたのに虚閃<sup>セロ</sup>を食らい消し飛んだ、  
可哀想な人。

ベルフェゴール

身長／？  
体重／？

怠惰を司る魔王。  
よく寝てるらしい。

レヴィアタン

身長／75メートル  
体重／測定不能

嫉妬を司る魔王。

巨大な海蛇のような姿をしていて最早海竜。  
神殿に來たのに居ないと言う理由で海を凍らされ、出てきたのにカズキとギゼンのケンカに巻き込まれて、神殿を滅茶苦茶にされた。  
その後何故かカズキに腕輪を渡し、使い魔みたいになってしまった。

ミコ・ユカリキ

身長／155センチ  
体重／41キロ

モンスターに襲われている所をカズキに助けられ、それ以降師匠と呼ぶようになった。

カズキ曰く、可愛いらしい。

使う魔法は、糸魔法で属性付与したり収束して貫いたりとかかなり使い勝手いい。

最初はファイアドラゴンに苦戦していたが、今では特訓前のカズキの腕を切り落とせる程に。

少し天然なのか、言葉使いや、漢字が間違ってることが多い。また、うっかり首を切り落とすこともあったが、カズキが居なくなっ

らは気を付けてる。

アネリアさん

身長／調査員が行方不明  
体重／同

ギルド‘福音の鐘’の受付で看板娘。

受付以外の仕事も軽々とこなす万能ギルド員。  
しかし裏では、

間違いなく作中最強で最凶の人物。

使う武器が大鎌ということしか分からないが、マスターが戦斧を使用し、カズキに合気道を教えていることから、様々な武器・武術を使用出来る可能性もある。しかし、戦った相手は必ずとてつもなく大きな心の傷を負うことから、知らない方が幸せかもしれない。

何百年も前の出来事を知っている、体験している事からそのねん「ちょっと……」え？　なんでここに、ちょ、ぎゃあああ（ピーー  
ー、少々お待ち下さい。

酷い目にあった。

（なんとか復活したようです。）

ここは本編とは関係ない異空間なのに、全く………はあ………続きいこうか。

門番

身長／177センチ

体重／68キロ

福音の鐘がある街の門番。

仕事は適当。

試験官

身長／171センチ

体重／61キロ

カズキが受けた試験の試験官。  
一骨により鎧が砕かれ敗れた。

コルナ

身長／169センチ  
体重／55キロ

ローブを纏ったいかにも魔法使いみtainな女性。  
カズキの戦闘を見て勝ち目はないと戦わなかった。

マスター

身長／220センチ  
体重／155キロ

ギルド‘福音の鐘’のマスター。

本名もちゃんと在るのだが、ギルド員皆がマスターと呼び続け、誰も本名を覚えていない。マスターもそれを黙認している。  
強さとしては昔アネリアさんに鍛えられ人外の域に達している。  
過去のGランク（今よりかなり強い）を七対一で敗っている。  
カズキの腕を切り落とせるミコの糸でも皮膚が切れない。

Gランクでは無いが二つ名を持っている。しかも複数。

‘褐色の魔人’

‘殲滅の戦鬼’

‘剣が刺さらない、てか、斬りかかったら剣が折れた’

‘あれ人間？ 完全消滅魔法食らって無傷だよ？’  
‘絶望の化身’  
e t c , e t c ,

規格外の超人である。

## 盗賊団

ファイアドラゴン討伐クエストに向かう途中で現れた盗賊。  
やたらと知性的だったり世紀末だったり死亡フラグを建てたりとま  
とまりがまるでない。

カズキに焰の錬金術でウエルダンで焼かれた。

シエラフ・マルテ

身長／166センチ  
体重／90キロ

ファイアドラコンの被害にあった村の村長。  
マシンガントークを得意とし、相手に口を挟ませない。  
娘はいるが、妻を亡くしている。そのため、娘を溺愛している。



ファイアドラゴン

身長／20メートル  
体重／1500キロ

下級の炎竜。それでも、Aランクモンスター。  
ミコは苦戦していたが、カズキに虐殺された。

筋達

身長／182センチ  
体重／116キロ

スキンヘッドの筋肉達磨略して筋達。  
ミコを拐って奴隷にしようとするが、カズキに阻止され縛道で動けない所にデコピン食らい、気絶、捕縛された。

盗賊のボス

身長／173センチ  
体重／67キロ

実は元騎士団所属。

過去に何かあり、騎士団をクビになり盗賊に。  
盗賊になってからも、騎士団時での経験を生かし部下を統率していた。

武器である槍は、騎士団の時から使っていたもので、札と一緒に持ってきていた。当然、許可など貰っていない。

バーンドラゴン

体長／60メートル  
体重／測定不能

最上位の炎竜。

レヴィアタン（遊び）と互角位には戦う事が出来る。

ルフィア

身長／167センチ  
体重／52キロ

Gランクで‘剣群の首領’、という二つ名を持っている。

同じGランクで序列が上の第5位の男にまとりつかれて、うざく思っている。

使用魔法は古今東西多種多様千変万化の剣を召喚、使役することである。

Gランク序列第5位の男

バカナルシー

キエフ・グリブナ

身長／188センチ  
体重／71キロ

イケメン。

カズキにぼこぼこにされトラウマになってしまっている。

カサミ

身長／144センチ  
体重／33キロ

‘極光の電姫’の二つ名を持つ、Gランクの序列第3位。  
本来実力はかなりあるのだから、ギャグ要員にしかならなかった。

霸王君

身長／175センチ  
体重／60キロ

ギルド最強にして、Gランク序列第1位の‘漆黒の霸王’。  
戦闘方法は刀を媒介に炎や斬撃を飛ばす。刀での直接攻撃。で、遠  
近両方に対応出来る。

最終手段としてはGに変身して身体能力を上げる。  
対抗戦に敗れてからは、行方不明になり、ベルゼブブの下僕になっ  
た。

ギゼンに救われはしたが、家族からは絶縁された。

ルシファ―

身長／186センチ  
体重／74キロ

傲慢を司る魔王。

男にも女にも見える中性的な美形で、背中に六枚の羽が生えている。自分が地獄で凍り漬けされていたのを言われるのは苦手。

槍、ヘルル・ベン・サハルを使用していて、その扱う技量はなかなかのもの。

リエル・ウォン

身長／176センチ  
体重／60キロ

関西弁を使うGランク序列第7位。  
決勝開始と同時に瞬殺された。

ミカエル

身長／186センチ  
体重／74キロ

正義を司る熾天使。

渾名はミーちゃん。

話していると「予め予想していました」とよく切り返してくるが、それに疑問を持ったら話が進まなくなるので、スルーするのが賢明。武器には剣を使用し、その剣には魔払いの力がある。

その実力はアネリアさんに格が違うと言わしめるほど高い。

最期は教会の地下深くで眠りについた。

## 二十四話目

ふん♪ ふん♪ ふん♪ ふん♪

気持ち良いね、空の旅は。

吹き抜ける風は爽やかだし、眼下に広がる自然風景。

こんな、のんびりした旅も良いもんだね。

そろそろお腹も空いたし、サンドイッチでも食べるかな。

サンドイッチの入ったバスケットを取り出す。

バサバサバサバサ

「……………」

風圧で無理。

「じゃあない、降りるか。」

下を見回し、丁度良い場所を探す。

綺麗な湖があったので、その畔で食べる事にする。

湖に向かい降下する。手に持っているサンドイッチが崩れないようにちゃんと注意する。

湖の畔は芝生の原っぱになっていて、直に座っても大丈夫そうだ。

「うん。良い場所だな。」

上から周りを見た限り、近くには町や村も無かったので、この場所に人が来ることは無いだろう。

なので、翼を出したままにしておく。

どんなものでも一々出したりしまったりは面倒だしな。

それでは、昼食の準備をして



「頂きます。」

パクパクモキュモキュゴクン

口が小さくて食べにくい。

慣れるまで少しかかりそうだ。

しかし、こういった所で食べるご飯は美味く感じるな。

「ごちそうさま。」

サンドイッチも食べ終わったので、少し休憩することにした。

「ふあゝ」

陽射しも心地良いし、眠くなってきたな。

昼寝でもするか。

待てよ、この翼をこうして、ここを曲げて、上手くやれば……………出来た。

ふはは、なんという気持ちよさだ、羽毛布団なんて目じゃないぞ。

翼なんてどうでもいいと言ったが撤回だ。これは、かなり便利な物だ。

さて、寝るか、一応<sup>ペスキス</sup>探査をかけて、悪意や敵意が近づいて来たら、起きれるようにしとかないとな。

そして、俺の意識は闇に沈んでいった。

……………

「……………ら………こした………ほ………が………」

「……………ねが……………え……………し。」

「……………は、き……………しよな……………」

意識が浮上してきた時に周りから話し声が聞こえてきた。

探査に引っ掛からなかったから、悪意や敵意は無いんだろうけど。

「なんだ？」

「「うわっ！」」

「ひゃっ！」

声を掛けただけでそんな驚くなよ。

「いや、あのここはモンスターの多い危険指定地帯ですよ。」

「だから？」

話していたのは学生か、制服のような物を全員が着ている。

「だから？って、こんな所で寝てたら危ないでしょ。  
モンスターに食べられちゃうわよ。」

「それに、この湖の回りの森に居るモンスターは強力なモノが多い。  
武器も持たない女の一人歩きなんて自殺しに来たようなもんだぞ。」

女に見られたか……OTZ

「そんな言い方しなくても……すいません。そんなに落ち込まないで下さい。でも、ここは本当に危険なんですよ。」

落ち込んでる原因は、お前の考えと違うと思うぞ。

「はぁ、危険なのは分かった。所で、この背中のモノについては触れないのか？」

「羽根のことですか？」

「確かに珍しいけど、学園にも有翼人種位居るわよ。」

「居るな。」

あ、この世界では別に大丈夫なんだ。

「ふーん……いや、住んでた所じゃ俺しかいなくてな。いつも変な目で見られてたんだ。」

質問の意図を理解してくれたようだ。嘘だけど。

「それじゃあ、君達はこんな危険地帯に何しに来たんだい？」

「ギルドの依頼で、ここにしか群生していない薬草を採りに来たんです。」

「ほー、依頼で、若いのに偉いねー」

「若いって、あんたとそんな変わらないでしょ。」

「違う。有翼人種は寿命が長い。」

そうなの、知らなかった。

「で、ですね。僕たちはもう薬草を採り終わって帰る所だったんですよ。」

その時に湖の畔で眠っている貴女を見掛けて、危ないと思い起こそうとして今に至る。という事です。」

「そうなんだ、わざわざありがとうな。」

軽く笑って礼を言う。

「い、いえ、人として当然の事をしただけです。」

ちょっと待て。なぜ、そこで赤くなる。ニコポのスキルが男に発動しても嬉しく無いぞ。むしろ、悲しいぞ。

「そういう訳で、あんたさえ良ければ、あたしたちの馬車で町まで送ってくわよ。」

もう日も暮れるし、空を飛ぶにしても危ないでしょ。」

「その町はどこにあるんだ？」

「あっちだ。」

指差すだけって……

でも方角は合ってるしな、一緒に行くか。

「うーん、そうだな一緒に行かせてもらおうか、その方が安全そうだし。」

「オッケー、決まりね。」

「よろしくお願いしますね。」

「…………ふん。」

最後、態度、悪。

「皆よろしく」

「じゃあ、行きましようか……えー」

「カズキだ。好きに呼んでいいぞ。」

「そうですか、カズキ……さ……ん……えー……失礼ですけど……もしかして……男性ですか？」

「何を今さら、口調で気付くだろうが、俺は男だ。」

[illegible]

「……」ポカーン

そこまで驚くか。

「俺も名乗ったんだし、そっちも名乗ってくれよ。」

「……え？……あ、はい、僕はヴァルコール・ツアイヒエンといいます。ヴァンと呼んで下さい。」



「あたしはイリス。イリス・フェアエルよ。」

「……グレイブだ。」

「ああもう、ちゃんと自己紹介しようよ。」

「…グレイブ・ノーバディーツだ。」

「そうか、皆改めてよろしくな。」

「はい。こちらこそ。」

「ふふん。あたしたちがいれば安全は確約されたも同然よ。」

「そろそろ行くぞ。」

「そうだね、暗闇の中で森を進むのは危険だ。」

「行きましょ、カズキさん。」

「ん、ああ。」

ヴァンにイリスにグレイブか……姿格好の説明は、はしょって良いよな。

森の中を一行で進む。

先頭はヴァンで、そこからイリス、俺、グレイブの順だ。

森に入る時自然と決まったから、いつもこの順番なのだろう。

武器は、ヴァンが両手剣、イリスが短弓、グレイブがナイフだ。

魔法がどの位のものは分からないが、魔力は全員並み以上かな。

「なあ、君たちはギルドに所属してるんだよなあ、ランクはどの位なんだ？」

「ここは危険地帯何だろ。」

「あたし達のランク？」

「それなら全員Aランクだよ。」

「この危険度はBランクだ。」

「ヴァンだけは、周囲を警戒していて会話に入って来ない。」

「じゃあ、君たちがいれば本当に安全なんだな。」

「今まで信用してなかったんですか。」

「はははは。」

「Aランクなら大概の敵はなんとかするだろうな。俺はのんびりしたいし、傍観しとくか。」

その隊列のまま、森の中を進んで行く。

「まだか？」

「もう少しですよ。」

上から見たときは、そんなに広く感じなかったんだがな、まだ出ることが出来ないのか、もう、完全に日が暮れてしまったぞ。

何か明かりが必要だと思っただけど…

「なあ、辺りは真っ暗になってきたのに、明かりは点けないのか？」

木々に遮られて月明かりも入って来ない深い森だ。いい加減危ないだろ。

「大丈夫ですよ。ヴァンにはちゃんと見えてますから。」

「…………目がいいんだね。」

「見えてるといふよりは、感じるの方が正確ですけどね。」

ヴァンが答えてくれた。

「探知系の魔法か。」

「その通りです。何処に何がある程度分かれます。まあ、範囲には限度がありますが、不意討ちは殆どありませんね。」

「便利なものだが、俺と話していて良いのか？  
他の二人も警戒を解いているようだが。」

「大丈夫ですよ。ほら、着きました。」

言葉通り、森が途切れていた。

森を抜けた先は何も無い原っぱだった。

「や……っと、出れたわね。」

「後は、薬草をギルドに届ければ依頼完了だな。」

もう一度言う

・  
・  
・

何も無い原っぱだった

「馬車は？」

「それでしたら……グレイブ頼む。」

「ああ。」

グレイブが何も無い所にしゃがみ、地面に手を付いて何か唱えている。

すると、突然、馬車が現れた。

「ほお〜」

「む、反応が薄いわね。もっとこう、うわっ……とか、凄い！……とか

無いの？」

「いや、よくよく考えれば危険な森の近くにそのまま馬車なんか置いたら、モンスターにとって餌を置かれているのと変わらないよな。」

「つまらないな、大抵の人はもっと面白い反応してくれるのに。」

「はいはい。」

「準備がおわったので乗って下さい。」

「おーす、よろしく。」

馬車に乗り込む。

御者台にはグレイブが乗っている。

「出発するぞ。」

ピシッ、と

馬に鞭をいれて馬車を進める。

本物の馬が引く馬車に乗るのは初めてだな。

「町まではどのくらい掛かるんだ？」

「えー、大体…三日位ですかね…あくまで何も起こらなかった場合ですけど。」

「三日か…。」

掛かりすぎだな、昼間から飛んだ方がまだ速いだろう。

「ですから、」

「ん？」

「ここから、少し離れたところで野営します。流石に、あの森の近くは危険ですから。」

「ふーん」



その後はヴァンと世間話ともとれるような会話をしていた。

イリスは早々に眠っていた。

三十分程走った所で野営することになった。

ヴァンとグレイブの二人でてきぱきとテントなどの野営道具を準備していく。

イリスはまだ馬車の中で寝ている。

「手慣れたもんだな。」

「ははは、遠出が多いですからね。」

「見たところ学生だろ。  
何で遠出が多いんだ？」

「内の学園の教育方針が習うより慣れろ。なんですよ。だから、座学よりもギルドの依頼を受ける方が多いんです。」

「なかなか珍しい学校だな。」

学校なんて知識を詰め込むだけだと思ってた。

「ですよ。こんな教育方針、きっと内だけですよっと！  
うん。こんなもんだな。」

テントが完成したようだ。

「食事は携帯食糧で我慢して下さいね。味気無いけど便利ですから。」

「いや、食糧は大丈夫だよ。  
保存食位は持ち歩いてるから。  
それよりもイリスを起こさなくて良いのか？」

「……………寝起きのイリスは怖い。」

「……………そうか。」

久方ぶりの登場の、インフィニットストレレンジ、からファイアドラゴンの干し肉を取り出してかじる。

結構旨いんだよこれが、歯応えもあるから腹にたまるし。

「何だ、それは？」

携帯食糧を食べていたグレイブが聞いてくる。

「これか、これはドラゴンの干し肉だよ。」

「「……………」」

「どうした？」

「旨いのか」

「美味しいんですか」

「結構イケるぞ、食ってみるか？」

「貰おう。」

「頂きます。」

「ほれ。」

干し肉を手渡す。

それを食べた二人は。

「ほう……」

「これは……」

夢中になってかじっていた。

飯も食ったし…もう寝るかな。

昼寝してたけど、それはまた別だな。

「俺は寝る。干し肉はここに置いてくから食いたきや食いな。」

コクコク

詰め込み過ぎだ、ハムスターかお前らは。

「お休み。」

「ふおふあふふいふあい」「(ブンブン)」

とりま飲み込め。

さて、また翼を布団代わりにして寝るか。

————ヴァンSIDE

ムグムグムグムグ

本当に美味しいな、この肉は。

今まで食べたことの無いような味が口の中に広がる。

「なあ。」

「む？ ふあんぶあ？」

「口の中の物を処理してから喋れ。」

ムグムグムグムグゴクン

「ふいー、で、何だ？」

「おかしいと思わないか？」

「なにがだ？」

「はぁ……あいつがドラゴンの干し肉を持っていたことだ。」

「何で？」

「ドラゴンが一番弱い種でもAランクだぞ。」

「っ！」

そう言われてみればそうだ、なぜ今まで気にしなかったのだろう。

「成る程、つまりは…」

「ああ、あいつはAランク以上の実力者だ。」

「でも、有翼人種は稀少だし、それ程の実力者なら噂位にはなるはずだろう？」

僕はそんな話聞いたこともないぞ。」

「そこは……分らん。」

「分からん…か、まあ、良いじゃないか。  
こんな風に頭を突き合わせててどうにかなる問題じゃないだろ。  
あの人はいい人そうだし、大丈夫だよ。」

言いつつ新しい干し肉に手を伸ばす。

「知り合ったばかりの奴を信じすぎるなよ。それに食い過ぎだ。」

「なんか嵌まっちゃったんだよね。これ。」

「早目に寝ておけよ。明日も早いんだろ。」

「そうするよ。結界はどうした？」

「ちゃんと隠蔽用と、防御用の二つを張ってるよ。」

「そうかい、じゃあお休み。」

「ああ、お休み。」

グレイブの結界は頼りになるな。これのお蔭で不寝番をたてなくて



すむし。

あむ、むぐむぐ。

しかし、言われたことを考えると、不思議なことも多いな。

最初は危ないと思って声をかけたのに、こうなるなんて予想もしてなかったし。

カズキさん……あなたは一体何者何ですか。

答えなんて返ってこないか。

「さて、僕も寝るか。」

立ち上がって、軽く伸びをしてテントに入る。

「俺は俺でしかないよ。」

「え？」

気のせいかな？

何か聞こえたような。

……もう何も聞こえないな。やっぱり気のせいかな。

僕は、テントの中で横になり眠りについた。

## 二十五話目

「んゝゝゝ」

おはよう。今起きたばかりのカズキだ。

コキコキ

翼を布団代わりにするのは気持ち良いが、何せ背中と繋がっていて、寝返りをうてないのが地味にきついな。

改善の余地ありだな。

昨日、話をしていた所に行くと既に誰か起きていた。

「おはよう。」

「あら、おはよう。

早いわね。」

「そっちな、俺はイリスが起きてるのが意外だけど。」

昨日も馬車に乗ってからずーっと寝てたからな。

「あんなに寝たら、そりゃ早く起きるわよ。」

それもそうかと思いつつ、何気なく周囲をみやると。

「げ、あいつら全部食ってやがる。」

あの干し肉を入れていた、袋だけがその場に残っていた。

ご丁寧に飛ばされないよう上に石まで置いて。

……別にいいか、干し肉はまだあるし。目を三角にして怒る程でもないな。

「どうしたの？ 何かあったの？」

「いや、むしろ何もないのが問題かな。」

「？」

「何でもないよ。そんな真面目に考えなくていいよ。」

「それなら良いんだけど。」

「所で、早起きして何してたの？」

「朝食を作ってたの。」

あの二人じゃ、どうせ携帯食糧で済ませちゃうだろうし。  
あたしが仕方無くやって上げてるの。」

「へえ〜どれどれ。」

イリスが作っているのは

「……………<sup>ダークマター</sup>暗黒物質……………？」

「だーくまたー？ 何行ってるのよ。これはパンとハムを焼いただけよ。」

どんな火加減で焼けばここまで黒々としたものが出来るのか小一時

間問い詰めたい。

「どうしたの？ 汗が凄いわよ。」

「いや、なんでもない。でも、悪いな。  
俺は朝食は普段から摂らないんだ。」

「えー、朝食は食べといた方が良いわよ。  
朝食は1日のスタートとか言うし。」

「いやいや、良いよ。  
寝起きは入らないし、食べれないよ。」

食べたら、スタート前にリタイアしそうだ。

「あたしの料理は美味しいのよ。  
ヴァンなんか泣きながら食べるし、グレイブなんか天にも昇る味だ  
とか言ってくれるし。」

それは皮肉だ！

「そうか。それは残念だ。」

また今度食べさしてもらおうよ。」

「そうでしょう、そうでしょう。あ、そろそろあの二人起こさなくちゃ。」

テントにとてとてと走っていくイリス。

胃薬でも用意しといてやろうか？

一応、手持ちの材料から胃薬を作っておく。消化不良にはかなり効くはずだ。

お、三人とも来たな。

「おはよう、二人とも。」

「…おはよう……ございます…」

「……………ああ……………」

大丈夫か、おい。

死刑判決を受けた死刑囚みたいな雰囲気醸し出してるぞ。

「朝食は用意しといたわよ。さっさと食べて出発しましょ。」

「……今度こそまでもであってくれ。」

「どんな強敵（料理）が相手でも勝ってみせる。」

小声だが俺には聞こえてるぞ、イリスには聞こえないようだが。

「それでは……」

イリスが料理の上の布に手をかける。

「「…ゴクリ。」」

「ジャン！」

布が取り払われ、暗黒物質が露になる。

「「ほ……」」

「まだマシだ。」

「これなら勝てる。」





……見た目が悲惨なだけで、味はそこまでなのか？

試しに、一口だけパンを貰い食べてみた。

パクッ

ふむ、さくさくとした軽い歯応えと、噛み締めると溢れてくる言い様のない苦味が——んごぱっ！

げほっ！げほっ！がはっ！ごほっ！

「大丈夫ですか！？ 初めての人が食べたら命に関わりますよ。」

「俺達は慣れているから、生きているだけだ。」

「げほっ！ み…水…」

「水ですね？ はい。」

受け取った水で口の中を漱ぐ。

「はぁーはぁー」

死ぬかと思った。死ねないのに割と本気でそう思った。

「イリスの料理は無闇に食べたらいけませんよ。  
今回はまだマシですけど、そこそこ食べ慣れてる僕等でも危ない時もあるんですから。」

食事の度に命懸けなのかよ。

「因にだ。」

「え？」

珍しいなグレイブから話しかけてくるなんて。

「見た目が良いほど危険度が高い。」

「うん、そうだな今回も見た目が炭だったから、苦いだけですんだから。」

「なあ、自分で料理すれば平気なんじゃないか？」

「「それ位、やって（る）ます」」

「でも、イリスも自分から料理を積極的にやろうとするんですよ。僕等は、幼馴染みだから胃腸が鍛えられてますけど。普通の人が食べて臨死体験したこともあるんですよ。」

「でも、死者は一人も出していない……………はず。」

「……………もう行こうか。」

「はい。」

「そうだな。」

なんかとてつもなくいたたまれない気持ちになった。

野営の為の道具を建てた時と同じようにてきぱきと片付けてしまう二人。

イリスと俺はそれを見学している。

俺は兎も角として、イリスが手伝わないのは、二人係りで必死に説得されていたからだ。

その時の二人の表情は鬼気迫るもので、俺は口を挟めなかった。

片付けも終わり、グレイブが結界を解いたので、出発することにした。

馬にもちゃんと餌と水を与えますよ。

出発してからしばらくは、代わり映えのない景色が続き退屈していた。

あまりにも退屈なので、この先魔王が居る方角には何があるのかを聞いてみたが、役に立ちそうな情報はなかった。

ただ、このまま真っ直ぐ行くと山脈にぶつかるので、そこでは飛ぶのを控えた方がいいらしい。

何でも、怪鳥が山脈一帯を縄張りにしていて、そんな所に飛び込んだら間違いなく襲われるそうだ。

だから、越える場合は歩いて越えなければ駄目なんだと。

めんどうな……

いくら退屈してしようと、馬車は進む訳で、やっと街道と呼べるものに乗ることが出来た。

街道はある程度整備されているので、馬車の揺れが緩やかになる。

草原ではガタガタ揺れて、舌を噛みそうになるのでおちおち喋ることも出来なかった。

だから、山脈について今一度詳しく聞いてみる。

「なあ、山脈には山洞とかないのか？」

「山洞というか、洞窟なら結構な数があると思いますが、その洞窟がちゃんと向こう側に繋がっているかは分りませんね。」

「zzzz」

イリスは例によって例のごとく馬車の中で寝ております。

あの揺れの激しい草原でもなぜ寝れたのかは、甚だ疑問が残るが気にしたら負けだ。

「やっぱ、山に登るしかないのか。」

「山の中には山道もちろんとありますので、比較的安全に通過することが出来ますよ。」

「怪鳥に襲われる可能性は無いのか？」

山道を歩く人間なんて格好の獲物になりそうだが。

「無い。とは言い切れませんが、怪鳥が少ない場所や来れない場所に作ってあるので、大丈夫だとは思いますが……」

「怪鳥か……具体的なランクだとどの位だ？」

「幅広いですね。それこそ、DランクからGランクまでいますね。種類は、バルタン、レイブン、グリフォン、ヒノ、フレスベルグ、フェニックス、ワイバーン、サラマンデル、その上位のファイアサラマンデルとアイスサラマンデル、サンドサラマンデル、そして、山脈の最奥にいる主であるカイザーフェニックス。大体いるのはこれ位ですかね。」

「多いな、そしてよく覚えられるな。」

十種類程言ったぞ。

「はははは、モンスターの出現場所はテストに出ますからね。僕、座学の点は良いんですよ。」

勉強なんてよくやるよ、俺は前の世界でテスト勉強すらしたことも無いのに。



「へえ、ま、見た目頭良さそうだもんな。」

「舌が大事なら静寂することを勧めよう。」

「どうした？」

「後ろからモンスターが来てる、加速するぞ。」

言われて後ろを確認する俺達。

確かに狼形のモンスターが群れを成して追いかけて来ている。

「っ！ 振り払えそうか！」

「ギリギリだ。馬の体力か奴らの体力かの勝負だな。」

「くそっ！ 出来れば起こしたくなかったが、イリス！ 起きろ！  
敵襲だ！」

どんだけ、起こすの嫌なんだよ。

「……………あたしの眠りを妨げる者は何人たりとも許されん。  
裁きを受けろ。」

なにこの子怖い。

「ぐえ、イリス違うんだ、モンスターに追われてるんだ。だから、  
……………!!」

イリス、放してやれ！　ヴァンの顔色がヤバいことになってる。

「なに？　モンスターがあたしの邪魔をするのね。なら、あの子達  
に裁きをあたえればいいんじゃない。くふふふ。あははははは。あ  
っはっはっはっはっはっはっはっはっはっ!!」

くっ、イリスが壊れてしまった。この小説にはマトモな女性はいないのか。

パッ　ドサッ　「ぐ、はーはー。」

イリスが手放したおかげでヴァンが呼吸しはじめた。

「あたしの眠りを妨げた報いを受けてもらおうかしら？」

イリスが弓矢を取り出して矢をつがえる。

すると、矢に魔力が集まり淡く光出す。

ギリギリと弦を引き絞り。角度をつけて上空に矢を放つ。

放たれた矢は、上空で更に光を増し分裂してモンスターたちに降り注ぐ。

まさに矢の雨だな。

「あはははははははははは！　まだよ。まだまだよ。あたしの眠りを妨げたんだからこの程度ですむと思わないことね。きやははははははははははは！」

どんどん矢を放っていくイリス。



街道の一部が矢だらけになってしまったが、ヴァン曰く、あれは魔力で構成されているので、時間が経てば消えるそうだ。

それでも、亡くなったモンスターの冥福を祈りたくなったな。

明らかなオーバーキルだったし、動かなくなったモンスターにも矢を放ち続けるんだぜ。途中からモンスターが可哀想になってきたよ。

それと、眠っているイリスとは、少し距離を置くようにしたけど。

「ヴァンよ、あれはなんだ？」

「えー、性格と言いますか、癖と言いますか、性癖と言いますか、まあ、寝ているイリスを起こしたら大抵あなります。」

待て、性格と癖をくっ付けて妙な単語に為ってしまっているぞ。

「カズキさんも気を付けて下さいね。ああはなりたくないでしょう。」

そうだな『リアル鬼ごっこ。ただし、相手は飛び道具』みたいな。

才能無いな、俺。

あれから、重い沈黙と妙な雰囲気に包まれて馬車は進んでいく。

「……………」↑俺

「……………」↑ヴァン

「……………」↑グレイブ

「……………」↑俺

「……………」↑ヴァン

「……………」↑グレイブ

「ZZZZZZZZZZ」↑イリス

き、気まずい…………。

この空気に耐えなければいけないのか。

同行なんてせずにさっさと飛んで行けば良かったな。

昨日の自分を殴ってでも止めたい。

昨日、三日掛かると言っていたから後、一日半は一緒か…………。

同行すると言った手前、途中から単独行動で飛んで行くのも憚れるし。

はあ…………誰でもいいからこの空気をなんとかしてくれ。

「……そ、そういうば…カズキさんは山脈を越えてまで何をしに行くんですか？」

この空気を壊して、話し掛けてくれるとはありがたい。でも、言っ  
て良いことなのか？

「えーとだな。山脈を越えた場所に今まで探していた人（魔王）が  
いて、その人に用事があつて会いに行くんだ。用事がなんなのかは  
流石に言えないけどな。」

嘘は言っていない筈だ。

「大変ですね。そんな遠い所まで。」

いやいや、お前らの方が大変だよな。

暗黒物質<sup>ダークマター</sup>を料理で作り出すし。

寝てるのを起こしたら、リアル鬼ごっこが始まるし。

幼馴染みというだけで耐えられるお前らが信じられないよ。

いや、それでも一緒にいるから幼馴染みなのかな。

「どうしたんですか？　突然黙り込んで。」

「いや、なんでもないよ。

遠出というか、旅は慣れてるしな。」

「え？　でも、テントとかの野営具を持ってませんよね？」

「あー………テントは羽にくるまって代用しているから必要無いんだ。

それ以外も大抵なんとかなるし。俺の魔法はそういうのに特化してるんだ。」

嘘は言っていない筈だ！

「便利ですね。テントは嵩張るし、僕の魔法は探知位にしか使えないし。」

「まあ、魔法は人各々のものだし得意、不得意があるだろう。如何に自分に合ったものを伸ばしていくかが大切だ。」



「……………そうですね。自分に対して卑屈になっても仕様がなしね。はははははは！」 「むうゝうるさい……」 「はは、は？」

「あたしの眠りを妨げる者は何人たりとも許されん。」

「ひっ！」

「あゝあ。」

ヴァンに向かって手を合わせる。

「助け「裁きを受けろ。」」

俺は何も見えていないし、聞こえてない。

赤い液体や悲鳴みたいな声も全部気のせいなんだ。

「貴方も同罪ですよ。」

「え？　ぐわ！」

俺にダメージを与えるなんて、Aランクじゃあり得ないぞ。くそ、くそ。

「裁きを受けろ。」

ギャグ補正のバカ野郎ーーーー！！

ーーーーフェイドアウト

## 二十六話目

力とはなんなのだろうな。

どんなものよりも強く、全てを振じ伏せる事が出来るのが力か？

策を練り、知を使い、有りとあらゆるもの全てを操る事が力か？

吾は何者も劣らぬ力を手に入れた……と思っていた。

しかし、それは所詮幻想だった。

すぐに忘れてしまう儂すぎる子供の夢のようだった。

いや、問題は既に代わっているのだ。

そもそも何故吾は力を求めたのか。

何のために力を求めたのか。

世界を平和にするため？ 否。

俺の強さを世間に知らしめるため？ 否。



復讐するためだ。

## 前回の粗筋

イリスはダークマターを作成した。  
ヴァンとグレイブの二人で完食した。

（中略）

「裁きを受けろ。」

「ぎゃあああああああ！！」

そんなことより今回は、やっと町に到着しました。

つまり、俺は一日以上寝（気絶させられ）ていたことになる。

なぜ寝ていたのかは記憶があやふやだが、妙にヴァンとグレイブが優しかったのが気になった。

ヴァンが頻りに「慣れですよ。」と言ってきていたし。

グレイブが憐れみの籠った目で見えてきたし。

まあ、上の二つは些事だからいいとして、今俺は重大な問題に直面している。

それは……

「はい、これお弁当。」

ここでお別れだけど、折角だから食べてよ。」

俺が寝（気絶させられ）ている間に、イリスがお弁当（劇物）を作ってくれたらしい。

「いや、でも、悪いよ。わざわざお弁当なんて。」

ダークマターの威力を味わった身としては是非ともご遠慮したい。

「大丈夫よ。もう、人数分作っちゃったし。貰ってくれないと困るのよ。」

ほら、美味しそうなお弁当でしょ。」

お弁当の中を見せてくれる。確かに、普通の見た目で良い匂いもしてくる。

ただ、ただ。忘れてはいけない事がある。

グレイブは見た目が良いほど危険度が高いと。

このお弁当滅茶苦茶見た目良いんだよ。

「カズキさん。受け取って下さいよ。イリスも一生懸命作ったんですし。

：別に貰った後食べなかったら平気ですし、あまりごねると裁かれますよ…ボソボソ…」

「っ！　そうか、イリスありがたく貰っていくよ。」

「最初から、素直に言えばいいのに。はい。」

お弁当を手渡されたが、食べる気は無いんだよな。モンスターにでもやるか。

「食べるよ」

ゾクッ

「あ、ああ、勿論だとも……。」

えーと、じゃあな。ここまで送ってくれてありがとな。」

「こちらこそ、道中楽しかったですよ。」

「ふん。……じゃあな…ボソッ」

「今回の料理は自信作なんだから絶対食べなさいよ。」

「……御武運を。」

やめろ。余計に怖くなる。

背中の羽を羽ばたかせて飛び立つ。

……

「行っちゃったわね。」



「ああ、楽しい人だったよ。」

「ふん。（結局何者だったかは分からなかったな。）」

.....

只今、上空を山脈に向かって飛んでいます。

三日も馬車に乗ってたから、空も久しぶりだな。

それにしても、この山脈でかいな。

端が全然見えないし、山頂部なんか雲の上だ。

一応低い場所もあるから、そこを山道にしてるんだろう。

あれの山越えとか……はあ、鬱だ。

錬金術でトンネル作れるサイズでもないしな。

「ん？」

どうやらあれが怪鳥らしいな。大小様々だが山脈の周りを旋回している。

そろそろ降りた方が良いか、空中戦なんぞ面倒なだけだ。

地につけて歩きだす。

山脈の入り口までそう距離はないから焦る事はない。  
のんびり行くさ。

のんびり……行きたかったなあ……

『ぴぎゃああああああ！！』

## 状況説明

俺の目の前にフェニックスがいる。

以上

山道にはモンスター出ないんじゃないかよ!!

思っきり強そうなの出てきてんじゃない。

奴さん、殺る気満々な感じに威嚇してくるんですけど……戦闘回避不可？

封印状態でこいつの相手はきつそうなんですけど。

待てよ……そうだ。

「お前、弁当食うか？」

『ぴ?』

えっ? 言葉通じんの?

通じてるかどうかは定かではないが、イリスから貰った弁当に入っていたおにぎりをだす。

おにぎりは綺麗な三角型をしていて、ちゃんと海苔まで巻いてある。

おにぎりなら、ただ形を整えるだけだから、なんともないだろ。

「ほれ！」

軽く投げてやる。

軽くといっても、フェニックスの大きさは中々あって、崩さないように投げるのは難しかった。

『ぴっ♪』

ちゃんと、食べれたようだな。

少しは警戒するかと思ったんだが、匂いもまともだったから大丈夫だったのか？

『ぴっ♪　ぴっ♪』

やべ、このフェニックスかなり可愛い。

お持ち帰りとかあり？

『ぴっ♪　ぴっ？　　ぴぎいいいいいいいいい！！』

「うおっ！」

どうしたんだ、いきなり。

フェニックスが炎上してるぞ。

くそ、このおにぎりの効果は遅効性だったのか。

フェニックスが普通に食ってたから油断したぜ。

『ぴぎいいいいいいいいい………』

だんだん声も弱々しくなっていく。

すまない。まさかこんなことになるなんて。

モンスターを倒してしまう。おにぎりがあるとは思いつかなかった。

『ぴ……ぴい……』

そして、フェニックスは完全に燃え尽き、事切れた。

後に残ったのは、黒く焼け焦げた山道とフェニックスの亡骸となった灰。それと、食べかけの弁当だけだった。

『ぴー』

「！」

今、灰の中から鳴き声が。

灰の側に駆け寄る。

そこには、

『ぴゅい！』

「フェニックスの雛？」

そういえば、フェニックスは死ぬときに自分の体を燃やして、その

灰の中から復活するという不死性を持っていたな。

死を生のサイクルの中に取り込む不死鳥。

そんなモンスターがわんさかいたら嫌だな。

てか、雛に戻ったら弱くなるし。

自分を倒した敵の前で弱体化するとか、また死にたいのか？

「はあ」

『ぴゅう？』

灰の中から雛を取り上げる。

「ま、良いか。

一応、今は普通の鳥だし。飼ってみよう。」

『ぴい♪』

手乗りサイズに成ってしまったフェニックスを上着の胸ポケットに入れる。

「刷り込みで俺を親とか思うのかな、モンスターって？」

『ぴゅーいぴゅーい♪』

ポケットの中でもぞもぞと擦りよってくる。

一つ言わせて貰おう。

めっちゃ可愛い！

あゝ小動物って癒されるわゝ

決めた！

こいつは絶対に俺が育ててみせる。

意気揚々と残りの山道を踏破していく。



「あ、所でお前何食うの？」

『ぴゅーい♪』

「いや、『ぴゅーい♪』じゃなくて。」

『ぴい♪　ぴい♪』

「……また、イリスの弁当でもやってみるか…。」

『ぴ………ぴぎいいいいいい……!!!!』

「うわ！　火を吹くな、服が燃える。」

『ぴぎい！　　ぴぎい！』

「分かった！　分かった！  
もう言わないから。落ち着け。」

『ぴぎゅああああ!!』

「熱っ！ 結構温度高っ！

普通の餌を考えるから落ち着け。」

「ふう」

『び………』

あれから落ち着けるのに大分かかってしまった。

もう服が焦げ焦げのボロボロだ。

当然、上着の胸ポケットもなくなってしまったので、フェニックスは今、俺の頭の上に乗せている。

大した重さもないので特に負担にもならない。

『…ぴい………』

「あんま、落ち込むなよ。

俺の悪ふざけのせいでもあるんだから。」

『ぴいぴい。』

「それでもだ。」

『ぴえ。』

「よし。

分かればよろしい。で、お前の餌は何をやればいいんだ?」

『ぴゅぴゅるぴいぴゅうぴい。』

「それでいいんだな?」

『ぴゅい♪』

「よし、分かった……あれ? 普通に会話出来てる?」

## 二十七話目

お前にとって、最も喜ばしいのはどんな時だ？

お前にとって、最も怒りを覚えるのはどんな時だ？

お前にとって、最も哀しいのはどんな時だ？

お前にとって、最も楽しいのはどんな時だ？

喜怒哀楽……お前にとって、最も大切な感情はなんだ？

喜びと悦び

怒りと怒り

哀しみと悲しみ

楽しみと愉しみ

理解できているか？

怒り以外の漢字にはそれぞれ心の一部が入る別の漢字が在ることを？

怒り以外は皆、心を隠している。

お前は、自分の本当の気持ちを怒り以外で他人にぶつけたことがあるか？

怒りは人の中でも特別な感情。

怒りは人の中でも原始の感情。

人が最も力を発揮する感情が怒り……………

「ごたくはいからそろそろ始めないか？」

「ふっ、面白くないな。」

もう少し話を続けようではないか。」

「はっきり言ってお前の話はつまらん。

フェニックスなんか完全に夢の世界に飛び立ってるぞ。」

「しかし、だからといってどうするんだ？

私は所詮案内人でしかない。

故に目的のためには、私を殺さぬように無力化せねばならぬ。

」

「はあ」

「それにだ。」

「ああ？」

「君ごときでは、私ですら勝負にならんよ。

それなら会話することで、少しでもその命永らえたいものではないかな？」

「誰ごときが誰にすら敵わないってえ？」

「だが、それが事実だ。

私は魔神に仕える神父であり、憤怒の魔王にかしづく只の案内人ではない。

しかし、それでも君は私に敵わないだろう。」

「それはそれは、とても愉快な冗談だ。愉快過ぎて笑うことすらできないよ。

あまりにも悦び、あまりにも愉しいと人間笑えないもんだな。」

「おや？ 君はまだ人間のつもりだったのかな？

これは失礼なことを言ってしまったな。そこは、私も謝罪し神に懺悔しよう。」

「一々勘に触る言い方をするなあ、そんなだと友達無くすよ。」

「その言い方だと君は友が多いように聞こえるが……  
どうなのかな？」

「はあ、俺にだって友達ぐらい……」

「……………」

「……………」

「……………」

「グスッ……」

あれ？ 俺友達って呼べる奴いるか……あ、目から汗が。

「居ないようだな……」

「くっ、うるせい！

どうだって良いだろ、そんなこと！」

「君から言ってきたことだろう？」

「っ！」

駄目だ、奴に完全にペースを握られている。

何とかしないと。



「もういい、戦るぞ。

テメエを倒しゃあ魔王の所まで案内するだな。」

「ふっ、死に急ぐか。

まあ、良い。全てを懸けてかかってこい、あるいはこの身に届くやもしれんぞ。」

「俺が届かないだと………はっ！ だったら、その理想を抱いて溺死してろ！」

「魔神父、コー・トミネだ。」

「カズキだ。特に肩書も異名もない。行くぞ！ お前の神を殺してやるよ。」

「出来るかな？」

黒鍵を構える、トミネ。

「正解——殺せ——神殺槍」

音速の500倍で伸縮し、13km先まで伸びる。  
神殺しの名をもつ斬魄刀を使う。

「舞踏」

キンッ

「この程度か？　やはり私にはまるで届かな。」

弾かれた……

音速の500倍の速度で伸びる刀身の突きを事も無しに弾かれた……

「ならば、舞踏連刃。」

舞踏での連続突きだ。

反応すら出来まい。

「ふむ、確かに恐るべき速度ではあるが、所詮軌道が直線だ。  
刀身の向きさえ判ればなんともない。」

更に連続での伸縮には、若干のタイムラグがある。そこをつけばどうと言うことはない。」

いやいや、音速の500倍ですよ。

反応出来る方がおかしいだろ。

「今度はこちらからいくぞ。」

黒鍵を投擲してから突っ込んでくる。

「っ！ はやっ！」

神殺槍が間に合わない。

「ぬう！」

「ぐう……」

この動きは八極拳か……？  
いや、型は似ているが微妙に違っている。

「はっ！」

「くそがあ！」

刀が遠くにとばされてしまった。

合気で応戦していくが、技術に圧倒的な差がある。

攻撃を受け流そうにも、動きが特異すぎて俺の動きとまるで噛み合わない。

「ふっ、はっ、りゃ、ごお！」

「ちっ、くっ、ぐう、がっ……」

壁際まで押されてしまったか、接近戦闘が駄目なら魔法戦闘だ。

「ザケルガ」

「浅はかな。」

ブン　バシィ！

「なっ？」

黒鍵で打ち払われた？

どっから出した！　その黒鍵！

虚空から突然現れたと思ったら、既にザケルガを切り払われていたぞ。

「どっから出した、その黒鍵。」

「ククク……わざわざ敵に情報を漏らすと思っているのかね？」

「そうかい。　テオ・ザケルガ」

「ふっ、まだ甘いな。」

範囲の広い攻撃だが、自分に当たるものだけを見切って払われた。

「魔術はこう使うものだ。」

「何？」

「セツト」

「告げる——」

「私が殺す。私が生かす。私が傷つけ私が癒す。我が手を逃れうる者は一人もいない。我が目が届かぬ者は一人もいない。」

「長い詠唱だな。」

その隙を逃す訳ないだろ。

「打ち碎かれよ。」

敗れた者、老いた者を私が招く。

私に委ね、私に学び、私に従え。

休息を、唄を忘れず、祈りを忘れず、私を忘れず、私は軽く、あらゆる重みを忘れさせる。」

「ぐっ！」

喋りながらのくせに、よく八極拳擬きをつかえるな、舌嚙むぞ。

「装うなかれ。」

許しには報復を、信頼には裏切りを、希望には絶望を、光あるものには闇を、生あるものには暗い死を」

ドゴン！

「うおっ！」

震脚か、なんつう衝撃だよ。

「休息は私の手に。貴方の罪に油を注ぎ印を記そう。  
永遠の命は死の中でこそ与えられる。」

——許しはここに、受肉した私が誓う」

「がはっ！」

絶沼擬きをもろに喰らってしまった。

効くぜえ

「—————」この魂に憐れみを、キリエ・エレイソン」

く、詠唱が完成しちまった。

どうする？

防ぐか

避けるか

打ち砕くか

どうする？ 俺の手札でなんとかなるのか？

「チャージル・セシルドン」

結局、俺は防ぐことを選択した。

効果は解らないが、最大の防御呪文だ。防ぎきれんだろう。

そして、トミネの魔法も完全に発動し、トミネを中心にして光だす。



辺り一面が光に包まれるが

「何も起こらない……?」

チャージル・セシルドンにも、周辺の壁、床にも特に変化がない。

俺自身にも影響がまるでない。

「失敗か?」

「ククク……失敗ではない。」

「どういう意味だ!」

「直に分かることだ。」

パチン

トミネは指を鳴らすと……

「があああああああ!!」

熱い！ 痛い！

内側から焼かれているみたいだ！

内臓を喰い漁られているみたいだ！

「苦しいか？ だが、悦べ。」

それは、魔神の加護を受けている証だ。」

「があ……ぐう……加護……だと……」

「そうだ。 今から君は魔に魅いられた存在へと昇華する。」

「魔……」

ヤバイ、かなりヤバイ。

痛いも熱も全く変わらない。

早く何とかしないと。

何か、魔に対処できるものを……

俺の能力に魔や呪いをはね除けるものなんてあったか？

魔を祓うもの…魔を退けるもの………

そうだ、ミーちゃんにもらった剣と秤！

あれなら！

暗器遣いのスキルでどっかに入れてた筈だ。

「あれ？……ぐう…何処に……しまったかなあ………が………！」

「足掻くな。 無駄に苦しむだけだ。」

「言ってる………あった！」

秤がなんとか見つかったか。

これでなんとかか………

「ふう……………」

落ち着いた。もう痛みも熱もなくなったか。

「ほう…珍しいモノを持っているな。

魔を退ける聖遺物か。よくそんなものを手に入れられたな。」

「色々あったんだよ。」

しかし、どうするか……状況は明らかにこっちが劣勢。

封印状態では勝目は零だな。

いや、封印を解除して全力で戦っても勝目は微妙……よくて五分五分かな……。

相手もまだまだ余力を残しているみたいだし。

どうするか……

「どうした？　もう終わりか？」

「ちっ……」

あっちからは攻めてこないつもりか……

本当にどうするか……封印状態では呪文もディオガ級が限界だし……錬金術も錬成陣がいる。

サイズの正解も限られてくる。

選択肢は核鉄だけ？

「いい加減こないなら……こちらからいくぞ。」

「くそ、武装錬金！　ヘルメスドライブ！」

リーダー

探知機の武装錬金ヘルメスドライブ

効果は、俺が認知出来る範囲での探索と……瞬間移動だ。

「じゃあな。勝目が無いようだから、一旦退くわ。」

「逃げるのか？」

「逃げるんじゃない。戦略的撤退だ。」

とりあえず座標を福音の鐘の前に合わせてと……

「まあいい、何度来ようと同じことだからな。」

「次は勝つよ。発動」

シュン

……

「行ったか……」

しかし、何故こんな回りくどい真似を……

「これも主の意志なのか……？」

答えなど帰ってこないか……

「ふむ、そろそろ食事にするか。」

麻婆豆腐でも作るか。

魔王も一緒に食べれば良いのに……

一度食べただけで、‘外道麻婆’等と呼称しおって。

誰かこの味を理解できる者は現れないものか。

## 二十八話目

——ギルド前

憤怒の魔王の案内人を名乗る男、コー・トミネ、と戦闘したが、勝目が薄く一時撤退。

アネリアさんに鍛えてもらいに戻ってきた。

「さて、判ってもらえるか………？」

戻ってきたはいいのだが、容姿がまるで変わってしまったているからな。

最悪誰も気付いてくれないかも……。

とにかく入るか。

ギー



相も変わらず重々しい音を響かせる木の扉。

ざわ……ざわ……ざわ……ざわ……

ギルド内は結構な人数が酒を飲んだりしていた。

まだ、日も高い……仕事行けよ。

軽く見回してもミコの姿はない。

休みか仕事に行ったかのどちらかだろう。

受付に目線を向ければ、アネリアさんがいるはずの場所には誰もいなかった。

「はあ……」

また奥でお菓子食べてるな、あの人には誰も文句言えないからな。

でも、俺のこと判りそうなのアネリアさんだけなんだよな……。

あの人だけは何が出来ても、何をしても不思議はない。

「すいませーん」

誰もいない受付に声をかける。

隣の受付の人の視線が痛い、やむを得ない。

「はいはーい」

「どうかしましたか」

この間延びた声、間違いなくアネリアさん本人です。

「あの、俺のこと判りますか？」

「カズキさんでしょ、突然どうしたんですか？」

一発で判ってくれた。

ありがとうございますアネリアさん。本当に大好きです。

「いえ、判ってもらえればそれが何よりです。」

「でも、大分変わりましたね、顔とか、背とか」

「色々ありましてね、それよりも今日はお願いがあって帰って来ました。」

「わざわざ私にですか？」

「実は、魔王を倒す旅を続けていたら、とんでもない強敵と遭遇しまして、その場は一旦撤退したんですけど」

「逃げたんですね」

「いや、一旦退いただけで、逃げた訳じゃ」

「逃げたんですね。」

「あのだから……」

「逃げたんだろ。」

「……………」

「素直に言ったらどうですか」  
逃げたんだろ。」

「はい。すいませんでした。敵を目の前にして逃げ出しました。」

「まったく折角私が鍛えてあげたのに、負けて帰って来るとは、  
情けない限りです。」

「本当にすいません。  
で、戻ってきたのは、もう一度アネリアさんに鍛え直してもらおう  
と思ったんです。」

「しょうがないですね、やってあげますよ」

「ありがとうございます。」

ここで鍛えて、今度はトミネを倒してやるよ。

「やっぱりあの位じゃ駄目ですか」

「へ？」

あの地獄をあの位ですと？

「この前は基礎ばかりでしたから今回は応用と実践中心にしましょうか」

結構死にかけましたよ？

「時間をかけるのも嫌ですし密度をあげましょうか5…7…うん、10倍にしましょうかね」

「あの…その…アネリアさん…？」

「大丈夫ですよカズキさん今度はじっくりとやるので」

「じっくり…ですか？」

「うふふふ……楽しみですねーまだまだ鍛え足りないと思ってたんですよ。」

どうせ鍛えるなら、限界を超えた本当の限界までやらないと……気が済まないんですよ。」

「あの……だから……俺は……」

ヤバイ……アネリアさんの目がマジだ。

それに、俺の能力は上限がないんだよ。

もしかして……アネリアさんが満足するまでの無限地獄になるかも……

「さて、それでは逝きましょうか？  
カズキさん。」

「アネリアさんの仕事は？」

「皆さんー頼みますねー」

「「イエス！ マム！」」

完全に掌握してるんですね。

———ギルド内・訓練場

「さて、カズキさん。

あなたの欠点は何か解っていますか？」

訓練場に連れてこられ、アネリアさんが開口一番に質問してきた。

「技術不足？」

「まあ、それもありますね。

基本スペックは高いんですが、それを全く生かせてません。

それ以外にも、同レベルとの戦闘がないための経験不足等もありますね。」

「はあ……」

チート転生者やそれに類するものは大抵そうだと思うけど。

「なので、今回は本格的な武術の型の反復と、あなたと同レベルに近い人と戦ってもらいます。」

「俺と同レベルに近い人なんているんですか？」

一応、現世界最強と呼ばれていた覇王君に勝っているんだ。

それこそ、俺と同レベルなんてマスターかアネリアさん位しかない。

「そうですね、この世界には探しても恐らくもういないでしょうね。あくまで、この世界にはですが。」

「引っ掛かるもの言いですね。」

まるで他の世界にはいるみたいな。

「ええ、今回は私も本気で取り組むので、友人達に協力してもらおう



ことにしたんです。」

「友人達ですか？」

「皆強い人ばかりですよ。」

「へえ、で、その強い人達はいつ来るんですか？」

「そうですね……今日連絡したので明日か明後日にはみんな揃うと思いますよ。」

何人かは迎えに行かないといけませんけど。」

「じゃあ、今日は何をするんですか？」

「今日は型の反復だけですよ。」

型の反復だけか……身体能力的には楽だな。

「それでは、見本を見せるので真似して下さいね。」

「はい。」

それから、武術の基本の型を時々手直ししてもらいながら覚えた。

「うん、型はそれで結構です。

後はその動きを繰り返して体に覚え込ませるだけです。」

「はい。」

この位の動きならある程度繰り返しても大丈夫そうだ。

「それじゃあ、その動きを五百万回程繰り返しておいて下さい。」

「……………はい？」

桁間違えてませんか？

「あ、それと、これも付けておいて下さいね。」

ズシン

「……………」

何処から取り出したかはもう良い。良くないけど。

この質量は何ですか？

一応は身に付けられるサイズと形ですけど、重さがおかしい。

地面がへこんでる。

「付け方は、ここをこうして、こう取り付けて、回して、嵌めて、鍵をかけて、完了」ワーパチパチ

「ぐう……」

なんとか立って動ける位の重さだけど、かなりきつい。

「重りのここに数字があるのが見えますか？」

「一応…見えます。」

0がいくつか並んでる。

「それじゃ、セットしますね。」

アネリアさんが操作すると、数字が変わっていく。

示された数字は5000000。いこーる…五百万。

「この数字が0に戻ったら外れますから、明日までに終わらせて下さいね。」

出来なかったら……おしおきですよ」

………それなんて無理ゲー？

「アネリアさん。流石に明日までには無理ですよ。」

「食事はここにあるものを好きに使って下さい。」

「無視！」

「大丈夫ですよ。この訓練場は少し時空間をいじっているので、外との時間差があるんですよ。」

「あ、成る程。つまり外での明日までですね。」

「ええ。その通りです。」

流石の私もまだそんな指示は出しませんよ。」

・・

まだ、なのか……

「所でその時間差は？」

「大体：外での一時間が中での一日ですね。」

今、外が夕方の5時なので、明日の朝8時までは15時間あります。」

「それなら……待てよ……」

つまりは、15日で五百万回……

5000000÷15＝333333, 333…。

1日に三十万回強。

1日は86400秒

秒間：約四回。型を一通りやらないと無理。

「すみません。不可能です。」

音速超える体でも無理なものがあるんですよ。

「じゃあ、どの位の時間があるんですか？」

「えー……」

考えろ。

そうだ！ アンサートーカーを……あら？ 使えない？

封印を解いているのに……何故？

「あ、言い忘れてましたけど、いくつか能力を封じさしてもらっています。」

「くっ……半年……半年時間を下さい……。」

前半は思うようにいかないだろうが、後半に巻き返せるはずだ。

「ふむ……半年ですか……設定が面倒ですがまあ良いでしょう。」

ヨシツ！

それなら、ギリギリなんとか……

「ただ……重りが一月毎に重くなるようにしておきましょう。これなら、中盤の中弛みも防げるでしょう。」

ノ  
オ  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
！  
！

そこまで俺を苦しめたいんですか、修行を頼んだのは俺ですけど……もっと加減してください。

「じゃ、頑張ってくださいね。」

次に私が来たときに、その重りが外れてなかったら、  
本当におしおきですよ」

「頑張ります……。」

「では。」

訓練場から出ていってしまうアネリアさん。

「早く終わらさなきゃ。」

型をこなす。

ピッ

4999999

先は長い。



## 二十九話目

「お疲れ様です。カズキさん。」

「……………」

どうもカズキです。

只今意識は在るのだが、もう指一本動かせない。動かない。

この半年間、食うか、寝るか、型を反復するかしかしていない。

「どうやら、かなりギリギリだったようですね。」

「……………最後の一月の重りの重さの上昇量が、今までの比じゃなかったのはなぜですか？」

一つつ増えていたのが、いきなり十増えるのは、鬼畜過ぎると思う。

「仕様です。」

「……………さいですか。」

もうね、延々同じ動作を繰り返すと、無の境地とか諦めの境地とか悟りとかその辺りに到達出来るよ。

「今日の予定は、午前中は私と軽く体を動かしましょう。

午後からは、昨日言ってた人の一人と模擬戦をしてもらいます。

模擬戦と言っても所詮実践練習になると思いますけど。」

「……………あの、俺普通に喋ってますけど、まだ体が動かないんですけど。」

「重りも外れてますし、大丈夫でしょう？」

「……重りを外した瞬間に集中切れちゃって、疲労が大挙して襲い掛かって来てるんですよ。」

今、俺の精神は疲労に白旗揚げかけてるんですけど。」

「しょうがないですね」

なら、援軍を出してあげましょう。

ほら、これを吞んでください。」

「……………人間が飲んではいけないような色をしているんですけど。」

差し出されたのは、試験管に入っている液体状のモノ。

液体ではなく、液体状のモノだ。

「ナンでもないただの栄養剤ですよ。」

「ちょっと貸して下さい。」

試験管を受け取ってみる。

試験管自体はいたって普通。

蓋は材質がわからないが完璧に密閉されている。

「どうぞ一気に。」

「頂きます……………」

キュポン

ルオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

あはは、試験管から鳴き声が聞こえるよ。

ノムノ？

「どうぞ。」

「頂きます……………」

よしっ、味わずに素早く飲み込む。

「いざ！」ゴクゴク

「どうですか？」

「うっ………うまい！」

なんだこれは、かなりうまいぞ。

あの色と鳴き声からは想像もできないうまさだ。

「それは良かった。

それで、体の調子はどうですか？」

「えーと、おお、体の底から力が溢れてくるみたいだ。」

体の調子も万全だ。

「それなら、始めましょうか。型と型の繋ぎを意識してやってくださいね。」

「了解」

俺は構えてアネリアさんを見据える。

アネリアさんは変わらず、自然体でこちらを見ているだけだ。

体を動かすだけだから様子見もなしに駆け出す。掛け声も呼吸もせずにただ駆け出す。

アネリアさんとの間合いを一瞬で詰めて抜き手を放つ。

アネリアさんは上体を揺らすだけで簡単に避ける。

かわされるのは分かっていたので、流れのままに上段蹴りを放つ。

「成る程。なかなか良くなっていますね。」

「そらどう…も！」

言葉と共に拳も放つ。しかし…いや、やはり、かわされてしまう。

それから攻めるが、全く掠りもしなかった。

「大体、解りました。

……次はこちらからいきますよ。」

来る！

「ぐ、うううううう。」

腕が持つてかれるかと思う程の衝撃が来た。

重りで筋力上げてなかったら、折れてたかもな。

「反応出来ましたか。うん、これはかなりの進歩ですね。」

「反応は元から良かったじゃないですか。」

「いやいや、一番いい衝撃の受け流し方が自然と出来てましたよ。」

「そうですか。」

身体が覚えたのかな？

「それでは、レベルを上げましょうか。」

K（ズドン！！）

「っ！」

ぐ、何も見えなかった。まるで感じることも出来なかった。

「まだ、こんなものですね。」

ここからは実践で鍛えていきましよう。あ、でも、型の反復は続けて下さいね。こういうのは継続が大切ですから。」

「……………今、何をしたんですか？」



「?」

首をかしげて本当にわからないような顔するアネリアさん。

何でわからないかなあ。

「攻撃ですよ。全く見えなかったんですけど。」

「ジャブですけど?」

それが何か?と簡単に言っただけ。

ああ、やっぱりこの人は別格なんだと改めて思い知らされる。

♪♪♪♪♪

「あら。ちょっと失礼します。」

携帯あるんだ。

それに、アネリアさん着メロなんだ。意外だ。

携帯の相手と二言三言言葉を交わしてから、携帯をしまい、こちらに戻ってくる。

「呼んでいた人が到着したようなので、迎えに行ってきます。少し待っていて下さい。」

「はい。」

到着したのか、どんな人なんだろう。

アネリアさんが連れてきた人。それは……

「はじめまして。カズキ君。私はクロードと言う者です。」

「はじめまして。クロードさん」

ゲトバに出てくるバネさんだった。

解らない人はググってくれ。

「顔合わせは済みましたね。クロード、協力してくれるわよね。」

「クスクス  
構いませんよ。この方は面白そうだ。」

「ど、どうも。」

ヤバい人に目付けられたな……。今更かな。

♪♪♪♪♪♪♪♪

「あら、またですね。ちょっと失礼します。」

二人を置いて離れるアネリアさん。

「えっと、クロードさん？」

「何ですか？」

「アネリアさんとはどういった関係で？」

「関係ですか……仲介者と運び屋……だけだったんですけどね……」

少し嬉しそうに話すクロード。

「……………」

何かあったのだろう。

だが、トラウマ関係ではなさそうだ。

「今はただの友人関係ですよ。」

クスクスと笑いながら話すクロードは本当に愉快そうだった。

「楽しそうですね。」

「楽しい……？」

クスクス、そうかも知れませんね。」

「随分仲良くなりましたね。」

「あ、アネリアさん。終わったんですか。」

「私の他にも呼んでいたんですね。」

「ええ、何人来てくれるか分かりませんが。それじゃあ、迎えに行ってきますね。」

「いってらっしゃい。」

「それでは、待つだけでは何ですし、一回戦ってみますか。」

「えっ？」

「それはいいですね。

クロード。カズキさんは腕を切り落とされても、また生えてくる人だから、加減はそんなにしないでいいよ。

カズキさん。頑張ってくださいね。」

「クスクスクス。

貴方は本当に面白い。貴方の力も是非とも見せてもらいたいものです。」

「生えてくるといっても痛いものは痛いんですよ！」

「クスッ」

「その笑みは何ーーー！」

嬉々としてメスを出すクロード……否、Dr, ジャッカル

「時間制限はありますが、それまでには終わらせましょう。」

「ここは……戦略的撤退だ！」

ダッシュで逃げ出す。

不死身の医者なんか相手にしてられるか！

「いきなり逃げ出すとはひどいですねえ。  
ちゃんとやり合いましょうよ。」

「いやぁー……！」

飛来してくるメスをひたすら避けまくる。

この荒行がアネリアさんが戻ってくるまでずっと続いたのだ。

「やっと……戻ってきた……。」「

「もう終わりですか？  
残念ですね。」

なんとか腕を切り落とされるような事もなく逃げ切ることが出来た。

「まだまだ、時間はありますよ。  
それじゃアルク。自己紹介してね。」

「どうも〜アルクです。  
よろしくね。」

「どうも。カズキと言います。よろしくお願いします。」

また、不死か……吸血姫とか……

「貴女も面白そうだ。クスクス。  
クロードです。よろしくお願いしますよ。」

「じゃ仲良くしてして下さいね。  
すぐに迎えにいかないといけない人がいるので。」

言いながら空間を裂いて消えて行くアネリアさん。



アネリアさん……あなたが段々と人間を辞めていつてる気がするんですが……今更ですか？

「アルクさん……でしたよね？」

「アルクでいいよ。私もカズキって呼ぶから。」

「じゃあ、アルク。」

アネリアさんとはどういった関係で？」

クロードにしたのと同じ質問もしておく。

本当は大した意味なんて無いんだけどね。

「そんな難しい関係じゃ無いわよ。  
ただの昔馴染みよ。」

「へえ……」

アネリアさんの人脈の広さはどうなってるんだ？

「そんなことよりも…」

「そんなことって……」

「なに？」

「どうです？ 一戦やりませんか？」

はい？ あなたは戦闘<sup>バトル</sup>ジャンキー<sup>ジャンキー</sup>ですか？

「……………。良いわよ。やりましょ。」

そんな簡単に了承しないで下さい。

心から切に願います。

「いきますよ。」

「来なさい。」

なんでお互いにそんなノリノリなんでせうか？

ゴォ…と音がしたかと思えば、そこからは爪とメスが火花を散らす凄まじい死闘となった。

「……………はぁ、…はぁ〜。」

これの収集を俺がつけなければいけないのか？

ドゴォ！「うわぁ！」

ここにまで被害が。

「あらあら、大変なことになってますね。」

空間が突然裂けてアネリアさんが帰ってきた。

「アネリアさん。早くあれなんとかしてください。」

「うーん……」

「おうおう！　もうハデに始まってるじゃねえか！！」

「赤っ鼻…」

「だあれが赤っ鼻だあ！！！！」

「仕方がないですね。赤鼻さん。」

「赤鼻と言うんじゃねえ！！」

可笑しいか？　この鼻が自前じゃ可笑しいか？！！」

アネリアさんにあんな口を聞くとは……赤っ鼻。あんたを初めて尊敬したぜ。

「少し逝って止めてきてください。」

「はゝあ！？ あんな戦いに巻き込まれてたまるか！！！」

「頑張ってください。」ブンッ！！

投げた。

ちょうど二人の間に落ち。そして、

「やめんかバあバババババ！！！」

「わゝお！……細切れ。」

カシン！「許さんゝっ！！」カシン！

くつつくんだよなあ、能力者だし。

「何ですか、貴方は。」

「何よ、あんた。」

「黙れい！　くらえ！！　“特製マギー玉”　っ！！  
消し飛ぶがいい！！！！」　パンッ

カン！

あっさりと跳ね返される。

赤っ鼻の目の前で

ボツカアアン！！！！

「あああああ！！！！」

「ふう…興が削がれましたね。」

「そうね。やめましょうか。」

ありがとう赤っ鼻。

あなたのことは忘れない！

「せめて安らかに眠ってくれ。」

「死んでねえぞ！クラァ！」

「あ、生きてた。」

「あつたり前だあ！ハデバカがあ！！このぐらいでK<sup>ドゴン</sup>あああああ  
！！」

「車ー！ー！」

いきなり、車が赤っ鼻に突っ込んできた！

「やっと到着しましたね。」

ゴシャーン    ボワツ……

落ち着いてますが、炎上してますよ。

「痛てて、またやっちゃったな。  
やあ、みんなはじめまして。」メラメラ……

「あ、はじめまして。……じゃなくて！  
火が！背中に火がーっ！」

なんだ、このおっさんは。

「おっと、こりゃイカンイカン。」  
ブッシュシューー

消火器で背中の火を消すおっさん。

消えた後には火傷も焦げも全くなかった。

「よし。全員揃いましたね。」

この流れでいくんですか。

「じゃあ、改めて皆さんの紹介をしますね。  
刃物を使った戦闘はクロードに頼みますね。」

「どうぞよろしくお願いしますね。」



「そして、カズキさん並の身体能力を素手で闘ってもらうのがアル  
クです。」

「よろしくね♪」

「サンドバッグ・赤鼻。」

「おい！ 俺様の紹介が可笑しいだろ！！」

「ジークンドーの達人で武術の技術的な面に協力してもらうのがパ  
ララケです。」

パララケ？

「おい！！」

「うるさい！！」

ズドン！「ああ……」

「あはは、どうもパラケです。

本職は考古学研究者だけどね。友人の頼みだから協力するよ。」

「以上の四人と私の計五人であなたを鍛えます。  
覚悟は良いですね。」

覚悟か……絶対トミネや魔王、魔神を倒すよりこの特訓に生き残る方が大変だろうな。

けど……それでも……

「覚悟はしています。」

型を五百万回した時点でこうなることは分かっていたんだ。

けれど、トミネを倒す為にもここで強くならないといけないんだ。

「皆さん。よろしく願います。」

「いいでしょう。それでは皆さん始めますよ。」

「いきますよ。」

「いくわよ。」

「ハデにいくぞ。」

「あはは、若いっていいね。」

皆一斉にかかってきた。

一斉に。

一斉に？

一斉に！

「多いわーっ！」

「赤い杖刑」  
ブラッディ・ステイック

「やあ！」爪で斬りかかる。

「バラバラ砲ーっ！！」

「はっはっはっはっ」

「無理無理無理無理！！」

色々今日の俺じゃ無理ばかり。」

「さあ、頑張って生き残りましょう。」

「せめて一人づつにしてくれー！ー！」

この地獄はいつまで続くんだろうか？

ズバン！ ドゴン！

「腕が飛んだ！ ちょっとタイム。タイム。」

痛みに動揺してる余裕なんてない。

早くなんとかしないと。

「カズキさーん。まだまだこれからですよ」

「いやぁー！ー！」

型の反復の方がよっぽど楽だったわ！

## 三十話目

事後報告というか、なんというか。

あの特訓の名を騙った虐めも漸く、免許皆伝？お墨付き？をもらって終えることが出来た。

特訓には、途中からマスターや“ウニ頭の邪眼使い”“雷帝”“赤髪”“殺人貴”なんかも参加してきた。

この呼び方で分らない人は、とにかく強い奴だと思ってくれたら良い。

そんな訳で、特訓はハードを越えてハーデストだった。

結果？

結果はマスター超えたよ。

うん、一対一で戦ったらマスターに勝つことが出来た。

アネリアさん曰く。俺をこの世界に呼んだ神をもう超えているらしい。

マスター以外の勝率は、高い方から、

赤鼻10割

パララケ9割

殺人貴7割

アルク6割

赤髪6割

雷帝4割

クロード3割

ウニ2割5分

アネリアさん0割

大体こんな感じ。

ただ、ウニの成長率が俺以上に異常だった。二回は楽勝だったのに、後は全部苦戦。勝率も駄々下がりになってしまった。

それ以外は、後半になるにつれ勝てるようになった。

アネリアさんとは、お互い本気では、2分程持つようになった。

あくまでも持つだけで、一撃も入れることは出来なかったが。

後は……そうそう、レヴィとフェニもついでに虐め……もとい、特訓に参加したんだ。

その成果は両方、種族の成長限界を超えてしまい。新しい何かになってしまったんだ。

その何かは、前例が無いから特に名称はない。

まあ、俺は変わらず“レヴィ”と“フェニ”と呼んでるがな。

しかし、俺等のパーティーのステータスは、はっきり言ってバグの領域だから、かなりのリミッターを付けている。



基本状態は全力の千分の一以下。

重り（アネリアさん製）と封印具（勿論アネリアさん製）を全員が付けている。

ここまで万全に準備をしたんだ。

トミネなど一瞬で片を着けてやるわ。

「じゃあ、皆さんありがとうございました。」

「いえいえ、こちらも楽しかったですよ。

ただ、数を増やせば有利とは簡単に考えないように。」

「う、肝に命じておきます。」

特訓での模擬戦の最中。サテライト30を使い全方向から同時攻撃

したんだが、「クスッ、まだまだ甘いですね。」と言って“赤い分ブラッディ身”・アバターできつちり30人に分身されてあっさり破られたんだ。

でも、何だかんだ言って、クロードと一番仲良くなったよな。

弄られ繋がりで雷帝とも。

「ははは！ お前とハデなことが出来て中々楽しめたぞ！」

「うん。こっちなな、赤っ鼻。」

「だあれが赤っ鼻じゃ！ クラァ！！」

「うるうる…さよならです。カズっちゃん。」

「雷帝も元気でね。」

「お前もくたばんなよ。」

「心配してくれてありがと。ウニ」

「蛇咬！」  
スネークバイト

「師匠。顔が変わっても師匠は師匠ですから。」

「ありがと、ミコ。また戻って来るよ。」

ミコとも無事に顔を合わせることが出来た。

アネリアさんと一緒に説得したんだが、結構苦労した。

最後はアネリアさんとミコで内緒話の末、ミコも認めてくれた。

その後、特訓の合間に隙あらば女装させられそうになったが。

「アネリアさん。行ってきます。」

「はい。行ってらっしゃい。」

「武装錬金“ヘルメスドライブ”」

座標をトミネの居た場所にセットして瞬間移動する。

「皆。行ってきます。」

視界がぶれ、俺は瞬間移動した。

.....

「.....到着。」

着いたのは、トミネと戦い。そして、一度退いたあの場所だった。

「ここには居ないのか？」

「びい！」

「ん、あっちか？」

フェニは今や俺の肩に乗るサイズになっている。  
ポケットに入ってた頃が、懐かしいぜ。

フェニに着いていった先にトミネは居た。

そこは………食堂だった。

トミネはそこで麻婆豆腐を食べていた。

「ん、喰うか―――?」

「喰うか―――!」

「ぴゅーい♪」

「あ、おい。」

フェニが勝手に飛んでいき、勝手に食べ始めた。

「ぴ、ぴ、ぴ、ぴ。」

「食べてるよ。」

美味しいのか？ あのこの世のモノとは思えないような、煮えたぎるマグマを彷彿とさせるような麻婆豆腐が美味しいのか？

「む、この味の素晴らしさが分かるのか？」

「びー！」

「ふむ、良かろう。魔王の居場所まで案内してやる。付いてこい。」

「え、再戦は……………」

俺はなんのために特訓したんだよ。

「構わん。私はこいつを認めた。  
君も付いてくるが良い。」

「びー！」

「……………」

これで良いのか？

「どうした、来ないのか？」

「はぁー。」「

もう良いや。

行こ。

「ぴゅーい♪」

「はいはい。お手柄だったな。」

フェニの頭を撫でてやると、目を細めて喉を鳴らした。

そして、トミネに付いていく。

歩いていくと、やたらと荘厳そうな扉に着いた。

「この先に魔王がいる。」

……私が案内するのはここまでだ、後は君次第だ。」

お前、そんな事言うキャラじゃないだろ。

「さらばだ。」



去っていくトミネ。

扉の前に取り残される俺。

「ぴー！」

翼を振るフェニ。

扉に手をかけて押す。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「来たか、雑種。

王たる我を待たせるとは贖え切れない大罪だぞ。」

「金ぴか……。」

黄金の玉座に座り、黄金の鎧を身に纏っている男が待っていた。

「パチン」

シュカカカカ

「くっ」

王の財宝ゲート・オブ・バビロンを使えるのか。

「無礼者が、我こそが唯一無二の王なるぞ。  
他の王を騙る魔王共と一緒にするなよ。」

「英雄王……悪いが一気に決めさせてもらおう。」

エアを使われたら厄介だしな。

「はっ、吠えたな雑種！」

ミーちゃんから貰った剣を持って突っ込む。

金ぴかは剣も構えず、腕を組んでいる。

慢心してると思い、首を狙って剣を一閃する。

ガキン！

「ちっ！」

空間から現れた剣に初撃を防がれる。

「はああああああ！！！」

ガキン！ ガキン！ ガキン！

どんな角度から斬りかかっても、金ぴかは動かずに空間から剣を出して防ぐ。

「ふははははは！ 中々の太刀筋だな。  
我が宝具に傷をつけるとは。」

「そりゃどうも。」

「その腕に免じて我の全てを見せてやる。」

「結構です！」

「ゲート・オブ・バビロン  
王の財宝」

お構い無しかい。

金ぴかの背後が歪み、無数の武具の柄が顔を出した。

「しっかりかわせよ。運が良ければ手足が串刺しになる程度だ。」

「それがどうした！」

手足が串刺しなんて、特訓中はざらだったわ。

「ふっ（パチン）」

瞬間、宙に浮かんだ無数の宝具が俺に向かって降り注いだ。

「おおおおおおおお！」

降り注ぐ宝具の内、自分に当たりそうな物だけを打ち落とし、それ以外を全てかわす。

「で？」

「くははは。しのいだか雑種。  
面白い。貴様の名はなんだ。」

「…………カズキだ」

「ふむ、カズキか……光栄に思え、我に名を教えたのだからな。」

「恐悦至極……だな、英雄王！」

何度目かも解らないが、また斬りかかる。

「お前にはただの宝具では無駄なようだな。  
ならば、見せよう。この英雄王しか持ち得ない剣をな。」

「厄介だなー。」

攻撃出来る空気じゃないよ。

「起きろ——エア。」

金ぴかが握っているのは、剣と言うには歪な円筒型の剣だった。

円筒が回転すると、赤い魔力が迸り、その剣に内包された魔力を窺

わせる。

「いざ仰がん——天地乖離す（エヌマ）開闢の星を！」  
エリシュ

放たれたのは赤い暴風。

地面を抉り取りながら、俺を喰らおうと突き進んでくる。

が、

「マ・セシルド」

俺の前に円形の盾が現れ、金ぴかの攻撃を受けきる。

正直、トミネ程技巧があるわけでもなく、正面からの物量攻めや、力攻めじゃ楽でしかないんだよな。

「終わりだよ。英雄王。」

「馬鹿な……………」

放心している金ぴかに斬りかかる。

金ぴかはろくに防ぎもせずに斬られる。

「お前の負けだ。英雄王。」

「……………」

「お前が慢心せずに、本気で戦っていれば、もっと良い戦いになっていただろうな。」

「ふっ……………慢心せずして何が王か……………」

「お前は間違いなく王の器だよ。」



.....

「で、そろそろ起きたらどうだ………ギゼン？」

「『あははは、バレてたか？』」

起き上がる金ぴか……いや、ギゼン。

「何で、こんな面倒な事したんだよ？」

「『久々の登場だしね。』」

『皆の印象に残りたかったんだよ。』

『僕も男の子だし』

『括弧付けたくなるもんなんだよね。』」

「はぁーてことは当然……。」

「『うん。』」

『多分合ってると思うよ。』

『これが結晶だよ。』」

「無駄骨かあゝ」

「『無駄骨とは心外だな。』」

『これでも』

『本当に待ってたんだよ。』

『ギルガメ臭の格好で』

『ま』

『あんなあっさり負けるとは思ってもみなかったけどね。』」

「俺が地獄巡りしたのは何だったんだろうな？」

「『主人公に有りがちな急成長フラグだったんじゃないの？』」

『まあそれは置いといて』

『君は何しに来たんだい？』」

「今！ 今、その疑問に直面したの！  
だったら、今までの会話や戦闘はなんなの！」

「『冗談だよ』

『冗談』

『なんてことは無いアメリカンジョークだよ』」

「アメリカンジョーク……」

「『それよりも』

『これで残る大罪も後一つだよ』

『やったね！』

『終わりが見えてきた』」

「ところで、何でそんなテンション高いんだ？」

「『分からないの？』

『いや』

『分からないんだろうね』

『いつも出番がある主人公には出番なんて有って無きが如しの脇役

の気持ちなんて』

『分かるはず無いよね』

『画面の前の皆にも忘れられてるんじゃないかととても不安になるんだよ』」

「画面の前の皆？」

何言ってるんだ？      こいつ？

「『さあ』

『何はともあれ残る大罪は一つだ』

『ここからは僕も付いていくよ』

『二人で協力して最後の魔王を』

『そして』

『魔神を倒そうじゃないか！』」

「……………」

まだ微妙にキャラが安定してないのか？

「『ん？』」

『なんだい？』

『その顔は？』

『まるで』

『シヨートケーキのイチゴを最後まで残しておいたのに横から掠め取られて食べられた』

『みたいな顔をして』」

「そんな具体的な顔、してねえよ。」

してたとしても、一体どんな顔だよ。

………ヤバいな、話がまるで進まない。

それでもなんとかまとめて進めないと………

「『じゃあ』」

『次の魔王の所に行こうか』

『場所は分かってるんでしょ？』」

「……………なあ、会話のキャッチボールって知ってるか？」

「『知ってるよ』

『相手が捕れるギリギリの所に投げて』

『捕球力を高める練習の事だろう?』」

「違う!!」

どんだけ、しんどい練習方法だよ!

それに、それはただ片方のコントロールが悪いだけだ!

「『違うの?』

『それじゃあ』

『相手から来たボールをレシーブ・トス・アタックするあの球技?』

」

「そりゃバレーボールだ!」

「『もうバレーボールでも』

『ドッジボールでも』

『ラグビーボールでも』

『キャッチボールでも』

『バスケットボールでも』

『球技なら何でも良いじゃん』

「正解有ったぞ！

それにキャッチボールは球技じゃねえし！ それ以外は相手にボールぶついたり、奪ったりするもんじゃねえか！」

「『気にしない』

『気にしない』

『ほら行くよ』

『あんまりしつこいと心の傷開くよ』  
トラウマ

「ぐ、それは遠慮したいな。」

「『それならさっさと行くよ』」

「はいはい」

なんだかな



## 三十一話目

なんやかんやで、ギゼンと共に最後の魔王を倒すことになって数日。

考えてみると、この戦力じゃ相手の方が可哀想になるんだよな。

それに、相手の強さも俺が倒したミーちゃんや、ギゼンが倒したサタンよりも弱いらしい。

そう考えると余計に、な……

「はぁ……」

最近溜め息が増えた希ガス。

「『溜め息を吐くと幸せが逃げるよ』」

「逃がしてるんだよ」

「『それは失礼』」

『中々不思議なことをするんだね』」

「うっせ。」

「ぴゅう？」

「お前じゃねえよ。」

今、俺はギゼンを背負い、フェニと並行飛行している。

身長的には、ギゼンが子供化しているので薬だが、体重が変わらないのでどっこいどっこいだ。

身体能力的には関係無いが。

「『あれから数日飛んでるけどまだ着かないの？』」

『いい加減飽きてきたんだけど』」

「まだまだ掛かるぞ。

この星は地球よりもでかいから……地球一周位の距離が有るんじゃないかな？」

大体、地球の2，5倍のサイズがある。

2，5倍のサイズの癖に、何故1日が24時間なのかは謎だが。

この世界の天文学なんて興味なかったし。

「『随分と詳しいんだね』

『君がそんなに博学だとは思いましなかったよ』」

「あー……まあ、色々あったんだよ。」

本当に色々な……

「ぴいぴ……………」

お前もあつたよな……

「『……………』」

『その色々については聞かない方が良さそうだね』」

「そうしてくれ。」

……………

そんな感じで飛ぶこと数ヵ月。

着いた先はド派手で悪趣味な城。

何を思ってこんな城を建てたのだろうか、明らかに生活性よりも芸術性を追い求めている。

「『本当にここなの？』」

「地図ではここなんだが？」

目の前にある城門にも悪趣味な装飾がこれでもかという程施されている。

「入るぞ」

「『断る！』」

「出番が来て喜んでただろ。ほら」

「『嫌だ！』」

くそ、俺だって人としてこんな悪趣味な城なんて入りたくないのに、逃がす訳無いだろ。

「行くぞ。」

「『いーやーだー！』」

どこの駄々っ子だ。お前は！

ズルズルとギゼンを引き摺りながら、城に入っていく。

城門には、鍵などもなく普通に入れた。

セキュリテイ……………！

「うわぁ……………」

城の中も外見を裏切らない空間になっていた。

金ぴかの壺や花瓶を始め、派手過ぎる調度品の数々。

何を書いたのかも分からない絵画。

柱の一本一本にまで模様が鮮やかに刻まれている。

「『この花瓶……』」

『純金だよ……』」

「ああ、純金製だな。終わったら貰ってくか？」

売ればそこそこの値がつくだろう。

「『君はいらないのかい？』」

「金なんていらないよ。錬成出来るし。  
でも、この宝石はいいな、後で貰おう。」

ダイヤモンド、エメラルド、ルビー、紫水晶、トルコ石、サファイア、ラピスラズリ、アレキサンドライト、黒真珠、ガーネット、アクアマリン、俺の誕生石のトパーズまであるぞ。

それぞれ純度もいいし、かなりの御宝だ。

「良くこんな物を集められたな。  
俺でも錬成出来ないレベルだぞ。」

「『宝物のレベルは強欲の比じゃないね』  
『王の財宝に加えたい位だよ』  
『センスさえ良かったら』」

確かに純金で作られている物は、お世辞にもセンスが良いとは言い  
難い物ばかりだ。

黄金の林檎じゃなくて、黄金の苺とか。

もっと他にさあ、なんかあったでしょ。

「なんだったら後で俺が錬成し直してやろうか？  
写真や絵があればある程度のレベルに仕上げられるぞ。」

「『うーん』  
『そうだね考えとく』」



普通に話してるけど、これって強盗の会話なんだよねえ。

城主を倒して中の御宝かつさろうとか、当にだよ。

「『まあ良いじゃないか』  
『御宝の有効利用だよ』」

「読んだか？」

そういえば、こいつの能力には、読心術系が幾つかあったな。

「『御宝についてはこれで御仕舞い』  
『こんな空間にもう居たくないしさっさとしようぜ』」

「不自然に話題を変えたよな？」

でも、流れがまた変になってたし、ちょうど善かったか。

「『それにしてもこの城大きい上にごちゃごちゃし過ぎて構造が不可解になっているよ』

『何処に魔王が居るんだか皆目見当もつかないよ』」

魔王の居場所か……アネリアさんからの情報だし、この場所で間違いないんだろうけど……

考えられるのは、地下か天守つまり下か上だな。

この城の感じから、魔王は目立ちたがり屋だろうし、恐らく上だろうな。

「ギゼン。

多分、魔王は上にいると思う。」

「『根拠は?』」

「色々考えたが、半分勘だ。」

「『……………』」

『ふう』

『当たってると思うよ』

『見聞色の覇気で探ってみたけど人の気配は上にしかないから』  
『逆にいえばこのサイズの城に人が上にしか居ないんだよ。』」

「……………知ってたんなら言えや!!」

何を暢気に城の散策してたんだよ。

「『でもね』」

『さっきも言った通りこの城の構造は不可解なんだよねえ』」

「どう不可解なんだよ?」

「『ぶっちゃけ階段が無い』」

「……………はい？」

本当にこの魔王はなにがしたいんだ？

何故、階段を造らなかったんだ。

いや、俺の聞き違いかもしれない、うん。きっとそうだ。

「どういふ……事だ？」

「『だから』

『階段らしき物が一つも無いんだよ』

『上からロープが垂らされている所が幾つか在るんだけなんだ』」

聞き違いじゃなかったのか……。

ロープを垂らす位なら、こんな装飾をつける位なら、まず階段をつ  
けろよ。

「『どうする？』」

『ロープを登る？』」

「それしか無いだろ。」

階段を錬成するのも、建物のバランスを崩すだけだしな。

ロープの所までギゼンに連れられて歩いていく。

道中人っ子一人、モンスター一体とも出会わなかった。

「マジで誰も居ないな。」

「『でも』」

『沢山の監視カメラで録られてるよ』

『盗聴機も幾つか仕掛けられているみたいだし』」

「……………だから！ 何故言わない！」

「『えー』」

『そんなの言ってもしょうがないじゃん』」

「相手が機械なら対処法があるわ。

武装錬金“アリス・イン・ワンダーランド”」

電波欺瞞紙の武装錬金だ。  
チャフ

機械にも干渉して、幻覚等の偽の映像を見せることも出来る。

「これで、相手もマトモな情報を得られないだろ。」

「『あー』」

『そんなのもあったね』

『で』

『どんな幻覚を見せてるの？』」

「んー、自分が最も望む物が見えるようにしてるから、何が見える

かは相手次第だな。

ま、幸せな思いをしてるだろうよ。」

「『そうかな』

『おっと』

『着いたよ』

『このロープが上と繋がってるよ』」

「これか……………結構普通だな。」

上から垂れているのは至って普通の一本のロープ。

天井には、人一人が通れる程度の穴が空いている。

「一人づつしか無理みたいだな。」

「『そうだね』

『先に行って良いよ』」

「そうか。…………裏が在りそうで怖いからお前が先行けよ。」

「『遠慮なんてするなよ』

『僕達の仲だろ!』」

今、俺はきつとこいつをジト目で見てるだろうな。

「分かった。俺が先に登るが、何もするなよ。」

「『当然だよ』」

『僕が君に何かする筈無いだろ。』」

「……………胡散臭い。」

が、行くしかないだろう。

グッグッ

ロープを引っ張るが、しっかり固定されているようだ。

「『頑張れ』」

「頑張る。」



どうでもいいやり取りをして、登り始める。

すいすいと登って、最上階まで直ぐに辿り着いた。

「ふー、やっと着いた。」

「『お疲れ様』  
『待ってたよ』」

「……………何故居るし？」

「『アリバイ・ブロック腑罪証明』」

『僕の持つ一京分の一の能力スキルだよ』

『それにこのやり取り』

『潜水艦でしたよね？』」

「したような、しなかったような？」

「『それよりも行くよ』

『この先に魔王が居るから』」

ギゼンが指差す先には、今までの派手さが嘘のような質素な扉があった。

「……………ひどいギャップだな。」

「『入るよ』」

扉を開けて入って行くギゼン。

扉の先は……………

……………血の海でした。

「はっ。」

「『うわぁ……………えと……………』  
『なにこれ？』」

分かるぞギゼン。

これはコメントに困る。

「ぐ……………」

あ、血の海の真ん中に誰か倒れ伏してる。

「……………我が……………生涯に……………一片の悔い無し……………（だばだば）」

「鼻血だな。」

「『鼻血だね』」

この部屋の血の海の原因は、どうやらこいつの鼻血らしい。

「何でこうなった。」

「『十中八九君のせいだよ』」

ですよね。

仕方ないから“アリス・イン・ワンダーランド”を解除する。

「はっ！（ガバッ）……………（キヨロキヨロ）……………そ  
んな…………」

落ち込みすぎだろ。

「……………」

「『……………』」

「……………君達は？」

「魔王を倒しに来た者だ。」

「『そんな感じ』」

「……………そうか」

「お前が魔王で間違いないか。」

「……………（コクコク）」

「間違いないようだな。  
なら、討たせてもらう。」

剣を構えるが、

「……………（ブンブン）」

がぶりを振って必死に拒否する魔王。

「……………戦いとか…無理。」

「あー、色欲を司る魔王アスモデウスで間違いないんだよね？」

「……………（コクコク）」

なんなんだこいつは。

「『どうやら』

『この魔王は戦いとか支配とかじゃなくて頭の中はエロいことしかないみたいだよ。』」

「はーあ！」

「（ブンブンブンブンブン）」

「『カズキ』

『服脱いで』」

「ああ！」

いきなり何を言い出すんだこいつは？

「……………っ（だばだば）」

また、鼻血が！

「『いいから！』

『はやく』」

シュバツ「あつ、おい、ギゼン！」

なんて速業だ。上半身の服を全部持ってかれた。

「……………つつつ！（ブシユユユユユユ）」

鼻血が噴水みたいに噴き出す。

「あれ大丈夫なのか？

明らかに致死量以上の血が流れてるけど。」

「『大丈夫だよ』

『今回はギャグパートだから死なないと思うよ』」

「それでももう10リッター位出てるぞ。」

「『なら』

『服着ようよ』」

「お前が奪ったんだろうが！」

ギゼンに服を返してもらい着る。



「……………ナイス（だばだば）」

まだ流れてるぞ。

「『面白いね』

『次は』

『忍法骨肉細工』」

ゴキゴキゴキと嫌な音を奏でながら姿を変えていくギゼン。

「お前は何かしたいんだ？」

「私は、尾張幕府直轄預奉所軍所総監督奇策師とがめだ。」

変身を終えると、白髪小柄な美少女が全裸で立っていた。

「……………（ブシユユユユアドバドバドバ）」

また、倒れたな。

これで魔王を倒した事にならないかな？

まあ、それよりも、

「何で全裸なんだよ。」

「体の大きさが変わったからに決まっているだろう。しかし、どうだ？

私の奇策が見事に嵌まり、相手はもう虫の息ではないか。」

「確かに虫の息だよ。でも、ここまでやる必要ないだろ。」

ナイアガラ滝も真っ青な勢いで鼻血が流れ出している。

鼻からだけではなく、口や耳からも血が出ている。

生きてるのか？

俺達は直接何もしてないんだけどな。

「人間って、こんなに血が詰まってるんだな。」

「『出口は全部鼻だけどね』」

……………キーゼルバツハ部位が脆すぎるな。

まだ、うっすらと鼻血を流しながら起き上がる魔王アスモデウス。

「……………満足だ。（ツー）」

とても満ち足りた顔をしているアスモデウス。

こんなのが、色欲を司っているのか。

「……………お礼にこれをやろう。」

あっさりと結晶（血塗れ）を寄越してくる。

「軽いな。」

そもそも、結晶を大切にしていた魔王が一人も居なかったんじゃないかな？

「『ありがとう』

『えいっ』

『これはサービスだよ』」

ばっ「だから、脱がすな！」

「……………（ブシユユユユユユユユユユ）」

「『あははは』

『これがほんとの出血大サービスだね』

『それに』

『君もそろそろ認めたら？』

『女顔な事』」

「いくら女顔でも、俺は男だ！」

だいたい、体も男のそれな筈だ。

胸があるわけでもないし、一目見たら必ず解るだろうに。

「『ま』

『何はともあれようやく七つの大罪の結晶が全部揃ったね』

『後残すは魔神だけだ』

『力を合わせて絶対に勝つよ!』」

「無理矢理まとめやがった。」

血の海を背景にして言い切るギゼン。

## 三十二話目

「さて、魔王は全て倒した？ 筈なんだが、どうすれば良いんだ？」

ミーちゃんは結晶を使って呼び出すみたいな事言ってたし。

神は具体的な事を何一つ言っていなかったし。

「『うゝむ』

『取り敢えず結晶を一カ所に集めてみよう』」

「地面で直置きでいいよな。」

強欲・怠惰・嫉妬・傲慢・暴食・憤怒・色欲。

七つの大罪の結晶を全て揃えて地面に置く。

「……………何も起きないな。」

「『いや』

『これはきつと合言葉か何かがあるんだよ』

『例えば……………』

『出でよ！ 神r「止めろ！」……………』

『なんだよ突然』」

「それは流石にまずい気がした。」

仮に呼び出せたとしても、神違いだ。

「『願い事叶えてもらおうとしたのに』」

「願い事あったのかよ……………」

「『むっ』

『僕も人間だよ』

『願い事の一つや二つそれこそ数え切れない程あるよ』  
『人間を辞めてる君と違って』

「いや、まあ、確かに俺は自他共に認める人外だが、お前も大概だからな。」

「『失礼な事言うなあ』

『こんな普通に異常で過負荷な僕を人外扱いするなんて』

『僕は居ながらにして一本の刀だけど』

『人間を辞める気はないよ』」

「分かったから、そんな力説するな。」

「『君もなんか言ったらどうだい？』」

「えー。」

合言葉なんて分かるわけないだろ。





「フォローする気ゼロだよな！  
むせるほど笑いやがって！」

チクショウが、合言葉なんてこんなのか思いつかなかったんだよ。

「『何なんだろうね合言葉』

『やっぱりナメック』だから、止める！』……』

『籠球の何処が駄目なんだ！』」

「バスケットボールなら問題ねえよ！」

俺達は一切何の話をしていたんだっけ？

「一旦。落ち着こう。」

「『……………分かったよ』」

「まず、問題をもう一度確認しよう。」

魔王を全て倒した。

魔神の呼び出し方 or 居場所が分からない。

情報が少なすぎて結論を出せない。

「……………と、こんなもんだな。」

「『後一つあるよ』」

「なんだよ。」

「『一番最初に競争しようって言ったじゃないか』  
『その結果発表をしないと』」

「このタイミングでか？」

「『このタイミングだからだよ』

『こんなこと覚える人なんていないだろうから』

『早めに消化しておかないと消化不良になっちゃうよ』」

「はいはい。えっと、結果は……………」

俺↓傲慢・嫉妬・色欲？（正義）

ギゼン↓怠惰・暴食・憤怒

強欲同時？

「引き分けか？」

「『なんか納得いかない』

『今ここで決着をつけようか？』」

「それこそ止めてくれ。」

「お前とは相性が悪すぎる。」

見稽古とか、過負荷とか、対人戦に特化し過ぎだと思えます。

「引き分けて良いだろ？ 引き分け。  
お互い様で決着。」

「『いっそ全部をなかった事にしてもう一回やろうか？』  
『最初から、用意ドンから始めてやり直すと言うのは？』」

「止めてくれ。  
もう一回とかメンド過ぎる。  
それに、今までの苦労を台無しにする気か。」

「『『台無しか……………』』

『良いね』

『まるでアールピージーの強くてニューゲーム？みたいな感じかい？』

『装備はそのままもう一周みたいない！』

『もしかしたら隠しダンジョン出現とか？』」

「いい加減止めろ！  
なんか、だんだん本当にしそうな気がしてきたぞ。」

「『隠しダンジョンで裏ボスを倒して最強武器入手とか夢があるよね』」

「まだ、ラスボスも倒してないのに、裏ボスの話なんかするなよ。」

裏ボスなんか居たとしたら、それはきっと、‘ア’の付くあの人だ。

「だからやるなよ。絶対にやるなよ！」

「『押すな押すなよのノリだね』  
『もちろん分かってるよ』」

「違う！」

最終決戦前に何をしてるんだろ？

俺達は。

「『えー』」

「『えー』じゃない！」

俺は！ マジでそろそろこの神のお遊びを終わらせたいんだよ！」

終わった後にどうなるかは分からないが、なんとかいい加減終わらせたいと思っている。

転生して自由なら良いが、目的があって、それを優先しなきゃいけないのが、今更ながらキツイ。

「はぁ……まったく……」

とにかく、今ここではどうしようもないので、結晶を回収して………して。

あれ？

結晶は何処に？

辺りをキョロキョロと探すが見当たらない。

となると、考えられるのは一つ。

「ギゼン。

結晶をどうした？」

「『どうもしないよ』

『ほら→』」

上か？

ギゼンが指差す方向に確かに結晶が在った。

中空で七つがくるくると廻っている。

うっわ、すっげえ嫌な予感がする。



「なあ、何で廻ってるんだ？」

「『いろいろとスキルを組み合わせてやってるんだ』  
『結構神経使うんだよ』」

「さいですか。」

変わらず廻り続ける結晶達。

「さっさと、廻すの止めて下ろしてくれないか。」

「『ねえ』」

「何だ？」

「『これって』」

『願いを叶えた後の龍球みたいじゃない？』」

「……………まさか…冗談だよな……………」

「『ニコリ』」

「止めろよ？」

「『あ』」

『それではみなさんご唱和ください』

『It's All Fiction!!』」

「バカヤロー!!」

結晶は散り散りに飛んでいってしまった。

「なんてことしてくれたんだよ！  
集め直しじゃねえか！」

「『いやー』」

『見事に七方向に別れたね』」

「今まで、集めるのにどれだけ掛かったと思っているんだ！」

「『これって』」

『あれかな？』

『一年間石になるのかな？』

『倒したという事をなかった事にしただけだから結晶は手元に戻っただけかな？』」

「世界中に散らばったんだぞ！  
もしかしたら、居場所を変える魔王も居るかもしれない。」

「『夢が広がるね』」

『二周目は目指せ、完全クリア、だね』」

「そうだ！ 腕輪は？ レヴィアタンの腕輪が……………無くなってるー！」

ちょっと待てよ！ レヴィアタンは魔改造されてるんだぞ。  
多分、魔王の中でも最強になっちまってるぞ！」

「『出来れば全部のモンスターを見てみたいね』  
『他にも貴重品を全部集めるとか？』」

「話を聞けー！  
お前、もう魔王を倒す気無いだろ。  
なあ、無いんだろ？」

「『何を言ってるんだ』  
『その通りだよ』」

「ほらー！」

ダメダコイツハヤクナントカシナイト。

「『まあまあ』」

『そんな些細な事はもうどうでも良いじゃん』」

「些細な事じゃないだろがー！」

「『そう言えば』

『君の肩にいる鳥だけど』

『可愛いね』

『僕も何か動物を飼おうかな？』」

「話を代えるな！

いや、そもそも最初から話が噛み合っていないぞ！」

「『飼うならやっぱり犬？』

『それとも最近流行りの珍しい動物？』

『また新しい目的が出来た』

『さて』

『先ずは何処に行こうかな？』」

「無視か？

無視をするのかこの状況で、こっちはお前のせいでこんなに怒ってるんだぞ！」

「『うるさい』」

『ろくでなしが!』」

「お前が言うな――!」

「『???』」

『叫ばないでよ』

『あー』

『耳が痛い』」

「あ、悪い……………じゃなくて。

……………はあ。

もういい。

諦めた。」

「『許して……………くれるのか?』」

「許すかつ!」

「『あはっ』

『それは残念』」

「諦めたから、速攻で結晶を集め直す。

“ヘルメス・ドライブ”使っても終わらせる。」

「『うわぁ』

『本気だ』

『大人気ない』」

ブチッ

「『あれ？』

『何か切れなかった？』」

クロス

「ディオガ・グラビドン」

「『きゃー！』」

『殺されるー！』」

カワシヤガツタ

「ジオウ・レンズ・ザケルガ」

多角同時攻撃ナラドウダ

「『はっ』」

『よっ』

『ほっ』

『よいしょっ』」

ナラバ

「シン・バベルガ・グラビドン」

ツブレロ



「『わあー』」

『こんな広範囲攻撃かわせないよ』」

ズズウウウウウウウン！！

底が見えない程地面が陥没してしまった。

だが、後悔も反省もしていない。

「ふう。

少しはすっきりしたな。

ギゼンも殺して死ぬようなやつじゃないし、仮に死んでも生き返るから心配ないだろ。」

「『わあ』」

『僕ってそんなに信用されてるんだ』

『とても嬉しいよ』」

やっぱな。

「九割九分九厘はそのまま死んで欲しかったけどな。」

「『でも』

『一厘は生き残って欲しかったって事だよね』

『いやー』

『やっぱり僕って愛される存在だなー！』」

これはポジティブなのか？

「まあいい。

それじゃあ、さっさと集めるとしよう。

お前はもうやる気無いんだろ？」

「『やる気が無いとは失礼な』

『僕だって責任を感じることもあるんだよ』」

「じゃあ、手伝うのか？」

「ヤ・ダ。」

「シン・ベルワン・バオウ・ザケルガー……………」

しかもコイツ括弧付けずに言い切りやがった。

「『わぁー』

『“全て遠き理想郷”（アヴァロン）』」

待て待て！

何で、王の財宝にその鞘が入ってるんだよ。

……………防ぎられました……………。

あれ？ おかしいな、これは俺の中でも最強級の攻撃なのに……………  
…あ、目から汗が……………

「『流石に危なかったよ』  
『それよりも』

『この惨状どうするのさ?』

『草原が更地に成っちゃってるよ』

目の前の巨大な穴に、雷の影響で焼け焦げ土が剥き出しになっている地面。

誰もここが数十分前まで緑豊かな草原だったとは信じないだろう。

「……………」

「『どうする?』」

「大嘘憑き（オールフィクション）”でなかった事に……………」

「『君の能力には効かないんだよね』  
『残念だけど』」

「……………（泣）」

仕方なく、錬金術でコツコツ直していった。

「やっと……終わった。」

あれから、草原を元通りにするのに大分かかって完了した。

「『お疲れ様だね』

『見てて愉快だったよ』

『怒りに我を忘れて暴れたのに』

『その後始末は全部自分でするなんてね』

『まさに』

『自業自得だよ』」

「はぁ……俺は、行くよ。」

これ以上話しても疲れるだけだ。

この鬱憤は魔王で晴らさせてもらおうでしょう。

「じゃあな、お前とはもう行動を共にしたくないな。」

「『そうかい』

『でも』

『そうはならないと思うよ』」

「ばいばい、セリヌンティウス」

「『走れ、メロス』」

「武装錬金・ヘルメス・ドライブ」

まずは、マモンからいくか。

ここからは台詞のみ。

「久しぶりだな。」

「ぬう、貴様は「バオウ・ザケルガ」ぐああああ」

「二つ目」

「次はレヴィアタンかな。  
躰直してやるぜ。」

ヘルメス・ドライブ」

「ムッ、主力。」

「オス、どうする？  
俺と……殺るか？」

「今更、必要ナイ。  
コレデアロウ？」

「サンキュー。」

二つ目だな。」

「次は、ルシファーか。

制限下では面白くなりそうだが、本気でいかせてもらうか。」

「ふっ、お前と再び相見えることになろうとはな。

“ヘレル・バン・サハル”」

「はい、どーん！」

「ぐはっ」

「三つ目」

「次は、アスモデウスだな。

戦闘なしで、大人しく渡すだろう。ヘルメス・ドライブ」

「寄越せ。」



「……………（コクコク）」

「四つ目」

「残りは、アネリアさんに聞いた地図の場所に行くか。上空を全力で走ればすぐだろう。」

「コイツが怠惰のベルフェゴールか。」

「グオー……グオー……」

「えーと。ギャン・バギラム・ソルドン」

「グオーガフツア」

「……………五つ目」

「暴食、ベルゼブブ。  
見た目完全に蠅だな。肥溜めだし。」

『ナンダ、マタ人間カ？  
我等ノ餌ニデモナリニキタノカ？』

「万象一切灰塵と為せ“流刃若火”  
燃え散れ。」

『グオオオオオオオオ！！』

「ひでえ、臭いだ。  
何はともあれ、」

「六つ目」

「最後はサタンか。」

「誰だ！ 貴様は！」

「<sup>セロ</sup>虚閃」

「―――!?!」

「七つ目」

「終了!」

終わった。

後は、アネリアさんにも魔神ついて聞けばいいだろう。

一先ずはこれで安心だ。

さあ、寝よ寝よ。

## 三十三話目

「んー！……………ああ……………よく寝た……………  
もう、昼か……………」

一年近くかけた旅路をほぼ1日で踏破したんだ。

今日位はのんびりしてもバチは当たらんذار。

「決めた。

今日は絶対、ゴロゴロと自堕落に暮らす。」

結晶は全部揃ってるんだ。

焦らなくても、十二分に間に合うだろう。

そうと決まれば二度寝だ。

「……………お休み……………」

.....

前も後も、右も左も、上も下も、果てなく真っ白な空間で俺は目を覚ました。

「知らなくもない天井だ。」

ここに来たのは、通算三度目だな。

「久しぶりだね。」

「やっぱりあんたか。」

そこには俺をこの世界に送り込んだ神が立っていた。

「とうとう、終わりの間近になってきたからね。」

ここで、魔神を倒したらどうなるか教えてあげようかと思ってね。

「

「そうか。」

その前に一つ聞いておきたいんだが、アネリアさんに、俺はあんたを越えていると言われたんだが、本当に俺は一応は神であるあんたを越えているのか？」

「うーん………難しいね。」

確かにこと戦闘に関しては、君は僕を越えているだろうが………それ以外は無理だろうね。」

「それだけ分かれれば十分だよ。」

さっ、魔神を倒した後の説明をしてくれ。」

「自分から聞いていたんだよね？」

はあ……まあ、良いけど。」

君は随分自由を欲しがっていたよね。」

「ん？ ああ、そうだな。」

言ってた気がする。」

「という訳で、君には魔神を倒した後はまた、違う世界に行って貰って。」

そこで、自由に暮らしてもらおうと思ってるんだ。」

「ほう……それは魅力的な相談だな。」

「そうでしょ。」

あ、ギゼン君はもう了承して貰ってるよ。」

「あいつなら、勝手に世界を渡れそうだけどな。」

「……………僕が与えた能力で僕が作った世界の理を超えることは出来ないよ。」

「所詮は借り物の力って事か。」

「次の世界では力を完全に馴染ませるから、僕を超えられるかもしれないね。」

数千年の努力があるだろうけどね。」

「数千……人の寿命じゃ無理だろ。」

「君、もう人間じゃ無いじゃん。」

最高位の天使の力を取り込んで何を言ってるんだよ。」

「それでも神には届かないんだろ。」

「あくまで、最上級神の僕に……だよ。」

上級神レベルなら、互角の存在だと思うよ。」

「それだったら、魔神相手でも楽勝だな。」

「ん、魔神は上級神レベルだよ。」

戦闘力だけなら……最上級神にギリギリ食い付いていけるかな？ぐ  
らいの強さを持ってるし。」

「さいですか。」



結局は互角な訳ね。

「そろそろ時間かな。」

魔神を倒して、しばらくしたらまたここに呼ぶから頑張っ  
てね。もし、負けて死んだら輪廻の環から追い出すよ。」

「つまり、死んだら輪廻転生出来ない。」

「そゆこと。」

死んだら未来永劫亡者として漂ってもらおうから。」

「なんて、ハイリスクなんだろう。」

死ぬ確率が低いと言えど、ハイリスクなのは変わらないな。

「じゃあ、バイバイ。」

また、会えることを願ってるよ。」

「そうだな。魔神を倒して終わらしてくるよ。」

だんだんと沈んでいく意識。

この感覚にも慣れてきたな。

「生き残れるかな？——君♪」

.....

「ん.....戻って来たのか。」

目が覚めた。

宿の窓から赤い夕焼けが見える事から、時間の経過がうかがえる。

「結構、向こうに居たんだな。」

ぐうく……………

「そういえば…昨日から何も食べてなかったな。  
何か食べるか。」

部屋から出て町に繰り出し、適当な料理屋で食事を済ませた。

ちなみに、可もなく不可もなくな味だった。

「明日にはギルドに行つて、アネリアさんに話を聞かか。」

アネリアさんだったら知らない事はないだろ。

「軽く体を動かしてまた寝よ。  
うん。明日から本気出す。」

大丈夫。明日出来る事は明日すれば良いさ。

「さっさと戻るか。」

宿屋に戻ってからは、軽く型の反復をして、風呂に入ってから、寝た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2525v/>

---

チート・トリップ

2011年11月10日13時03分発行